るい庭の方へすつと逃げて行つた。すると庭の方を見下して二階の廊下に立つてゐる自分の姿が浮んできた。（豐島與志雄）

❦ 足音は窓の下に來て、はたと止つた。すると同時に人の氣はひがして、其呼吸が戸にかゝるやうに思へた。私もそれにつれて呼吸をひそめて、その外の人を覗ふやうにした。さうすると、胸は大波をうつて、血が頭に集つて來るやうだ。何とも云へない心持になつて、外で第二の音をさせるのを待つて居ると、外の方でも身じろぎもせぬやうである。（葉舟）

❦ 頭の中の狀態がかういふ風に眺められた。葉の茂つた竹藪が頭中擴がつてゐる。墨繪のやうに、葦も枝も黑竹だ、そとが風でザワ〳〵鳴り續ける。なかに細い銀の竹もまざつてゐて、黑い竹藪全體がゆれる工合でチカ〳〵光る。それが左の耳に起る痛みなのだ。（里見弴）

❦ 彼には絕えず幻が見えた。それが皆奇體な幻であつた——わけても度々彼の前に描き出されたのは、彼がアフリカの何處かに、エジプトに、或るオアシスにゐる事であつた。隊商が休んでゐる。駱駝がおとなしく寢そべつてゐる。四邊には一面に椰子が繁茂してゐる。一同は食事をしてゐる。彼は傍らに流れ呟いてゐる流れに口をつけて、絕えず水を飲んでゐる。非常に涼しい。そして、不思議な〳〵、空色した冷たい水は、色さま〴〵な石と、金色に輝く美しい砂の上を走つてゐる……不意に彼は、時計の打つのをはつきりと

聞いた。彼は身顫ひしてわれに返り、頭を擡げて窓を見やりながら、時刻を考へた。（ドストエーフスキー・白葉譯）

❦ 私は室の戸口を半開にして置いた、さうして小さなもの音にまで私はかの女が來たのではないかと思つて身ぶるひして目をさました。私は一分間に百度も眠つた。廊下で電話がしきりに泣きわめいた、然し赤いランプの下でぐつすり寢こんでゐる當直のボーイは電話を慰めには來なかつた。闇の中で英國直輸入の家具が干われた。目がさめる度に私は自分の頭の隣にある冷たくふくらんだ枕と、鏡が用水桶の埃だらけの水の面に導いて反射させる月光によつて照らされてはてしなく廣く見える室とを眺めるのであつた。

（モオラン・堀口大學譯）

感覺

❦ 誰も人通りはない。さつき走るやうに坂を下つて求めた、呼吸困難がまだ去らない。彼は、しづかに心を落ちつかせるために、汗ばんだ額を、一むれのげんげ草の中につつこんだ。草はらに身をうつぶせたのである。甘い花の匂ひ、冷いやりとした草の肌ざはりが、心の底にまでしみこんだ。彼女の移り香が、その時ふと、彼の存在を脅すやうに、然しなつかしく生きかへつて來た。（片岡鐵兵）

❦ ある夜、彼が一人きりでひろびろとした流し場

にしやがんで顏を洗つてゐると、ふと板一重に區切られた女湯の方からかすかに水を流す音が聞えてきた。その音は幽玄なひゞきをもつて彼の耳にせまつてきたのだ。彼は慌てゝ立ちあがつた。それはほとんど一つの衝動であつた。彼の心の底深くかくされた神祕な要求が發作的に彼を不安にしたのだ。そのとき彼の右側に板の區切りによつて折半されてゐる流し湯の溜があつた。鏡のやうに澄んだ湯の面に彼の視線が吸ひこまれたとき、彼はそこに異常な生命の輪廓のうかんでゐるのを見た。それはおどろきであるよりも以上に不安であつた。ふくよかな曲線は鏡の上に若々しい彈力を感じさせた。しかし、それは一瞬間にしか過ぎなかつた。小さい湯桶を持つた白い手が「流し湯」の中に伸びて、湯の動搖のために生命の表情は消えてしまつた。（尾崎士郎）

❦ 金さんの妹が歸つて行くと庄吉は急に淋しさを覺えた。そして今迄知らなかつた強いお化粧の匂ひがいつまでも彼の鼻に殘つてゐた。彼はその頃から、道を歩くにもぢつと人の顏を覗いて通つた。首を少し前につき出して、通る人の顏や懷の當りをぢつと見てやるのが、何だか嬉しくてたまらなかつた。そつと覗き見らるゝやうなものが至る所にあつた。

聽覺と視覺とが鋭く庄吉に發達してきた。其處から一種の力が彼の心に湧いた。そしてその力が、或る神祕な、運命とでも云つたやうなものに絡みついていつた。（豐島與志雄）

❦ 彼は唐獅子の方へ歩み寄つた。そして尾の所へ。もたれかゝつた。石の冷たさが着物越しに全身に傳はつてきて、はつと飛びのいたが、像の頭から足先まで見調べて、再びそれによりかゝつた。すると此度は、石の冷たい感觸が、熱に浮かされたやうな彼の頭を鎭めてくれた。彼は大きく息をして、あたりを見廻した。夜はもうだいぶ更けてゐるらしかつた。（豐島與志雄）

❦ 延びるが儘に延びた雜草の蒸れたいきれが鼻をつく。潮の香にばかり馴染んでゐた身には、それさへ珍しく懷しかつた。ステツキを振り上げて無闇にうち叩く道ばたの名無草の花は青臭い匂ひをたてゝ亂れ散つた。（水上瀧太郎）

❦ 女作者は思ひがけなく懷しいものについと袖をとられたやうな心持で、目で見張つてその微笑の口許にいつぱいに自分の心を啣ませてゐると、おのづと女作者の胸の中には、自分の好きな人に對する或る感じがおしろい刷毛が皮膚にさはるやうに柔かな刺戟でまつはつて來る。其感じは丁度白絹に襲ねた青磁色の小口がほんのりと流れてゐるやうな、品の好いすつきりした古めかしい匂ひを含んだ好いた感じなのである。（田村俊子）

❦ 僕はゲルダさんの光澤のある組髮を思ひ浮べてゐると、又あの細い顏を思ひ浮べてゐると、それはあの碧い兩眼が殆ど無理矢理に欲めこまれてゐるやうに見えるあの優しい細い顏さ、あれを思ひ浮べてゐるとそして青や薔薇色や金色のまぼろしを眼前に描いてゐ

ると、さうすると僕の胸の水落の所が、何だか斯うちくちくと、殆ど痛むやうな感じを覺えるのだ。

（カイゼルリンク・中島清譯）

二人が歩いてゐるうちに、太陽が昇つて、花園をあかるく照らした。暑くなつた。コウリンは長い、晴れ渡つた日が自分の前にあることを思つた時に、今はやつと五月の始めで、自分の前には、一夏の長い、晴れ渡つた、樂しい日のあることを思ひ出した。と不意に子供の頃に、此の同じ花園で遊んだ時に感じたやうな樂しい、若々しい感情が身内をめぐつて脈搏つた。（チエエホフ・前田晁譯）

わたしは眠る——長い間——大抵二三時間も——すると夢を——いや——夢魔がわたしを捉へる。わたしは自分が床の中で眠つてゐるのを感じる——わたしはそれを感じ、それを知つてゐる——そして、わたしはまた誰かがわたしの傍に近づいて來て、ぢつとわたしを見詰め、わたしに手を觸れ、わたしの床の上に上つて來て、胸の上に膝を突き、兩手の間にわたしの頸を入れてぐつとそれを絞め付ける——全力を籠めてわたしを絞め殺さうとしてそれを絞め付けるのを感じる。（モウパッサン・前田晁譯）

夜の柔らかな空氣が輕い呼吸で、天鵞絨のやうな呼吸ではひつて來て、時々彼女の顏の上を氣も附かないほどにやさしく撫でて行つた。それは風のキスのやうな、すべての木の葉とすべての夜の影とで、川の霧で、そしてまたすべての花で、作られた扇の緩い爽かな息吹のやうな愛撫であつた。（モウパッサン・前田晁譯）

『わたくしは初めてあの女に逢ひました時に、不思議な感覺を覺えました。それは驚いたのでもなければ感心したのでもございません、また「一と目で惚れる」といはれてゐるものでもございません、丁度微溫湯へでも投げ込まれたやうな樂しい愉快な感じでございました。あの女の樣子がわたくしを迷はしました、あの女の聲がわたくしをうつとりさせました。あの女の身體全體がわたくしに、見ると無限な快樂を與へました。また、わたくしが長い以前からあの女を知つてゐたやうに、わたくしが既にあの女を見たことがあるやうに見えました。あの女はわたくし自身の靈魂のある物を其の身體のうちに持つて居りました……（モウパッサン・前田晁譯）

彼女はいゝ香ひがしてゐた。けれども彼は彼女の周圍に漂つてゐる輕いぱつとした香ひの何かといふことをはつきりときめることは出來なかつた。それは彼女の母親のあの重たい香ひのやうなものではなかつた。もつと控へ目な呼吸で、彼は其處に菖蒲の粉かと思はれるやうな、また恐らくは美女櫻かと思はれるやうな香ひを捉へ得たと思つた。

この言葉にされないやうな香ひは、何處から來るのか？　彼女の衣服からか、髪の毛からか、それとも皮膚からか？　彼はそれを解き明らめようとした、そして彼は、彼女が直き傍で話した時に、彼女の新鮮な、吸ひ込むのがまた非常に愉快に思はれた息吹をまとも

に受けた。そこで彼は今しも認めようとしてゐた此の逃げ行く香りは、恐らくはたゞ彼女の魅するやうな目で喚起されたもので、彼女の若い、誘惑するやうな愛嬌の一種の虚僞の發散物に過ぎなかつたと考へた。

（モウパツサン・前田晁譯）

病

十一月から病床に横はつた光子の容態は、三月になつても殆んど先の見當がつかなかつた。三十九度内外の熱が少し靜まると、胸の疼痛が來たり、また激しい咳に襲はれたりした。咳が少しいゝと思ふとまた高い熱に惱まされた。また不眠の狀態と嗜眠の狀態とが交々彼女の單調な病床にやつて來た。そしてそれらの變化の背後には、絶えざる食慾不振と衰弱とが在つた。凡てが混沌として先の豫想を許さなかつた。（豐島與志雄）

かすかな呼吸が亂れて來ると、喉のあたりに長く引いた吸氣の痰に妨げらるゝ音がした。そして殆んど本能的に幾つもの空咳が爲された。呼吸の數が不齊になり、頰の赤みが增してくる。そして喉にからまる痰の音が、はつきり聞えるやうになる。それが暫くの間續いた。衰弱と長い習慣とのため、別に努力を爲されなかつた。そしてやがて、ぐつと何かつまつたやうな音がすると、かつと痰が口腔の中に吐き出された。

看護婦は小さく切つた紙片を彼女の肩にあてゝ、その痰を彼女の舌の先から拭ひ取つた。（豐島與志雄）

光子は床の上に仰向けに倒れてゐた。齒をくひしばり、眼は上眼瞼のうちに引きつけて白眼ばかりが覗いてゐた。そしてしきりに兩手で胸の所を搔きむしるやうにしてゐたが、その手は胸に屆いてゐなかつた。胸の中で、ぐゝゝゝと物の鳴る音がした。その息をつめた瞬間が、執拗な生命が自分の上に押しかぶさつた物をはねのけやうとしてゐる時間が、どれだけ續いたか誰も知らなかつた。そして終りに何かぐるつといふ響きが胸の中に轉ると、かつと眞紅な血潮が彼女の口から迸り出た。そしてその血潮の中に彼女はぐつたりと手を伸した。はゝつと長く引いた輕い呼氣が彼女の血にまみれた口から出た。（豐島與志雄）

よく寢入つてゐる時もあつた。鼻の先が尖つて頰の豐かな肉は、いつしか落ち盡して骨だけが出てゐる。小さな唇の色は白く乾いてゐるけれど、たゞ二つの眼の色だけは青く澄んで冴え切つてゐた。（未明）

枕許に坐り込んで、見るともなく見てゐると、妹の腕は父の云つたやうに朽色をして、唇にも目蓋にも生氣がなかつた。吐く息が腐つた果物か何かの臭ひのやうに臭くなつて、自ら顏が背けられた。（白鳥）

それぎりもう彼は眠る所にしてゐた暗い押入から離れなかつた。その穴の中の方で彼が咳いたり、喘いだり、轉びまはつたりしてゐるのが聞かれた。樣子を見たり、藥を飲ませたり、吸角を當てたりするには

入口の方に蠟燭を持つて行かねばならなかつた。すると長い蓬々とした髯の生えた小さな顔が、空氣が動くとゆら〳〵した蜘蛛の巣の厚いレエス細工の下に見えてゐた。そして病人の手は汚れた上掛の下に死んだやうになつて見えてゐた。（モウパッサン・前田晁譯）

婆さんはいろ〳〵と考へて見た末、氣分が少しはよさそうだつたので、午前に床をはなれることにした。そして彼女は仕事をはじめたのだが、それでも、一時は起きたことを後悔したのだつた。彼女は立つてゐたが、急にぐらぐらして、前にのめるか、仰向けさまに倒れるかと、彼女自身に問うて見るのだつた。彼女は壁に身をすりよせ、しつかりとそこに身體を支へた。と、突然、彼女は、もしや横なぐりにぶつ倒れるのではないかと思はれた。（フィリップ・小牧近江譯）

彼はすぐと、これはたゞならぬことが起つたのだと思つて彼女を眞正面から見つめた。いや、彼女のあの血色では別段病人らしいとも思へない。だが、ただ見たところ何ものかがチュルバン爺さんを不審に思はせた。といふのは、平常なら彼女の面ざしは他の女たちにもあり勝な氣苦勞性に見えた。彼女はいつも世間並に家事や、その他こまごまの事をきちんとさせることに氣をつかつてるやうに思はれてゐたのだが、その夜に限つて彼女の面貌はぐつとたるんで、日常生活のごたごたなどには一切氣をつかはないやうに見受けられた。（フィリップ・小牧近江譯）

死

AFはその死んで居る妻の顏の上へ彼の顏を翳して居た。私はAFの顏に自分の顏を並べてその女の顏を覗き込んだ。異樣な美しさが、白い大きな枕の上にその顏を埋めて居る。私はぢつとそれを見入つた。今枕もとの小卓の上に置かれた燭臺からの光が、その女の顏を少し斜に上から照して居た。女と云ふよりも未だ少女であつた。光を上から受けたやゝ廣い額があつた。それがその顏全體の上に或神祕的な趣を與へた。切れの長い眼がごく柔かに瞑られてあつた。（佐藤春夫）

庄吉はぱつと明るいものに眼が眩むやうに覺えた。何だか黑い影が彼の心から逃げて行つた。或る大きいものが彼の上で羽搏きをした。そして彼は擾亂と熱火とのうちに卷き込まれた。それから最後に冷たいものを全身に感じた。

彼は疾走してくる電車に觸れたのであつた。電車は留まる間もなく、一二間彼を救助網につゝかけて走つたが、遂に車輪の下に彼を轢いた。

もう夜遲くであつた。腦味噌を露出し片腕を斷ち切られた彼の身體が、無慘に地面の上に横はつてゐた。（豐島與志雄）

彼の呼吸は、一息毎に細くなつて數さへ次第に減じて行く。喉ももう今では動かない。うす痘痕の浮

んでゐる、どこか蠟のやうな小さい顔、遙な空間を見据ゑて居る光の褪せた瞳の色、さうして頤にのびてゐる銀のやうな白い髭――すべてが人情の冷さに凍てついて、やがて赴くべき寂光土を、ぢつと夢みてゐるやうに思はれる。（芥川龍之介）

『あの女は考へました、あの女は笑ひました、あの女はわたくしを愛しました！　かういふすべてのものが一つとして殘つては居りません。秋死ぬ蠅は創造界に於ける我々と同じことです。何物も殘りません。そしてわたくしは、あの女の身體が、あの暖かな、あの柔らかな、あの白い、あの美しい、あの女の鮮かな身體が墓の底の箱の中で腐れて行くのだと考へました。そしてあの女の魂は、あの女の思想は、何處へ行きます！

『もう決して二度とあの女を見ることはないのです！　もう決して二度とあの女を見ることはないのです！

『わたくしにはなほあり〳〵と認められるこの腐れかけてゐる死體の觀念が、わたくしに附き纏ひました。そしてわたくしはもう一度、もう一度あの女を見たいと思ひました！（モウパッサン・前田晁譯）

老婆は、いつものやうに素頭だつた。白髮混りの、薄い、明色の髮は、例の通り油でコテ〳〵にされてゐて、鼠の尻尾のやうに編まれ、角形の櫛に卷かれて後の方へとび出てゐた。打擊は腦天へ加へられた。それは、彼女の低い脊の爲めだつた。彼女は悲鳴を上げた。併し、極めて微かだつた。そして辛うじて頭へ

兩手を擧げたかと思ふと、忽ち床の上へ崩折れて了つた。でも彼女は、尙一方の手に、貫草を持つたまゝだつた。其處で彼は力任せに、二度三度と、双の方ばかりで、腦天を打續けた。血はわれたコップからのやうに迸つた。そして身體は後ろへ仆れた。彼は身をひいて、仆れさせて、直ぐさま彼女の顏の上へ屈み込んだ。彼女はもう死んでゐた。眼はまるで飛出しさうに露出し、額と顏面とは、痙攣の爲めに顰んで、醜くなつてゐた。（ドストエーフスキー・白葉譯）

それからまた他の種類の死がある。北方の海北方の暴風を想像せよ。風は帆を一杯に張らせ、海を激しく打つて、白く泡立せてゐる。一雙の漁船が灰色の波の上に漂つてゐる。灰色の日は靑ざめた日沒に溶け込む。燈臺の閃きが遠いところに現れる――始めは赤く、それから白く、また赤く。人々は船首に身動きもせず、綱にしつかりとしがみついてゐる。波浪は吼え雨は飛沫く……

その時不意に、風の唸りを透して、靜かに鳴る鐘が聞える。鐘は水中に在つて、小舟の低い脇腹を打つて、鳴つてゐる。それは浮標鑵だ。砂堤にぶつかつたのだ。それは死を意味する……それからまた其處には、風と、空と、波浪とがあるが、人々は最早見られないのだ……（ロープシン・靑野季吉譯）

「エレーナ！」と云ふ聲が、判然彼女の耳に響いた。彼女は素早く頭を擧げて振り返ると同時にうつとりした。雪のやうに、今の夢の中の雪のやうに白いイ

ンサロフが、寢椅子から半分起き上つて、大きなぎらぎらした恐ろしい目をして彼女を瞶めて居た。亂れた髪の毛が額にかゝつて、脣が變てこに開いた。恐怖が、柔しい心遣ひに混つて、急に變つた彼の顏に現はれて居た。

「エレーナ！」彼は明瞭と言つた。「僕は死ぬるよ。」

彼女は聲を立てゝ跪いて、彼の胸に抱きついた。

「皆んなおしまひだ。」インサロフはまた言つた。「僕は死ぬるよ……左樣なら、僕の可哀さうな娘！　左樣なら、僕の祖國！」さうして彼は、寢椅子に仆れた。

（ツルゲエネフ・田中純譯）

『寢床のまんま持つて行かうか？　それとも身體ばかりにしようか？』と一人が訊いた。

『身體ばかりさ。寢床を置く場所なんか有りやしねえ。ちえッ、惡い時に死にやがつた。なむあみだぶつ！』

そこで――一人がミハイロフの肩を持つと、一人が足を持つて――彼を持ち上げた。すると、上衣の襞が空中にひら〳〵と下がつた。弟三の男――それは女のやうな百姓であつた――が十字を切つた。そして三人共に足を引きずるやうに歩き乍ら、上衣の襞を踏み躪み病室から出て行つた。

眠つてゐる男の胸がひゆう〳〵鳴つて、色々の調子で歌つてゐた。パシカはそれを聞いて、恐ろしさうに黑い窓を見入つてゐたが、あはてゝ寢床から飛び出した。

『おかあ！』と彼は叫んだ。（チエエホフ・前田晃譯）

其處は人間が最早悲嘆の叫びを聞かないところまた生命あるもの一切の悲しい破綻の絕對に無くなつたところである。

其處はたゞ馨はしい百合の花が芳香を放つてばかり居るところ、爛漫として咲きほこつた花の野が密甘き匂を斜に風に送つてばかり居るところ、また、星の如き河の流れが萬の色彩の石床の上を瀨と輝かして行き、夜の闇の絕えて訪れないところ……

其處は、たちのぼる香の煙の如く、靜かな祈禱が匂ひの雲となるべく永劫にのぼつて行く處、そして鐘が鳴り、オルガンが柔かに響き、そして罪を償はれた人人が、天使と聖者と諸共に、聖なる不滅の都の聖なる教會堂のなかで神への讃歌を歌つて居るところである。

さうだ。弱り弱つて安息を憧憬れながら、其處にクバの魂は天翔りして行づたのである。

（レイモント・朝鳥譯）

戰爭

フリードランドの平原では、朝日が昇ると、ナポレオンの主力の大軍がニエメン河を横斷してロシアの陣營へ向つていつた。しかし、今や彼らは連戰連勝の榮光の頂點で、盡く彼らの過去に殺戮した血色のた

めに氣が狂つてゐた。

ナポレオンは河岸の丘の上からそれらの軍兵を眺めてゐた。騎兵と歩兵と砲兵と、服色燦爛たる數十萬の狂人の大軍が林の中から、三色の雲となつて層々と進軍した。砲車の轍の連續は響を立てた河原のやうであつた。朝日に輝いた銃劍の波頭は空中に虹を撒いた。栗毛の馬の平原は狂人を載せてうねりながら、黑い地平線を造つて潮のやうに沒落へと溢れていつた。

（横光利一）

彼等は馬の頭を立て直すと、いづれも、犬のやうに齒をむき出しながら、猛然として日本騎兵の方へ殺到した。すると敵も彼等と同じ衝動に支配されてゐたのであらう。一瞬の後にはやはり齒をむき出した。彼等の顏を鏡に映したやうな顏が、幾つも彼等の左右に出沒し始めた。さうしてその顏と共に、何本かの軍刀が、忙しく彼等の周圍に、風を切る音を起し始めた。

（芥川龍之介）

ある夜、聯隊本部から命令受領に來いといふ傳令が來た。この頃、誰云ふとなく、二龍山方面の慘澹たる戰鬪の噂が傳はつて來てゐた上に、毎晩のやうに遠い銃砲の響が聞えたり、氣味の惡い喊聲が、地底から響くやうに暗い內に響いたりするのを聞いて、兵卒たちは少からず神經が鋭くなつてゐたので、曹長が長い刀を引ずつて出かけてゆく姿を見送りながら、一樣に深刻な不安を味はゝなければならなかつた。

（長田秀雄）

空は午後になつて又晴れ渡り、太陽はドウナイ河と、それを取圍む暗色の連山の方へ眩しく落ちて行つた。邊りはしんとしてゐた。只彼の山の方から時々喇叭の響と、敵の叫喚が傳はつて來るのみであつた。中隊と敵軍との間には僅かな斥候の他、もう何物もなかつた。唯二千呎ばかりの空漠たる空間が、此兩者を隔てゝゐるのみである。敵軍は射擊を中止したが、却つて其爲めに兩軍を分つて居る嚴肅な、恐しい、近寄る事も捕捉する事も出來ない一線が、猶明らかに感じられるのであつた。（トルストイ・米川正夫譯）

高地なる敵軍の中に發射の煙が現れた、と砲彈は唸りを生じつゝ輕騎兵中隊の頭上を掠めた、一塊りに立つてゐた將校連は各自の部署に向つて分れた。兵士等は一生懸命に亂れた馬を整列し始めた。中隊は一時に鳴を靜めてしまつた。一同は前方の敵を眺め、それから又號令を待設けるものゝ如く中隊長を眺めてゐた。と續いて第二、第三の砲彈が飛び過ぎた。敵が輕騎兵等を目掛けて射擊してゐるのは確かであつた。併し砲彈は高低のない調子で規則正しく而も迅速に唸り乍ら、輕騎兵等の頭上を飛び過ぎて何處か後ろの方で爆發した。兵士等は振返らうともしなかつたが、砲彈の飛び過ぎる音のする度に、單調で而も複雜な顏を含んだ中隊全部が、まるで號令でも掛けられたやうに、彈の飛び過ぎる間ぢつと息を呑んで鐙の上に棒立になり、それから又腰を落すのであつた。

（トルストイ・米川正夫譯）

危なげなく活潑に働いて、命令も明瞭下せば、又其を間違ひなく仕遂げても行くが、それでゐて、若し突然誰かを捉へて、お前は誰だと聞いたなら、うやむやの頭では、恐らく何と答へたものか、分らなかつたらう。夢を見てゐるやうなもので、誰の顏も疾うからの馴染らしく見え、何事が起つても、矢張り嘗て有つた、覺えのある、知り拔いてゐる事のやうに思はれるが、其癖誰かの顏が砲を凝と視てゐると、或は砲聲に耳を傾けてゐると、どれも〳〵皆な目の覺める程珍らしくて、解いても〳〵解き盡せぬ謎か何ぞのやうに思はれる。何時の間にか夜になる。それと氣が附いて、何處の隅から暗くなつて來たのかと怪しむ間さへなく、又頭の上で赫と日が照り出す。偶々餘處から來た者に聞いて、始めて戰鬪も最う三日目と分るが、それも傍から直ぐ忘れて了ふ。如何やら暮れも明けもせぬ延たらの一日のやうで、暗い時もあれば、明るい時もあるが、何れにしても滅茶苦茶で、薩張譯が分らない。而して誰も死を畏れない。死ぬといふのが如何な事だか、それも分らない。（アンドレーエフ・二葉亭譯）

第二編　文範の部

よく使ふ故事熟語（いろは順）

無數にある支那の故事熟語の中から、われ〳〵がふだん會話に使つたり文章に書いたりするもの、卽ちわれ〳〵の生活と今もなほ比較的多くの交渉を持つてゐるものを擇んで、それに簡單な解釋を施して見た。

一衣帶水　帶のやうにせまい水のことである。一衣帶水を隔つといへば、呼べば應へんほどの距離しかないことである。一葦帶水と書くは誤りである。

市に虎あり　讒言もたび重なれば人を惑はすやうになるに喩へていふ。『戰國策魏策』に「龐葱、太子と邯鄲に質たり、魏王に謂つて曰く、今一人市に虎ありといふ、王之れを信ずるか。王曰く否。二人市に虎ありといふ、王之れを信ずるか。王曰く寡人之れを疑ふ。三人市に虎ありといふ、王之れを信ずるか。王曰く寡人之れを信ず。龐葱曰く、夫れ市に虎なきは明かなり。然り而して三人之れを言へ

叙事文

楊弓店（森鷗外）

楊弓店のある狹い巷に出た。どの店にもお白いを附けた女のゐるのを、僕は珍らしく思つて見た。お父樣はこゝへは連れて來なかつたのである。今まで見た、普通の女とは違つて、皆一種の stereotype. な顏をしてゐる。僕の今の詞を以て云へば、此女達の顏は凝結した表情を示してゐるのである。僕はその顏を見てかう思つた。何故皆揃つてあんな顏をしてゐるのであらう。子供に好い子をお爲といふと、變な顏をする。此女達は、皆その子供のやうに、變な顏をしてゐる。眉はなる丈高く、甚だしきは髮の生際まで吊るし上げてゐる。目をなる丈大きく睜つてゐる。物を言つても笑つても鼻から上を動かさないやうにしてゐる。どうして言ひ合せたやうに、こんな顏をしてゐるのだらうと思つた。僕には分らなかつたが、これは賣物の顏であつた。これは prostitution の相貌であつた。

女はやかましい聲で客を呼ぶ。「ちいと、旦那」といふのが尤多い。「ちよいと」とはつきり聞えるのもあるが、多くは「ちいと」と聞える。「紺足袋の旦那」なんぞと云ふ奴もある。涅麻は紺足袋を穿いてゐた。

「あら、涅麻さん」

一際鋭い呼聲がした。涅麻は其店にはいつて腰を掛けた。僕は呆れて立つて見てゐると、涅麻が手眞似で掛けさせた。圓顏の女である。物を言ふと、薄い唇の間から、鐵漿を剝がした齒が見える。長い烟管に烟草を吸ひ附けて、吸口を袖で拭いて、例の鼻から上を動かさずに、涅麻に出す。

「何故拭くのだ」

「だつて失禮ですから」

ば虎を成す。今邯鄲は大梁を去ること市より遠し。而して臣を議するもの三人よりも過ぐ。願くは王之れを察せよ」とあるより出づ。

一人虚を傳ふれば萬人實を傳ふ　一人虚言を傳ふれば萬人之れを事實として傳ふるをいふ。『潛夫論』に、「一犬影に吠れば百犬聲に吠え、一人虚を傳ふれば萬人實を傳ふ」とある。

一葉落ちて天下の秋を知る　梧桐の一葉がばさりと落ちたのを見て、秋の來たのを知るといふ所から、すべて事物の初めのちよつと

したことを見て、其の終りの大きなことを察するに喩へて用ゐてゐる。

一敗地に塗る　一朝に敗れて肝腦をして地に塗れしむること。再び立つことの出來ないのをいふ。『史記』の『高祖紀』にある。

鷸蚌の爭ひ　鷸はしぎ、蚌ははまぐり。しぎと蛤とが相爭つてゐるうちに、二つながら漁者に獲られたことを喩にして、二人の人、もしくば二つの勢力が、相爭つてゐるうちに、他の第三者に横取りされることを諷したる言葉である。

「榛野でなくつては、拭かないのは吸まして貰へないのだね」

「あら、榛野さんにだつていつでも拭いて上げまさあ」

「さうかね、拭いて上げるかね」

こんな風な會話である。詞が二樣の意義を有してゐる。混麻は僕がその第二の意義に對して、何等の想像をも畫き得るものとは認めてゐない。女も僕をば空氣の如くに取り扱つてゐる。併し僕には少しの不平も起らない。僕は此女は嫌であつた。それだから物なんぞを言つて貰ひたくはなかつた。

【評】『キタ・セクスアリス』の中の一節である。『キタ・セクスアリス』は男子の性慾發展史ともいふべき性慾に關する幼少の頃よりの興味、經驗の數數を次を追うて叙述したものである。一篇の小説としては餘りにデレツタンテイの匂が高く、性慾の取扱方が暢氣に過ぎたやうに思はれたが、其の部分々々の描寫に至つては容易に人の追隨を許さぬものがある。此の一節は主人公が人に連れられて淺草奥山の楊弓店へ行つたところで、賤しい賣物の女

の形容から始めて、漸く其の動作、會話を描き出して來た所、坦々として平地を行くがごとく、些の屈託もなくして而してよく其の場景を眼前に髣髴せしめてゐる。

利根川の土手（田山花袋）

男生徒女生徒打混ぜて三十名ばかり、田の間の細い路をぞろぞろと通る。學校を出る時は『貉よ貉さんよ』を一齊に歌つて來たが、それにも倦きて、今では各自に勝手な眞似をして歩いた。何かべちやくゝ饒舌つてゐる女生徒もあれば、後を振返つて赤目をして見せて居る男生徒もある。赤いマンマといふ花を摘んで列に後れるものもあれば、蜻蛉を追かけて畑の中へ入つて行くものもある。尋常二年級と三年級、九歳から十歳までのいたづら盛り、總じて無邪氣な甘へるやうな擧動を清三は自己の物思ひの慰藉として常に可愛がつたので、『先生——林先生』と生徒は顔を見てすぐ其後を追つた。

一頭地を出す　人より一段ぬきんでることをいふ。『宋史』にある言葉である。

一を擧げて三を反す　一つの事を擧げて示さるれば自分で考へて他の三つの事を察するをいふ。『蔡邕別傳』に、「蔡邕李斯ともに遊學す。時に弱冠に在り。性迺敏一を擧げて三を反す」とある。

逸を以て勞を待つ　逸は安、勞は疲勞、我れはゐながら安んじて、敵の遠くから來て疲勞するのを待つことである。『孫子』の『軍爭篇』にある言葉である。

學校から村を拔けて、發戸に出る。青縞を織る機の音が、其處にも此處にも聞える。色の白い若い先生をわざ〳〵窓から首を出して見る機織女もある。清三は袴を着けて麥稈帽子を被つて先に立つと、闘さんは例の詰襟の汚れた白い夏服を着て生徒に交つて歩いた。女教師も其の後からハンケチで汗を拭き〳〵跟いて來た。秋は半ば過ぎてもまだ暑かつた。發戸の村はづれの八幡宮に來ると、生徒はばら〳〵と驅け出して、其の裏の土手に馳せ上つた。先に登つたものは、手を上げて高く叫んだ。ぞろ〳〵と跟いて登つて行つて、手を擧げてゐるさまが、秋の晴れた日の空氣を透して疎らな松の間から見えた。其の松原からは利根川の廣い流が繪を展げたやうに美しく見渡された。

彌勒の先生達はよく生徒を運動に此處につれて來た。生徒が砂地の上で相撲を取つたり、叢の中で阜斯を追つたり、汀に行つて淺瀬でぼちや〳〵したりして居る間を、先生達は涼しい松原の蔭で、氣の置けない話をしたり、新刊の雜誌を讀んだり、仰向に草原の中に寢ころんだりした。平凡なる利根川の長い土手、其の

一擲乾坤を賭す　天下を取るか捨つるかの分目をいふ　韓愈の詩句――誰勸君王回馬首。眞成一擲賭乾坤。

一擧手一投足　ちよつと手を擧げ、ちよつと足を投げ出すといふほどの、ほんの少しの骨折をいふ。韓愈の『科目に應ずる時人に與ふるの書』の中にある。

一將功成りて萬骨枯る　一人の將軍が功名を成すのは萬卒が命をすてた結果であるのをいふ。唐の曹松の詩――澤山江山入戰圖。生民何計樂樵蘇。憑君莫語封侯事。一將功成萬骨枯。

中で此處十町ばかりの間は、松原があつて景色が眼覺めるばかり美しかつた。ひよろ松もあれば小松もある。松の下は海邊にでも見るやうな綺麗な砂で、處々小高い丘と丘との間には、青い草を下草にした繪のやうな松の影があつた。夏は其處に色の濃いなでしこが咲いた。白い帆がそのすぐ前を通つて行つた。

清三は此處に來ると、いつも生徒を相手にして遊んだ。鬼事の群に交つて、女の生徒につかまへられて、前掛で眼かくしをさせられることもある。又生徒を集めて一所になつて唱歌をうたふことなどもあつた。かうして居る間はかれには不平も不安もなかつた。自己の不運を嘆くといふ心も起らなかつた。無邪氣な子供と同じ心になつて遊ぶのが常である。しかし今日は何うしてかさうした快活な心になれなかつた。無邪氣に遊び廻る子供を見ても心が沈んだ。かうして幼い生徒にはかなき慰藉を求めて居る自分が情ない。かれは松の蔭に腰をかけて、溶々として流れ去る大河に眺め入つた。

【評】『田舍教師』の第二十回の一節。主人公の清三が彌勒の學校教師となつ

一寸の光陰輕んずべからず　時は過ぎ易いものであるから、輕んじてはいけない、といつて若い者を戒しめた言葉である。朱子の詩――少年易老學難成。一寸光陰不可輕。未覺池塘春草夢。階前梧葉已秋聲。

隱として一敵國のごとし　『後漢書』の『光武記』に「吳漢軍に在り、或は戰利あらざるも意氣自若たり、上數じて曰く、吳公やゝ人意を强くす。隱として一敵國の若し」とある。一人の人の意氣自若としてゐるのを一敵國の動かすべからざるに比したのである。威重のすぐれてゐることである。

牖戸を綢繆す　患難を未萌に防ぐこと。『詩』の『豳風鴟鴞』に、「天の陰雨せざるに迨び、彼の桑土をとつて牖戸を綢繆す」

石に漱ぎ流に枕す　負け惜みの强いことである。昔、孫楚といふ人が隱居しようと思つた時、王濟といふ人に向つて、本當なら、石に枕し流に漱がうと思ふといふべきを間違つて、石に漱ぎ流に枕しようと思ふといつた。そこで濟が、それは可笑しい、流は枕には出來て暫く後のこと、境遇の上から、健康の上から、さま〳〵なことが因となり緣となつて、心快々として樂しまない折のことゝある。

『田舍教師』はある田舍の小學教師が、幾年か書き溜めた實際の日記を本とし科學者風な精密な踏査を幾回かした後で、花袋氏が作り上げた長編小說である。そして花袋氏が最も會心の作として人にも語られてゐるものである。玆に拔いた所が、必ずしも『田舍教師』の中で特にすぐれてゐるといふのではない。たゞ胸に靑春の望みを懷いてゐながら、それを實現する途を得ることが出來なくて、淚を呑んで空しく田舍の小學教師に甘んじてゐなければならぬ有爲の靑年の悲哀が、淡々たる叙事の底に流れてゐて、人の心を惹かずにはゐない所にわたしは動かされたのである。

それに描寫といふ方面から見ても、到る處に眞實の光が輝いてゐて、一點のだらけた所がない。調子はぴんと張り切つて、舞臺となつてゐる自然の光景までが多くの言葉を費さないで鮮かな印象を與へてゐる。例へば、田の間の細い道をぞろ〳〵と通つて行く無邪氣な生徒の群のさまなども、其の道すがらの自然の風物を背景として、いかにもよく描かれてゐて、今目の前を過ぎて行くやうに感ぜられる。又例へば、利根川の土手の形容なども、靜かな明るい秋の光をつゝんで、讀者もまた其の松原の下蔭に在るやうな思ひをさせられる。而もさういふ間に在つて、主人公の心の動搖がしみ〳〵と讀者の心を捉へて、一味の哀愁を覺えさせるものがある。

月見草（大町桂月）

路は、多摩川を遠ざかりて、連亙せる小山に接す。上には松林あり、檜林あり、百合も折々見ゆ。多摩川より引ける用水、ゆる〳〵流れ、水を蔽へる合歡木の花、傾ける日に映じてあざやかなり。武藏野もこゝにいたりて一種の景致を見る。登戸と二子との中央とおぼしき處に、新渡と稱する渡あり、この日は水增せる爲めに渡錢一錢五厘。都合七錢五厘。五厘はおまけにして、八錢を拂ひてわたる。かく

ない、石では漱げない、といふと、楚は答へて、流に枕するといふのは、耳を洗はうと思ふのである、石に漱ぐといふのは、齒をみがかうと思ふのであるといつた。これは『晉書』に出てゐることである。この答へ方がさすがに旨いといふ所から、我が國語の「さすが」に流石といふ熟字を當てはめて用ゐることになつた。夏目漱石氏の雅號も此處から出てゐることは明かだ。

衣食足りて則ち榮辱を知る　人は飢寒の患のない時、はじめて心も高尚になつて、榮を榮とし、辱を辱とし、身を修め德に進むことが出來るといふこと。『管子』に出てゐる言葉である。

隴を得てまた蜀を望む　利を貪つて足ることを知らぬをいふ。『三國志』の曹操の言葉に「人足ることなきに苦しむ既に隴を得てまた蜀を望む」

籠鳥雲を戀ふ　身を束縛されてゐるものゝ自由を得ようとするに喩ふ。遊女などを籠の鳥といふは卽ち金で縛られてゐて自由にならぬ身の上だからである。

盧山の眞面目　盧山のほんや、苔は開いて、花となりぬ。

【評】　大町桂月氏の文章のやうにさらりとした文章は他に多く見ることが出來ない。唯だ無造作に景と情とをその儘に書いたばかりでありながら、一種さはやかな、警へば夕立の一過した後のやうな爽涼の氣が附き纏うてゐる。さら〳〵と無造作な筆致の裏に洒脫な飄逸な性格が一道の脈をなして流れてゐるからである。文章は人格なり、といふ言葉は、氏の場合に於いて最も其の眞實なるを見る。

五人の賃錢は拂ひたるものゝ、道別と桃葉とは泳ぎたくてたまらず。衣帽は船にあづけ、今に深き處があるか〳〵とて船を押したるが、二子とはことなりて、ゆけども〳〵水は腰以上に達せず。泳がうにも泳がれず。これなら渡船にのるでは無かりしとくやめど甲斐なし。砂磧には川原撫子花をひらけり。月見草も多し。一本の月見草を根ながら掘り取り、卷煙草の袋に殼と共に根を入れてもち來る。こゝより家までは四里もあるべし。日はくれかゝりぬ。囊中にはたつた十錢あるのみ。煙草つきたれど買ふに由なし。

登戸街道に出でゝ、青山の方に向ふ。暮靄林をこめて、蜩の聲、聞え始む。空は、白雲漠々たるに、日光映じて、微紅を帶ぶ。地の陰氣になりゆくにひきかへて、空ははなやかになりゆく、十日頃の月にやあらむ、雲端に見えつ、かくれつして、益〻にぎやか也。路、品川用水を交叉する處より左折して甲州街道に向ふ。農家の火、ぽつ〳〵、林間に見えそめて、既に夜也。雲は、いつの間にか散じけむ。半輪の月、空にさはやか也。ふと、桃葉の手にせる月見草を見れば、いとし

猫の最後（夏目漱石）

陶然とはこんな事を云ふのだらうと思ひながら、あてもなく、そこかしこと散歩する樣な、しない樣な心持でしまりのない足をいゝ加減に運ばせてゆくと、何だかしきりに眠い。寢てゐるのだかあるいてゐるのだか判然しない。眼はあける積だが重い事夥しい。かうなれば夫迄だ、海だらうが、山だらうが、驚かない

たうの形態をいふ。轉じて物の眞情をいふ。蘇東坡の詩に、横看成嶺側成峰。遠近高低各不同。不識廬山眞面目。只緣身在此山中。といふのがある。身其の中に在れば、物のほんたうの形態、ほんたうの情趣は分らぬものだといふのである。

魯魚の謬り　文字の謬りをいふ。『抱朴子』に「諺にいふ書三寫すれば、魯は魚となり虚は虎となる」とあるのが最もよく其の意味を傳へてゐる。

枚を銜む　枚は形箸に似たもので、其の兩端に小さな繩をつけて、これを横ざまに口にふくんで頭の後でつないで置けば、口を利くことが出來ない。即ち枚をふくむのは喧嚣を止むる爲めなのである。

敗軍の將は以て勇を言ふべからず　敗軍した者は再び軍事を説くものでないといふ義。廣武君が韓信に對へた言葉で『史記』の『淮陰侯傳』の中にある。

背水の陣　敵を前にし、水を後にして陣することである。若し退けば則ち溺れるがゆゑに、進んで敵を破る外には、全く生きる道がな

んだと、前足をぐにやりと前へ出したと思ふ途端ぽちやんと音がして、はつと云ふうち、――やられた。どうやられたのか考へる間がない。只やられたなと氣がつくかつかないのに、あとは滅茶苦茶になつて仕舞つた。

我に返つたときは水の上に浮いてゐる。苦しいから爪でもつて矢鱈に搔いたが搔けるものは水ばかりで、搔くとすぐもぐつて仕舞ふ。仕方がないから後足で飛び上がつておいて、前足で搔いたら、がり〳〵と音がして纔かに手應があつた。漸く頭丈浮くからどこだらうと見廻はすと、吾輩は大きな甕の中に落ちて居る。此甕は夏迄水葵と稱する水草が茂つて居たが其後烏の勘公が來て葵を食ひ盡した上に行水を使ふ。行水を使へば水が減る。減れば來なくなる。近來は大分減つて烏が見えないなと先刻思つたが、吾輩自身が烏の代りにこんな所で行水を使はう抔とは思ひも寄らなかつた。

水から緣迄は四寸餘もある。足をのばしても屆かない。飛び上がつても出られない。呑氣にして居れば沈むばかりだ。もがけばがり〳〵と甕に爪があたるのみで、あたつた時は、少し浮く氣味だが、すべれば忽ちぐうつともぐる、もぐれば苦しいから、すぐがり〳〵をやる。其うちからだが疲れてくる。氣は焦るが、足は左程利かなくなる。遂にはもぐる爲めに甕を搔くのか、搔く爲めにもぐるのか自分でも分りにくゝなつた。

其時苦しいながら、かう考へた。こんな呵責に逢ふのはつまり甕から上へあがりたい許りの願である。あがりたいのは山々であるが上がれないのは知れ切つてゐる。吾輩の足は三寸に足らぬ。よし水の面にからだが浮いて、浮いた所から思ふ存分前足をのばしたつて五寸にあまる甕の緣に爪のかゝり樣がない。甕のふちに爪のかゝり樣がなければいくらも搔いても、あせつても、百年の間身を粉にしても出られつこない。出られないと分り切つてゐるものを出樣とするのは無理だ。無理を通さうとするから苦しいのだ。つまらない。自ら求めて苦しんで、自ら好んで拷問に罹つてゐるのは馬鹿氣てゐる。

もうよさう。勝手にするがいゝ、がり〳〵はこれ限り御免蒙るよと、前足も、

いのである。自ら必死の境に身を置いて而して大に生きようとすることである。

暴を以て暴に易ふ　亂暴な人を以て亂暴な人に代らした所が何にもならぬ、といふことをいつたのである。殷の亡びた時に周の粟を食ふをいさぎよしとせずして首陽山に隱れた伯夷叔齊が餓ゑてまさに死なんとした時に歌つた辭の中にある句である。其處では武王の暴臣を以て紂王の暴主に代つたことをいつたのである。

亡羊の歎　どういふ方針を取つたらよいかと思案に暮れることである。『列子』の說符篇に、「楊子の隣人羊を亡ふ。既に其の黨を率ゐ、又楊子の豎を請ひて之れを追ふ。楊子曰く、あゝ一羊を亡へるに、何ぞ追ふものゝ、衆きやと。隣人曰く岐路多しと。既にして反る。問ふ羊を獲たりや。曰くこれを亡ふ。曰く奚ぞ亡へる。曰く岐路の中に又岐あり、吾ゆく所を知らず、反れる所以なりと」とあるより起る。

暴虎馮河　暴虎は虎を手搏ちにすること、馮河は河を徒渉りすることで共に極めて危險なことをいつたので

後足も、頭も尾も自然の力に任せて抵抗しない事にした。

次第に樂になつてくる。苦しいのだか難有いのだか見當がつかない。水の中に居るのだか、座敷の上に居るのだか、判然しない。どこにどうしてゐても差支はない。只樂である。否樂そのものすらも感じ得ない。日月を切り落し、天地を粉齏して不可思議の太平に入る。吾輩は死ぬ。死んで此太平を得る。太平は死なゝければ得られぬ。南無阿彌陀佛々々々々々々。難有い〳〵。

【評】『我輩は猫である』の結末である。突如何處からか飛出して來て、一世を騷がした猫も、人の世に住むこと、二年越しとなつて、明治文壇に少なからぬ貢献をしたが、いつやら人間かぶれがしたものと見えて、止せばよいのに、飲みも習はぬビールをぺちや〳〵と舐めた結果、たうとう極樂往生を遂げて了つた。

漱石氏の文章は、口語體として形式の最も新しいもので、淡々と叙し去る中に無限の情趣が含まれてゐる。ちよツと見ると、極めて冗漫なやうで、よく見ると、一字一句も駄文字はない。いかにもすつきりして、きち〳〵と迫つた文章である。「其時苦しいながら、かう考へた」以下の一節は、氏の人生觀とも見るべきもので、悟つた人でなければ言はれぬことである。

渚

（寒川鼠骨）

梅雨風の海は靜かに疲れて眠つてゐる。一里許りの先は海とも空ともつかず、薄黑く底白く低き雲に閉されて、舟一つ鷗一つも見えぬ。それでも渚はバサリバサリと物憂いやうに音を立てゝゐる。健藏は暫く耳をすまして其波音を聞いてゐた。海を見てゐる目はボーツとして來る。頭が波に引ずられるやうな氣になる。バサリ〳〵が體からではなく、頭の奥底から發るやうに思はれる。飽迄も其音をのみ聞かうと、腰を砂の上に下ろしてウツトリとしてゐた。尻がつめたくなつたので立上つた。其拍子に頭の奥底から出る音は、渚から出る音になつてしまつた。それと同時に砂の濡れてゐるのも知らずに腰をおろしたのに氣が附いた。尻

ある、「暴虎馮河の勇」といへば、向ふ見ずな生命知らずの無鐵砲者のことである

萬綠叢中紅一點　多くのつまらぬ物の中に、すぐれたものゝたゞ一つあるをいふ　王荆公石榴の詩――萬綠叢中紅一點。動人春色不須多。

半面の識　かつてちよつと識つてゐることである。『東漢觀記』に「應奉かつて袁賀に詣る。賀時に出でて門を閉づ。造車匠あり、内に於いて扇戸を開き半面を出して奉を視る。奉去る。後數年にして路にて車匠を見る。識りて而してこれを呼ぶ」

薄氷を履むが如し　春氷を渉るといふも同じことで、極めて危いことの喩である　『詩經』に、「戰々兢々として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し」

白璧の微瑕　大體完美にして些しの疵のあることをいふ。

伯仲の間　兄弟の順序を伯仲叔季といふ。即ち伯は長兄、仲はその次、叔は又その次、季は末弟である。「伯仲の間」は此の順序に喩へていつたので、甚しい優劣の差のないことである。

のあたりを二三遍バタ〳〵と拂つて見たが矢張つめたい。仕方なしに左の方へ歩行き出した。ザク〳〵と下駄が砂にはまる足音がする。其爲めに渚の音は亂れてしまふ。

【評】　小說『馬車』の一節である。さすがに寫生文界の一雄將であつただけに、寫生の上には及び易からぬ妙所が少くない。玆に擧げた一節のごときもまたさうである。もし寫生をもとゝせずにこれだけのことを書かうとすると、文字が自然と空想的になつて、穴だらけな、しつくりと折り合はぬ描寫となつて了ふに違ひない。この文のごときは、所謂主觀と客觀とを同じ線上に置いて、交感せる情調を表現させたものである。さあれ、若しこの筆致を漫然模倣するものがあつて、下手に主客觀の交感情調を取扱ひでもしようものなら、それこそ見るにも堪へぬやうないや味のものとなつて了ふであらう。

狗兒（二葉亭主人）

私も亦夜着を被つた。狗は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるに隨れて、父の鼾が又蒼蠅く耳に附く。寢られぬ儘に、私は夜着の中で今聽いた母の說明を反復し〳〵味づて見た。まづ何處かの飼犬が緣の下で兒を產んだとする。小ぽけなむく〳〵したのが重なり合つて、首を擡げて、ミイ〳〵と乳房を探してゐる所へ親犬が餘處から歸つて來て、其側へドサリと横になり、片端から抱へ込んでペロ〳〵舐ると、小さいから舌の先で他愛もなくコロ〳〵と轉がされる。轉がされては大騷ぎして起返り、又ヨチ〳〵と這ひ寄つて、ボツチリと黑い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、狼狽てチウと吸付いて、小さな兩手で揉み立て〳〵吸出すと、甘い溫かな乳汁が滾々と出て來て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何とも言へずお甘しい。と、腋の下からまだ乳首に有附かぬ兄弟が鼻面で割込んで來る。奪られまいとして、產毛の生えた腕を突張り大騷ぎ行つて見

白駒の隙を過ぐるが如し　人の一世は白駒の馳せて行くのを、壁の隙間からちらりと見るやうなものであるといふので、忽ちの間に過ぎ去つてしまふのを喩へたのである。

白面の書生　年が若くて事務に經驗のない者をいふ。『晉書』に見えてゐる。高陽王隆の言葉である。

破鏡　昔夫婦の相別るゝ時に、鏡をわつて各其の一片を持つてゐた故事から夫婦の離別するをいふ。『神異經』に、「昔、夫婦相別るゝあり、鏡をわりて各其の半を執る。後其の妻人と通ず。鏡化して鵲となり、飛びて夫の前に至る。後人鏡を鑄るに、背に鵲の形を爲すは此れより始まる」とある。茲にいふ鏡は今のガラスで出來た鏡のことではない。金屬製の鏡のことである。

馬耳東風　聖賢の教も耳に入らないに喩ふ。李白の詩に――世人聞之皆掉頭。有如東風射馬耳。

始めは處女の如く、後には脱兎の如し　『孫子』の九地篇に「始めは處女の如くにして敵人戸を開き、後には脱兎の如くにして敵拒ぐるが、到頭奪られて了ひ、又其處らを尋ねて、他の乳首に吸付く。其中にお腹も滿くなり、親の肌で身體も溫まつて、溶けさうな好い心持になり、不覺皆々となると、含んだ乳首が脱けさうになる。夢心地にも狼狽て又吸付いて、一しきり吸立てるが、直に又他愛なく皆々となつて、乳首が遂に口を脱ける、脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない……。

【評】『平凡』の一節。棄狗の聲を聞いて、母親と小問答があつて後、獨り空想する條下である。此の一文を讀んだ後に、胸に殘るものは何であるか？

小ぼけなむく〳〵した　狗兒が、親犬の乳房に吸付いて、其のまゝ好い心持になつてうと〳〵と眠つて了ふ其の光景であらう。而して其の光景を描き出した文章に至つては、巧かづたか拙かつたかは愚か、全く其れらの事象を表現する媒介となつたといふことさへも忘れられてゐる。茲に至つて文章は最も完全に其の能事を盡したものであるといつて宜からう。文章がまだ文章として其の巧拙の批判を容るゝ間は、眞の名文ではないのである。

夏なき里（田岡嶺雲）

一年、暑を信濃の山中に避けたことがある。地は輕井澤の奥で、人境を距ること一里半、山深く地幽に、寒暖計は日中でも八十度を上らず。朝夕は僅に六十度を超えるのみである。三伏の暑中に朝は褞袍を着て爐を擁するなどは、紅塵寰中の人のおもひもよらぬことであらう。晝は鶯の聲を聞き、夜は蟲の音を聞く。いはゆる山中曆日なきものである。溪流ありて清きこと寒玉の如く、これを掬すれば冷指に染みて痛きをおぼえる。家は宿屋が一軒のみで、住うてゐる人の數よりも鷄の數が多いのでも、その閑寂は推して知るべしで、屋は溪上に架せられてある。はじめて到れる夜、半夜夢回れば急雨の聲あるに、起つて窓を推せば、風露清うして涼月天心にあり、灘聲のひとり天地の空寂を破るあるのみ。この時の清味、今なほ忘れ得ない。

【評】何處かに漢詩を讀む時に覺えるやうな感興の宿つてゐる文である。も

に及ばず」とある。始めは靜かにして敵に油斷をさせ後には兎の脫するが如くにして、敵をして拒ぐに遑なからしめることである。

鷄を割くに焉ぞ牛刀を用ひん　小事を處するに大器を用ゐざるに喩ふ。『論語』の陽貨篇に出てゐる言葉である。

人間萬事塞翁が馬　人の禍福は定まりなきをいふ。『淮南子』の人間訓に次ぎのやうな話が書いてある。曰く、「塞上に近き人術を善くする者あり。馬故なくして亡げて胡に入る。人皆これをとより新らしいといふ側の文ではないが僅々三百字かそこらの文字のうちにこれだけ多くのことを書き悉すといふは、餘程文に慣れた人でなければ出來ないことである。唯だ事は多いが、どちらかといへば單純なことばかりであるから、複雜の味ひは出て來ない。卽ちこの文の簡潔は事の單純より來た簡潔である。

片意地（窪田空穗）

澄彌はフラ〳〵と歩き出した。遠い涯しのない闇を見詰めて、ブル〳〵顫へながら其小さな體を動かして行く。取り圍んで來るやうな四邊の物、其れを目懸けて闇を押分けながら抵抗して行くやうな心持になつた。何も彼も忘れてしまつて、唯だ其ればかりに成つて居る。ベタベタと氷りかゝつたやうな泥が足に着くのも感じない。

歩いた。夢中に歩いた。ハッと氣が附くと、何時か軒下傳ひ坪庭を通り越して、

弔す。其の父曰く、これ何ぞ乃ち遽に禍とならざるを知らんやと。居ること數月、其の馬胡の駿馬をひきゐて歸る。人皆これを賀す。其の父曰く、これ何ぞ乃ち遽に禍とならざるを知らんやと。家良馬に富む。其の子騎を好み、墮ちて其の髀を折く。人皆これを弔す。其の父曰く、これ何ぞ乃ち禍とならざるを知らんやと。居ること一年。胡人大に塞に入る。丁壯者は弦を引いて戰ふ。塞に近きの人死する者十に九、これ獨り跛たるの故を以て、父子相保つ。

表へ出る門の所へ來て居た。……裏木戸の方へ行けばよかつたと思つた。門へ手を掛けて、開けようとして急にシク〳〵と泣き出した。突ッ離された悲しい心持が、初めて胸にこみ上げるやうに湧いて來た。

シク〳〵と、シーンとした中へ唯それだけ聞える自分の泣聲に耳を假しながら、澄彌は何時までも立つてゐた。顫へは押へられなく續く。

不圖裏口の雨戸の開く音がした。驚いた聲が續いた。壓へ附けたやうな調子だが慌てた樣に二三人で云つて居る。何を云つてるのか分らないが好く聞える。ぼんやりした灯影が闇に現はれて黑い土を見せた。

澄彌はワッと大聲に泣き立てようとして、口惜しさうに唇を嚙みしめた。キョロ〳〵と四邊を見廻して、慌てゝ緣の所まで來て、身を屈めて緣の下へ這ひ込んだ。

自分の體も見えない程闇い。スースーと床下を傳へて吹いて來る刺すやうな寒い風、鼻を衝くやうな冷たい土の匂ひ、――澄彌は五分間を五日間程にも思つた。

故に禍の禍となり、禍の禍となる。化、極むべからず、深、測るべからざるなり」と。

似て非なる者　是に似て實は非なる者のことである。『孟子』に、「似て非なる者を惡む。莠を惡むは其の苗を亂るを恐るゝ也。佞を惡むは其の義を亂るを恐るゝ也」

蒲鞭　寛恕の罰を稱していふ。『後漢書』の劉寛傳に、「劉寛南陽の太守に拜せらる。溫仁にして恕多し。吏人過あればたゞ蒲鞭を用ゐてこれを罰し以て辱を示すのみ」とある。蒲鞭即ち蒲の鞭は打つても痛くないのである。

佛造つて眼を入れず　折角事を成しながら、今一つといふ肝心の要件を遺れたるに喩ふ。

佛の面に糞を塗る　名著に拙い序を書くといふやうなすべて立派なものを汚すに喩ふ。王安石の言つた言葉に、「釋迦佛頭上、糞を著くるに堪へず」といふのがある。

佛も元は凡夫　佛は覺者である。佛も凡夫は不覺者である。佛も生れながらにして佛ではな

バタバタと忙しく土を踏む草履の音、頻りに搖れる提灯の灯影、其れが段々近づく。澄彌は眼を凝して、ぼんやりと浮み出る女の裾の方を眺めて居た。

『本當に何處へ行つちまつつら……』悸えたやうな調子で呟く女親の聲は涙聲になつて居た。

『此方ぢや御座んしねはねえ、――門が閉つて居ますにね……』とをど〳〵した嫂の聲。

『山の方見て來ましずか？』とお常の聲。

『おゝ』と女親の聲で云つて、『澄やイ！』と聲は潜めながらも力を籠めて呼んだ。

話聲も呼聲も、夜陰の中に吸ひ取られるやうに短く消えて、後はヒツソリとする。

『裏の方、も一度見ますかねえ？』と嫂の聲がする。皆默つて其方へ歩き出した。

バタ〳〵と遠くなつて行く足音を逐ひながら、澄彌は、

『出るもんか、誰が出るもんか、……出ちや呉れねえぞ』と呟いた。

體は心まで冷え切つて來た。ガタ〳〵と顫へるのを抑へやうとする樣に、澄彌は拳を握り肩を窄め、有たけの力を出して堅くなつた。

【評】　短篇集『爐邊』に收められた『末子』の結末の一節。まだ學校にも上がらぬほどに幼い年寄りつ子の澄彌が、從兄弟に馬鹿にされた口惜しさから暗闇の中で、甥に當る赤兒の顏へ黃粉を撒いたのが見付かつて、夜、庭へ締め出された後の描寫である。やゝ抒情脈の勝つたセンチメンタルな所に、作者が澄彌の行爲乃至心持を是認してゐる傾きの見えるのが目に着きはするが、それだけにまた子供心の悲しい、口惜しい所がしみ〳〵と胸に感じられる。後半、女親達が搜しに出て來てからの描寫には、一種不安の空氣が其處に漂うてゐるさまがよく出てゐる。緣の下に這ひ込む所も自然である。『出るもんか、誰が出るもんか……出ちや呉れねえぞ』と澄彌が片意地にも痩我慢を張つてゐる所に來ると、吾々は悲しい喜びといつた樣な妙な矛盾した感

かつた。元は凡夫であつたが、修養を積んで此の域に達したといふのである。

蒲柳の姿　體質の柔弱な者をいふ。『世說』に、「南宋の觀愷之、簡文帝と年を同じうす。愷之先づ老ゆ。帝怪みてこれを問ふ。愷之曰く、松柏の姿は霜を經て猶ほ茂る。蒲柳の姿は秋を望んで先づ零つと」とある。蒲柳はかはやなぎである。

臍を噬むも及ばず　腹の臍を噬むやうに、迚も及ぶべからざるに喩ふ。『左傳』の莊公六年に、「鄧國を亡す者は必ず此の人也。若し早く情に捉へられる。空穗氏の文章には、他の人ならうつかり見逃して了ふやうな小さな事柄を大事にかけて守り立てゝゐるやうな所が多い。其處に餘裕がある。併しそれがあまりに繁く重なつて來ると、却つて文の力を弱めることにならぬとも限らない。文を學ばうとする者は、さういふ點にも注意を拂はなければいけない。思ひ付いたまゝを序でに言つて置く。

舞妓（高濱虛子）

仲居のお艶に、

『其が名高い赤前垂れかね』

と聞くと、お艶は一寸氣取つて蠟燭の心を切つて、

『さうどす。これは一力ばつかりに限つた事やおへんけど、斯うやつて帶に挾む具合が他樓とは違うてますのや』

といふ。阪東君が、

『一寸立つて見せたやへ、長いのかい』

ときくと、お艶はだまつて立つて、帶に挾んであるのをはずして見せる。大幅の緋の縮緬を二枚合はせた廣いのが、チヤンと並べた足を隱して幔幕のやうに疊の上に垂れる。廣い座敷に林のやうに立つて居る蠟燭の光りがこの赤前垂れ一つに集まる。其時向うの銀紙で張つた衝立の陰から今日四條の雛店で見たやうな舞妓が一人現はれる。同時に衝立の中から、

『三千歲はん上げます』

といふ聲が聞える。舞妓は余等の前に指を突いて、

『姉はん、今晩は』

とお艶に會釋する。厚化粧の頰に靨で出來て、唇が玉蟲のやうに光る。お艶の赤前垂れの赤いのが此時もとの通り帶の間に疊まれて、極彩色の京人形が一つ疊の上に坐つて居る。

『お前いくつ』

闇らずんば、後に君臍を噬まん」

本來無一物　心の虛無にして、一物も有せざる義である。『傳燈錄』に、「五祖法嗣を求む。寺僧をして各偈を述べしむ。上座の神秀曰く、身は是れ菩提樹、心は明鏡臺の如し、時々勤めて拂拭して、塵埃をあらしめずと。六祖慧能、碓坊杵臼の間に在り、夜書していふ、菩提本樹にあらず、明鏡亦臺に非ず、本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かん」

本來の面目　天然自然のまゝで一點の人意をも雜へぬ

のをいふ。『傳習錄』の中卷に、「善を思はず、惡を思はず、時に本來の面目を認む。これ佛氏未だ本來の面目を識らざる者の爲めに此の方便を說く。本來の面目は卽ち吾が聖門に謂ふ所の良知なり」

北邙の塵　邙山は洛陽の北に在る山である。で、北邙といふ。漢以來墳墓の地として名高い。塵とは人の死んで塵土に化することである。「北邙一片の煙」といへば、火化することである。

北門の鎖鑰　北方の守禦の義に用ふ。『世說』に、「寇萊公大名を鎭するとき、北使至り、寇に語りて曰く、相公望重し、何が故に中書に在らざると。寇曰く、主上朝廷は無事なり。北門の鎖鑰は準にあらざれば不可なりとおもひてなりと」とあるより出づ。大名は府の名。準は寇萊公の諱。

星を戴きて往く　星のなほ見えるうちに出で行くこと朝早くをいふ、『呂氏春秋』に、「宓子賤單父の宰となり、琴を彈じて堂を下らず、而して單父治まる。巫馬朝單父の宰となる。星を戴きて出で星を戴きて入る。而

『十三どす』
『本間に可愛いゝ兒どすやらう。私等毎日見てますけど、見る度に可愛て可愛てかなひまへんわ』
とお艶は銀煙管に煙草を詰める。
『其帶は妙な結びやうね』
『これどすか、かうやつて、こゝをかう取つて、こつちやに折つて、かう垂らしますのや』
と赤いハンケチを膝の上でたがねて見せる。白い指が其ハンケチにからまつて美しい。
『何といふの其名は』
『だらり』
『髷の名は』
『京風』

『櫛は』
『これどすか』
と白い手を前髪の後ろにやつて、
『花櫛、これは前髪くゝり。あなた何書いとゐやすの』
と余のノートを覗き込む。
『三千歲はん、今日虛空藏樣へお詣りやしたか』
『ハイ』
『何というてお拜みた』
『阿呆どすさかいに智慧おくれやす、というて』
銀紙の衝立の陰から又人形が一つ出る。
『松勇はんあげます』
『姉はん今晩は』
と三千歲に並んで坐つて、

して單父亦治まる」

豹變　善に移ること。君子の善に遷つて舊惡を改め去るは、其の著見なること、豹の斑采の煥蔚たるやうなものである。『易經』の革卦に、「君子は豹變し、小人は面を革む」

邊幅を修飾す　外貌を修飾すること、恰も布帛の邊幅を修整して、賣らんことを求めるがごときをいふ。

塗炭の苦み　水火の苦みをいふ。塗は泥、炭は火、『書經』に「有夏の昏德、民塗炭に墜つ」

咄咄怪事　咄々は驚き怪むべき奇怪の事といふ事。『晉書』の『殷浩傳』に「浩黜けらるゝも、談詠して輟まず。家人と雖、其流放の憾あるを見ず。但だ終日空に書して、咄々怪事の四字をなすのみ」

咄々人に逼る　技藝の人を凌駕する勢あるを驚歎するをいふ。『事類全書』に、「衞夫人の書に曰く、衞に一弟子王逸少あり、甚だ能く衞の眞書を學び、咄々として人に逼る」とある。逸少は王羲之の字である。

突梯滑稽　俗に隨つて逆らはず、推し移るをいふ。突

『今日お詣りやしたか』

と三千歳の手を取つて自分の膝の上に置く。

『ハー』

『歸りしなにあとお向きやへなんだか』

『向かしまへなんだ』

と三千歳は膝の上を兩手で壓へる。

『面白さうなお話ね』

と聞くと、

『虛空藏樣に詣つて戻り道にあと向くと智惠かへしますてやわ。あの叶屋の染菊はんな、つい忘れてあと向かはつて、歸らはつてから阿呆にならはつたて。おゝいや』

とお艶がいふ。

『いやらし』

と三千歳と松勇は同じやうに眉をよせて同じやうに背中の帶に手をやる。一つの絲で二つの人形が一所に動いたのかと思はれる。ちりけ元から垂れた帶は松勇のが殊に長く疊の上に流れて居る。

【評】　高濱虛子氏の寫生文が殆ど其の極致に達したといはれる頃の作『風流懺法』の中の一節である。此處に引いた所は、京都祇園の一力に遊んで、其の座敷で見聞した一伍一什を精細に寫したものだが、すべての描寫が如何にも眞に迫つてゐる。それに文章全體に渉つて、平和なおつとりとした京都らしい氣分の漂うてゐるのも及び難い作者の技巧の力であると思ふ。又、名句として擧げることの出來る形容句なども隨分澤山にあるやうである。中で、「廣い座敷に林のやうに立つて居る」といふ「林のやう」といふなどは聊か舊式な誇張に陷つたものであるが、次ぎの「蠟燭の光りがこの赤前垂れ一つに集まる」といつてあるのは、巧みに人の心理を外界の事物で描き出した一例であると思ふ。

梯は滑達の貌、滑稽は圓轉の貌。『楚辭』の『卜居』に、「將た突梯滑稽、脂の如く韋の如く以て潔楹せんか」

圖南の翼　大鵬の翼である。大事業を企つるを圖南の翼を張るといふ。『莊子』の逍遙篇に出てゐる言葉である。

虎を畫きて狗に類す　敎養なき者が豪傑の風を學んで却つて輕薄の人となるに喩ふ。『後漢書』の馬援の傳に、「馬援兄の子嚴、敦二人を戒めて曰く、龍伯高は敦厚周愼、吾汝の曹のこれに效はんを願ふ。杜季良は豪俠にして義を好む。吾汝の曹のこれに效はんことを願はず。伯高に效ひて得ざれば猶ほ謹敕の士となる。所謂鵠を刻んで成らざるも、尙ほ鶩に類する者なり。季良に效ひて得ざれば、陷つて天下の輕薄子とならん。所謂虎を畫きて成らず、反りて狗に類する者なり」とある。これより物事を學んでやり損ひたるをいふやうになつた。

虎の威を假る狐　主人の威を假りて威張るをいふ。『戰國策』に、「虎百獸を求めてこれを食ふ。狐を得たり。

質屋

（德田秋聲）

牛込見附で電車を降りた努の姿は、少時すると神樂坂の中程から、左に折れて、其から又幽暗い横丁へ曲つた。丸に菊と云ふ字を白く染抜いた、觸るとボトボトするやうな暖簾を潛つて、彼は紙を張つた嚴重な格子戸の前に突立つてゐた。

と、間もなく啓けて入つた。

框に腰をかけてゐる人が二組、立つてゐる女が二人もあつた。二十五六の、顏も肩も丸い番頭と、目のクリ〳〵した、悧巧さうな顏の引締つた十五ばかりの小僧とが、後の格子窓から流込む風にバツ〳〵する、ガスの裸火の下で、客を引受けてゐた。一人は札の皺を伸しては算盤を彈いてゐたが、小い方は連に臺帳を繰つては何やら檢べてゐた。傍に眞田紐で褌懸した、頰つぺたの脹れた今一人の小僧が、代物を澁紙に包んで繩をかけて、札を附けてゐた。努は端の方に腰かけて包を私と格子の下から潛らせて番頭の眼の前へ出した。番頭はヂロリと其顏を見た。

『入らつしやい！』とお時儀をしながら、何か言ひたさうにして默つてゐた。古い馴みだと云ふことが、一見して解る。

『早く爲て下さいな』と後の方の壁に喰ついて立つてゐた、三十二三の些と澁皮の剝けた內儀さんが、少し憤り氣味の聲をかけた。

『私のも如何したんだよ』此は太い品の惡い聲で、四十餘の肥つた婆さんであつた。

『どうも濟みません』と番頭は機械的に返事だけしてゐた。

臺帳を檢べてゐた方の小僧は、ふと此方を向いて『××さんのは何と何とでしたつけ』

前の內儀さんは、『アラ可厭ですよ小僧さん、だから今然う言つてるぢやありませんか。セルにね絲織の羽織ですつて。其セルだけ拔いて欲いんですよ。細い格子縞なんですよ。豈夫流しやしまいね』

狐曰く、子敢て我を食ふことなかれ。天帝我をして百獸に長たらしむ。今、子、我を食はゞ是れ天帝の命に逆ふなり。子、我を以て不信となさば、吾、子がために先立ちて行かん。子、我が後に隨ひて觀よ百獸我を見て而して敢て走らざらんやと。虎以爲らく然りと。故に遂にこれと行く。獸これを見て皆走る。虎、獸の己れを畏れて走ることを知らず、以爲らく狐を畏るゝなりと」

虎嵎を負ふ　嵎は山の曲である。負は依るのである。嵎に依る所の虎は勇猛當るべからざるものがある。これより轉じて英雄の一方に割據せるに喩ふ。

東道の主人　主人となつて來客の用を辨ずるをいふ。出所は『左傳』に在る。

燈火稍親むべし　秋になると心が爽かになつて、燈火に親み、書を讀むに適するをいふのである。韓愈の詩の中にある句である。近頃「燈火」を「燈下」と書く者もあるが、あれは間違ひである。

燈火將に滅せんとして光を增す　事の將に亡びようとするに臨んで、一時盛んに見えることをいふ。

小僧は默つて又繰はじめる。

『此だから困つて了ひますね。さあつて駈つけて見ると無かつたり何かして。私なんか時々やられるんですよ』

『えゝ、つい重寶だもんですから、持つてまゐりますけれど、矢張着る時節が來ませんとね、なか〳〵出せやしませんよ』

件の小僧は、程なく裾を端折つて、雪燈に火を點けて、倉へ駈込んだ。

【評】　德田秋聲氏の短篇集『出產』の卷頭に載つてゐる『出產』の一節。細君が今夜にもお產をしさうだといふのに、當てにしてゐた金策は一つも要領を得ずに了つた。これではならぬといふので一家の主人がもうそろ〳〵四十といふ年配をして、質屋へ大きな包を橫抱にして這入つて行つた所である。

何の文飾めいた形容があるでもなく、すべてがたゞ自然に書いてあつて、しかもおのづから質屋の店先の光景があり〳〵と見えて來る。讀者に鮮やかな印象を與へる筆致であると思ふ。

夜行軍（澁川玄耳）

蓋平攻擊の當日、鷄明前より幾里の嶮道を暗中に行進した。警戒の必要より無論燈火を携へぬので、路か畑か、川か池か、一切解らぬ、よしまた判つたにせよ、急行の折柄其樣なことに頓着して躊躇することは許さぬのである。其中各隊の宿營地を通過したが、敵の目に觸れぬ部落のあちこちには、忍び〳〵の篝火の焚いてあるのが見える。暗々黑々の裡に眩き許りの焰が柳の茂りに照り映つて、凄いほど碧い。今に眼底にあり〳〵と其印象を留めて居る。

夏木立敵を詣むく篝かな

【評】　これは澁川玄耳氏が第六師團の理事として、日露戰爭に從軍した時の隨筆を集めた『從軍三年』の中に收められてある文である。夜行軍が大部隊であるか小部隊であるかも分らず、幾里の嶮道を暗中に行軍するといふ不安の感も出て居ないと言へば出てゐないが。しかし亦た一方から見れば、たゞ

とする際に、一時盛んなやうな觀を呈するをいふ。『法滅盡經』に、「聖王去りて後吾が法滅盡せん、たとへば油燈滅せんとする時に臨んで光更らに猛盛にして便ち滅するが如し」

同工異曲　音樂のたくみな點は同じくて、演ずる曲調の異るをいふ。轉じて文章詩歌のことにもいふ。

同病相憐れむ　艱難を同じうする者は、互ひにおもひやりがあつて、憐れみ助けるといふのである。『吳越春秋』に、「子胥河上の歌を述べて曰く、同病相憐み、同

淡々と叙し去つた所に、一種洒脫の妙味があつて、懷しい趣を感ぜしめられる。殊に末段の黑暗裡に眩き許りの焰が、柳の茂りに照り映えて凄いほど碧いといふのは、一種の說明調であり乍ら、なほ且つあり〳〵と其の狀景を目の前に浮ばせて來る力を有つてゐる。

「西郷」（中村星湖）

弟の子が學校へ上るやうになつてから「西郷」は頻りに學校へ來た。而して山衣のまゝで、熱心に教室を廻つたり、教師に物を尋ねたりした。

私たちの修身の時間で、何の事であつたか、教師が一と通り說き終つて、『解りましたか』と力を入れて言ふと、『ヒヤ〳〵』と頓驚聲が緣側から聞えた。振返つて見ると「西郷」が感に堪えたと云ふ風に障子の間から例の赤髭の生えた赭顏を突入れて居るので、皆がドッと笑つた。

其時「西郷」は一層眞面目な顏をして、

愛相救ふ」と。

斗筲の人　斗は量の名、十升を容る。筲は竹器、一斗二升を容る。卑劣な小人物のことである。

張三李四　張氏の三男、李氏の四男の義。俗物をいふ。わが國の權兵衞、太郎兵衞といふと同じことである。

直情徑行　徑も亦た直である。己の情を肆まにして徑ちに事を行ふ義。『禮記』に「情を直くして徑ちに行ふ者あり」

女子と小人とは養ひ難し　小人は僕隸下人をいふ。婦人や僕隸などは、

『皆はそんなに笑ふものぢやあない。俺はこの村の「山本源吉」ちふ者で、少しやあ物も解つて居る人間だ』

斯う妙な所で名乘り懸けられて、皆はまた笑つた。

これが學校での、彼の始めての幕だと覺えて居る。或時は、教員室で、

『先生これはニ子川で好うがすかい……ふうむ、二子川？　俺も何うも然うづらと思つたで此間、勝千代に然う教へて居ると、表の勘さんが來て、ニ子川だつてから、勘さんは上のせーとーだから、その方が丁度づらかとも思ひがしてね』と斯樣な質問をして居る事もあつた。

「勝千代」と言ふのは、弟――市藏の子供の、龜太郎の事だが、何時の間にか、彼が然う呼び變へた了つた。

『何故そんな名にしたね』と訊く者があると『我家の龜は何うも體が弱くて困つたから、信玄公の少い時の名を俺が付け變へてやつたゞ。さうしると、どうだね、あんなに丈夫になつた』と、例の鼻をヒク〳〵させながら答へたものだ。彼は我

多くは道理が解らぬので、養ひ難しといふのである。孔子曰く、「唯だ女子と小人とは養ひ難しと爲す。これを近づくれば則ち不遜、これを避くれば則ち怨む」

中原の鹿　今は一般に利を爭ふを逐鹿といふが、本來鹿は天子の位を喩へたものであつた。『史記』の淮陰侯傳に、「蒯通曰く、秦の綱絶えて而して維弛ぶ。山東大に擾れ、異性並び起り、英俊烏集す。秦其の鹿を失ひて天下共に之れを逐ふ」

晝耕夜誦　晝間は耕作し、夜間に誦讀する。即ち苦學の狀である。『魏書』の崔光傳に、「家貧にして學を好み、晝耕夜誦、傭書して以て父母を養ふ」

知己　善く己の心を知れる人、即ち善く己を理解してゐる人をいふ。『史記』の刺客傳の豫讓の言に、「士は己を知る者の爲めに死し、女は己を悅ぶ者の爲めに容づくる」とある。當今相識を直ちに知己といふは非の甚だしいものである。

良賈は深く藏めて虛しきが若くす　良い商人は其の貨物を深く藏めて、店頭には出して置かない。これを

子と甥の隔をせずに、子供には目がなかつた。

また或時、彼は襤褸の山衣の儘で學校の二階へ上つて來て、教師に向つて謹んで一揖し、それから腕を組んで壁際に彳んだ。教師は顏馴染なので別に咎めもせずに、ずん〳〵講義を續けた。

私たちは『ソレ「西郷」が來た！』、『「ヒヤ〳〵」が來た！』と言つて、隣の友達の背中を突いたり、袖を引き合つたりして、クス〳〵と笑つた。「西郷」は首を傾げて熱心に講義を聞いて居たが、針のやうな赤髭が少し光つて、水鼻汁がポタリと落ちた。

『いま教へた中に「塗炭の苦み」と言ふ言葉がある、私はそれに別段說明を加へて置かなかつたが、解る者は手！』と云ふ教師の言葉に、コソ〳〵爲合つて居た生徒は吃驚したやうに首を上げたが、誰も手を擧げる者は無かつた。

そこで教師は席末の方から次第に訊き質して見た。五六人、起つて、默つて時儀をして、而して坐つた。

『皆さん勉強が足らんでいけない！　それ位の事が解らなくつちや……』と彼は叱るやうに言つた。

『それぢや叔父さやん言つて御覽な』と誰かゞ言ふと、彼はスンと一つ鼻汁を吸ひ込んで『それ位の事が解らなくつちやあいけない！』と同じ言を繰返して首を掉つた。

『東、お前は？』と教師に名指された少年は「西郷」がよく行く酒屋の次男で、靜かに起ち上ると、慧しい眼光で、淀みなく問題の意味を說明した。

『宜しい！』と言ふ教師の言葉と『ヒヤ〳〵』と言ふ「西郷」の聲が一緒になつて教室に響いた。と思ふと「西郷」はヅカ〳〵と東の席へ歩み寄つて『えらい！　お前さんのお爺つあんには生きて御座る時、俺も少し法律を教はつたものだが、その息子だけに、えらい！　さすがはえらい！』と感極まつた風で、忙しく襤褸山衣の懷中から棒切のやうな物を取り出した。それは二た串の白柿であつた。

『これは褒美だ』と彼は白柿を東の机へ置いて引き退がつた。教師は當惑したら

君子は威德があつても、見かけは愚人のやうにしてゐるのに喩へたのである。

良工苦心　技藝に長ずる者は胸中經營の苦心多きをいふ。杜甫の詩に――良工心獨苦。

梁上の君子　盜賊の異稱。昔、ある荒れた歳に、太丘の長の陳寔の所へ、一夜盜賊が這入つて梁上に止まつた。寔陰かにそれを見て、子孫を呼び、色を正し、之れに訓へていふのには、「一體人間は自分で勉めなければならぬ。不善の人だつて何も始めから惡人であつたしい顏付であつたが、でも『これは難有う』と生徒に代つて禮を言つた。

或時は『お前方は行儀が惡くていかん。己が一つ演說をして聞かせる』と言つて、彼は運動場などで生徒を呼び集めて何か高聲で喋る。ヒヤ〳〵と囃せば、譯のわからぬことを、何時までも喋つて居た。

【評】『村の西郷』の中の一節である。この作は「西郷」といふ綽名で通つてゐる村の惡たれ男を書いたものだが、其の男が若い時から、年を老るにつれて次第に其の性格の根柢は變らないが、其の表面に現はれる行動の變つて行く有樣がよく書いてある。此處に引用したのは、村の小學校へふらりと來ては色々の所作をする所であるが、これだけで見ても、或る一種の變つた性格の男の活躍してゐるのが見える。

星湖氏の文章には殆ど人爲の細工といふものがない。極めてナマな事實を唯だ其の儘に書き現はさうと努めてゐるやうである。華やかではないが、其の代りに、書いてあることはすべて眞實だといふ感が深い。徒らに絢爛を欲のではない。習ひが性となつて遂にさうなるのである

梁上の君子は卽ちさうだ」と。

立錐の地無し　錐を立てる程の地もないといふこと。「秦六國の後を滅して立錐の地なからしむ」と『史記』の留侯の所にある。

綸言汗の如し　綸言は王者の言である。卽ち天子の言は、一度口から出ればまた反らざること、出た汗の再び體內に入ることの無いやうなものである、といふのである。

纍纍として喪家の狗の若するならば美辭麗句を書並べても濟むであらうが、眞實を欲してしかも情味を索然たらしめないことは難い。これらの兩者の何れが眞の文章であつて、其の何れに多く人を動かす力があるかは改めて言ふを俟たぬであらう。星湖氏の文章は、眞摯な點に於いて、他のすべての缺點を補うて餘りがある。

芝居（永井荷風）

長吉はいか程暖かい日和でも流石は冬のことで、暫くは場所を選ばず暖かい家の中へ這入りたいやうな氣もしてゐた處から、其のまゝ芝居の建物の片隅にあいて居る狹い立見の戶口へ進み寄つた。土間から直ぐに、おそろしく立場の惡い梯子段が立つて居て、中程から曲るあたりはもう薄暗く、臭い生暖い人込の溫氣が猶更暗い上の方から吹き下りて來る。頻と役者の名を呼ぶ掛聲が聞える。それを聞くと長吉は、都會育ちの觀劇者ばかりが經驗する特種の快感と、特種の熱情を覺えた。梯子段の二三段を一躍びに馳上つて、人込の中に割込む。と、何の事

し　纍纍は志を得ない貌。喪家は新たに人を喪つた家である。即ち家人が哀み荒んでゐて、犬に食物を與へずにあるので、纍纍然としてゐるのである。

累卵の危き　卵を累ねたほどに、非常に危いこと。司馬相如の『巴蜀を喩す檄』に、「累卵の危きを去つて、永安の計に就く。豈美ならざるか」

屋下に屋を架す　前人の既に爲したことを、後人が徒らに模倣して、新たに少しも發明する所のないのを譏つた言葉である。殊に無益の言論編述をなすをいふ。

我より古を作す　我より故事となるべきことを創作する義で、舊套に拘泥しないのをいふ。眞に我を自覺したものは、すべて皆な此の覺悟がなければならぬ。

禍常に蕭牆の中より起る　禍は外より來ずに、いつも近くわが住む所から起るといふ義。蕭牆は門屏である。

矮人看戯　劇場で背の低い者が、背の高い者の後にゐて、劇を見ることの出來ぬ所から、唯だ前なる人の批評を聞いてこれに雷同するをいふ。人の見識のないのはない大きな船の底へ下りたやう、床板の斜めになつた、低い屋根裏の大向は、一ぱいに詰つてゐる見物人の頭で、後の隅々についてゐる小さな瓦斯の裸火の光を遮られて、非常に暗いだけ狹苦しいだけ、猿のやうに人のつかまつてゐる前側の鐵棒からは劇場の内部は其の天井ばかりがいかにも廣く、燈火の光に色づいて濁つた空氣を越して、舞臺は小さく遠く見えた。舞臺はチョンと打つた拍子木の音に、今丁度廻つて止つた處である。極めて一直線な石垣を見せた臺の下に、汚れた水色の布が敷いてあつて後を限る書割には小さく大名屋敷の土塀を描き、其の上の空一面をば、無理にも夜だと思はせるやうに、隙間もなく眞黑に塗りたてある。長吉は觀劇に對する此れまでの經驗で「夜」と「川端」と云ふ事から、きつと殺し場に違ひないと、幼い好奇心で丈伸をして首を伸ばすと、果せるかな、絶えざる低い大太鼓の音に例のバタ〳〵が聞えて、左手の辻番小屋の陰から、仲間の野郎と薦を抱えた女とが大きな聲で爭ひながら出て來る。見物人が笑つた。舞臺の人物は落したものを捜す體で何かを取上げると、突然前とは全く違つた態度

になつて、極めて明瞭に、淨瑠璃外題梅柳中宵月勤めまする役人……と讀みはじめる。それを待構へて彼方此方から見物人が聲をかけた。再び輕い拍子木の音を合圖に、黑衣の男が右手の隅に立てた書割の一部を引取る。何れも上下を着た歌唄ひ三人、三味線彈き二人が窮屈さうに狹い臺の上に並んで居て、直ぐに彈き出す三味線から、つゞいて歌唄ひが聲を合して唄ひ出した。長吉は、この種の音樂にはいつも興味を以て聞き馴れてゐるので、場内の何處かで泣き出す赤子と其れを叱咤する見物人の聲に妨げられながら、而も明かに歌ふ文句と、三味線の手までを聽き分ける。

おぼろ夜に星の影さへ二ツ三ツ、四ツか五ツか鐘の音も、もしやわが身の追手かと……

又しても輕いバタ〳〵が聞えて、夢中になつて掛聲する男のみならず、場中一體が氣色立つ。それも道理だ。赤い襦袢の上に紫繻子の幅廣い襟をつけた座敷着の遊女が、冠る手拭に顔をかくして、前かゞまりに花道から駈け出たのである。

に喩へた言葉である。

咳唾自ら珠をなす　作文の才に富んでゐる人のことである。即ち錦心繡腸の人は唾すら珠と化すとの義で金玉の名句をたやすく吐き出すに喩ふ。

骸骨を乞ふ　老臣の職を辭せんと乞ふことをいふ。既に老いて無用の人であるから、自ら骸骨に喩へたのである。范增の「天下の事大に定まる。君王自らこれを爲せよ。願くは骸骨を賜ひて卒伍に歸せん」とある言葉より出づ。

河海は細流を擇ばず　度量の廣大なるに喩ふ。『戰國策』の李斯の上書に、「太山は土壤を讓らず、故に能く其の大を成す。河海は細流を擇ばず、故に能く其の深を成す」

渴すれども盜泉の水を飲まず　どんなに困つても不正のことはしないといふ喩。陸機の『猛虎行』に、「渴すれども盜泉の水を飲まず、熱すれども惡木の陰に息はず」

鼎の輕重を問ふ　鼎は天子の寶物である。從つて大小輕重を問ふべきでない。然るにこれを問ふは、帝位を

『見えねえ、前が高いッ。』『帽子をとれッ。』『馬鹿野郎。』などと呶鳴るものがある。

落ちて行衞も白魚の、舟のかゞりに網よりも、人目いとうて後先に……

女に扮した役者は花道の盡きるあたりまで出て、後を見返りながら臺詞を述べた。其の後に唄がつゞく。

しばし行む上手より梅見返りの舟の唄へ忍ぶなら〳〵闇の夜は置かしやんせ、月に雲のさはりなく辛氣待つ宵、十六夜の、內の首尾はエーよいとのよいとの。聞く辻占にいそ〳〵と雲足早き雨空も、思ひがけなく吹き晴れて、見かはす月の顏と顏……

見物が又騷ぐ。眞黑に塗りたてた空の書割の中央を大きく穿拔いてある圓い穴に灯がついて、雲形の蔽ひをば絲で引上げるのが此方からでも能く見えた。餘りに月が、大きく明るいから、大名屋敷の塀の方が遠くて月の方が却つて非常に近く見える。併し長吉は他の見物も同樣、少しも美しい幻想を破られないばかりでなく、去年の夏の末、お絲を芳町へ送るため、待合した今戶の橋から眺めた彼の

大きな圓い〳〵月を思ひ起すと、もう舞臺は舞臺でなくなつた。

着流し散髮の男がいかにも思ひやつれた風で足元危く步み出て、女と揩れちがひに顏を見合して、

『十六夜か。』

『淸心さまか。』

女は男に縋つて、『逢ひたかつたわいなア。』

見物人が『やア御兩人。』『よいしよ。やけます。』などゝ叫ふ。笑ふ聲。『靜かにしろい。』と叱りつける熱情家もあつた。

【評】『すみだ川』の一節である。この作の部分々々には、極めて巧妙な、精細な描寫が幾らもあつて、此の筆及び易からずといふ感を幾度びか吾人に起させた。玆に引用したのも亦たその內の一つである。常盤津の師匠の息子の長吉が、病後の身でぶら〳〵と散步してゐるうちに、いつか宮戶座の前に來て、ふと立見をする氣になつた所で本文は始まるのである。

奪はんとするものであるとの意。今は專ら人の價値を疑ふ場合に用ゐる。

間髪を容れず　時の甚だ急にして、すこしのひまもないことである。『說苑』の正諫篇に、「其の出ると出でざると間髪を容れず」

間然するなし　間は罅隙である。間然は其の罅隙を指して非議するをいふ。即ち間然するなしは罅隙を指して非議すべき點のないことである。『論語』の泰伯篇に出てゐる言葉である。

狡兎死して走狗烹らる　事のある時は用ゐられ、事が無くなれば罪せらるゝに喩ふ。范蠡の言葉に、「蜚鳥盡きて良弓藏められ、狡兎死して走狗烹らる」

上に交はりて詔はず下に交はりて驕らず　獨立特行の人の剛直なさまをいつたのである。眞に自己を信ずることの强い者は、皆なかうでなければならぬ。

俑を作る　惡例をはじめて作るをいふ。俑は葬に從ふ木偶人のことである。

善く游ぐ者は溺る　技能に長ずる者は、これに誇つてかへつて禍を招くことである。「河だちは河ではてる」

此の文を讀んでゐると、自分も今其の劇場の中に在つて芝居を見てゐるやうな氣がして來る。まともに舞臺を望んでゐる自分の周圍にさま〳〵の動作が起つたり止んだりしてゐるのを目に見、耳に聞いてゐるやうに思つて來る。讀者を此の境地に立たせるといふのは、つまり作者の藝術的天分がすぐれてゐるからであらう。

魔

（泉鏡花）

（畜生、）といつたが馬は出ないわ。ぴく〳〵と蠢いて見える大きな鼻面を此方へ捻ぢ向けて頻に私等が居る方を見る樣子。

（どう〳〵どう、畜生これあだけた獸ぢや、やい！）

右左にして綱を引張つたが、脚から根をつけた如くにぬつくと立つて居てびくともせぬ。

親仁大に苛立つて、叩いたり、打つたり、馬の胴體について二三度ぐる〳〵と廻つたが少しも歩かぬ。肩でぶツつかるやうにして横腹に體をあてた時、漸く前足を上げたばかり又四脚を突張り拔く。

（孃樣々々。）

と親仁が喚くと、婦人は一寸立つて白い爪さきをちよろちよろと眞黑に煤けた太い柱を楯に取つて、馬の目の屆かぬほどに小隱れた。

其內腰に挾んだ、煮染めたやうな、なへ〳〵の手拭を拔いて克明に刻んだ額の皺の汗を拭いて、親仁は之で可しといふ氣組、再び前へ廻つたが、舊に依つて貧乏動もしないので、綱に兩手をかけて足を揃へて反返るやうにして、うむと總身の力を入れた。途端に何うぢやい。

凄じく嘶いて前足を兩方中空へ飜したから、小さな親仁は仰向けに引くりかへつた、づどんどう、月夜に砂煙が潑と立つ。

白痴にも之は可笑かつたらう、此時ばかりぢや、眞直に首を据ゑて厚い唇をぱくりと開けた、大粒な齒を露出して、那の宙へ下げて居る手を風を煽るやうに、

といふのはこれから出た諺である。

第一義　聖者の自覺して得た所をいふ。『大藏法數』に「第一義とは卽ち無上甚深の妙理なり、その體湛寂、その性虛融、名なく相なく議を絕ち思を絕つ」

大行は細瑾を顧みず　大事を行はうとする者は、少しの瑾などはかへりみないといふことである。『史記』の項羽本紀に、「樊噲曰く、大行は細瑾を顧みず、大禮は小讓を辭せず」

大旱の雲霓を望むが如し　渴望の切なること。『孟子』に、「民のこれを望むこと、大旱の雲霓を望むが若し」

大道廢れて仁義あり　老子の語。無爲の大道が世に行はれた太古は、人の風儀が厚く、人氣が和らいでゐて、仁義はいらなかつたが、世が末になつて、無爲の大道が廢れてからは、人の風儀も薄く、人氣もあらくなつて、窮民とか惡人とかいふものが多くなつた所から仁義の道を立てゝ敎へねばならなくなつたといふものである。

大器晚成　大才は速に成就しないに喩ふ。『老子』に、

はらり〳〵。

（世話が燒けることねえ。）

婦人は投げるやうにいつて草履を突かけて土間へついと出る。

（孃樣勘違ひさつしやるな、これはお前樣ではないぞ、何でもはじめから其處な御坊樣に目をつけたつけよ、畜生俗緣があるだつぺいわさ。）

俗緣は驚いたい。

すると婦人が、

（貴僧こゝへ入らつしやる路で誰にかお逢ひなさりはしませんか。）

（はい、辻の手前で富山の反魂丹賣に逢ひましたが、一足前に矢張此路へ入りました。）

（あゝ、然う〳〵と會心の笑を洩らして婦人は蘆毛の方を見た、凡そ耐らなく可笑しいといつた仂ない風采で。

極めて與し易う見えたので、

（もしや此家へ參りませんでございませうか。）

（否、存じません。）といふ時、忽ち犯すべからざる者になつたから、私は口をつぐむと、婦人は、匙を投げて衣の塵を拂うて居る馬の前足の下に小さな親仁を見向いて、

（爲樣がないねえ、）といひながら、かなぐるやうにして、其の細帶を解きかけた、片端が土へ引かうとするのを、搔取つて一寸猶豫ふ。

（あゝ、あゝ、）と濁つた聲を出して白痴が件のひよろりとした手を差し向けたので、婦人は解いたのを渡して遣ると、風呂敷を擴げたやうな、他愛のない、力のない、膝の上へわがねて寶物を守護するやうぢや。

婦人は衣紋を搔合せ、乳の下でおさへながら靜かに土間を出て馬の傍へつゝと寄つた。

私は唯呆氣に取られて見て居ると、爪立をして伸上り、手をしなやかに空ざまにして、二三度鬢を撫でたが。

「大方偶無し、大器晩成す」

大義親を滅す　君臣の大義を全うせんがために、父子の私親を滅するをいふ。『左傳』に出てゐる言葉である。

大聲は俚耳に入らず　正しい音樂は俚俗の人の耳には分らぬがごとく、高尚な言は俗人に解らぬといふこと。『莊子』の天地篇にある

達人は大觀す　道理に通達する人は、よく公平の觀察をするので、事物の情理を得ないやうなことのないのをいふのである。

單刀直入　一刀にて直ちに敵陣に斬り込むをいふ。文章言論などの直ちに本題に說き入るに喩ふ。今、「短刀直入」と書くものあるは誤りである。

道聽塗說　塗は途である。途上で聽いて直ちに途上で說くは、輕薄な人のすることである。道聽塗說は、善い言を聽いても、心に留めて己の有にしないものゝことである。『論語』の陽貨篇に出てゐる言葉である。

桃李言はざれども下自ら蹊をなす　德ある人は默つて潛んでゐても、人が自然と歸服する。それは丁度桃李は華實があるので、自ら

大きな鼻頭の正面にすつくりと立つた。丈もすらすらと急に高くなつたやうに見えた、婦人は目を据ゑ、口を結び、眉を開いて恍惚となつた有樣、愛嬌も嬌態も、世話らしい打解けた風は頓に、神か、魔かと思はれる。

其時裏の山、向ふの峯、左右前後にすく〳〵とあるのが、一ツ〳〵嘴を向け、頭を擡げて、此の一落の別天地、親仁を下手に控へ、馬に面して彳んだ月下の美女の姿を差覗くが如く、陰々として深山の氣が籠つて來た。

生ぬるい風のやうな氣勢がすると思ふと、左の肩から片膚を脫いだが、右の手を脫して前へ廻し、ふくらんだ胸のあたりで着て居た其の單衣を丸げて持ち、霞も絡はぬ姿になつた。

馬は背、腹の皮を弛めて汗もしとゞに流れんばかり、突張つた脚もなよ〳〵として身震をしたが、鼻面を地につけて、一掬の白泡を吹出したと思ふと前足を折らうとする。

其時、頤の下へ手をかけて、片手で持つて居た單衣をふわりと投げて馬の目を

蔽ふか否や、

馬は躍つて、仰向けざまに身を飜し、妖氣を籠めて朦朧とした月あかりに、前足の間に膚が挾つたと思ふと、衣を脫して搔取りながら下腹を衝と潛つて橫に拔けて出た。

親仁は差心得たものと見える。此の機かけに手綱を引いたから、馬はすた〳〵と健脚を山路に上げた、しやん、しやん、しやん、しやんしやん、しやんしやん、……見る間に眼界を遠ざかる。

婦人は早や衣服を引かけて緣側へ入つて來て、突然帶を取らうとすると、白痴は惜しさうに押へて放さず手を上げて婦人の胸を壓へやうとした。

邪慳に拂ひ退けて、屹と睨んで見せると、其まゝがつくりと頭を垂れた。總ての光景は行燈の火も幽かに幻のやうに見えたが、爐にくべた柴がひら〳〵と炎先を立てたので、婦人は衝と走つて入る、空の月のうらを行くと思ふあたり遙に馬子唄が聞えたて。

街はずにゐても、人が爭つて來て、下に自然と小徑をつけるやうなものである。

蟷螂臂を怒らして車轍に當る　己が分を知らずして妄進すること。『莊子』の天地篇に出てゐる。

他山の石以て玉を攻くべし　小人を石に、君子を玉に比して、君子が小人に侵され乍ら、善く省修研磨して德器を成すに喩へたのである。『詩經』にある言葉である。

遼東の豕　みだりに自ら奇異なりとして誇るも、他人よりこれを見れば、凡庸たるを免れないに喩ふ。『後漢書』の朱浮傳に、「漁陽の太守彭寵、自ら功を負みて滿つること能はず。幽州の牧朱浮、書を與へて曰く、伯通自ら伐りて以爲らく、功天下に高しと。往時遼東に豕あり。子を生む。白頭なり。異としてこれを獻ぜんとし、行きて河東に至る。群豕の皆白きを以て慙を懷きて還りぬ。若し子の功を以て朝廷に論ぜば、則ち遼東の豕ならんと」伯通は彭寵の字。

燎原の火　惡の長じ易いことは、火の原野を燒く如く

【評】『高野聖』の第十八の後半から第十九の終りまでゝある。飛驒から信州へ越える山中の一つ家に神か魔かと思はれるやうな美しい婦人が住んでゐて通行の男を色香で迷はした擧句は、息をかけて獸にするといふ物凄い一場の物語を、實地に出會つた高野の聖が數年の後に、敦賀の宿で相宿の若い男にするといふのが、此の一篇の落想である。此處に引いた所は、富山の反魂丹賣がやはり其の色香に迷つた果てに、牡馬に變形させられ、明日は諏訪の馬市へ出されるといふので、今其の一つ家を出發する條下である。

鏡花氏の文章は一時神品として世間に喝采されたものであるが、中には癖の多い不自然な文章も隨分あつた。併しこの『高野聖』は全體が說話體になつてゐるだけに、他の作のやうに作者縱橫の文才が却つて累をなして晦澁に陷らしめたといふやうな所も少く、描かれた光景が素直に讀者の頭に入る。けれども、話が餘りに上手過ぎると、其の話振りの面白さばかりに釣込まれて、肝心の事實が後へ殘らぬものであるが、それと同じ缺點が此の作にも多少あるやうだ。鏡花氏の文を取つて範としやうとする者は、心して其の輕妙な話振りに惑はされずに、精緻な觀察と其の描寫とに注目しなければならぬ。

この一文に見ても、文章の調子を重んずるの結果、妙に癖のあることは、蔽ふことは出來ぬけれど、其の觀察と描寫とに於いて、容易に他人の企及を許さぬ文境にはいつてゐることは、何人もこれを否むことは出來ない。名文であるといへる。

北國の淨罪界（谷崎潤一郎）

汽車の市街を離れるにつれて、昨夜氣が付かなかつた津輕平野の朝の大雪景がパノラマのやうに展けて來た。暗澹とした鼠地の空の中途に、くつきりと白い山脈が重疊して、其の麓から一望千里の皚々たる雪が、遠く遙かに野を蔽ひ、林を埋め、川を塞いで、人と馬とは砂糖に群がる蟻のやうに、點々として黑く小さく

はげしきに喩ふ。『左傳』の隱公六年に、「商書に曰く、惡の易きや、火の原を燎くが如く、嚮ひ邇づくべからず」

素封の富　素封家といへば富豪のことである。即ち財に富んだ人は、封土はなくとも、利息其の他の收入があつて、其の樂みは封君にもあたるといふのである。素は空である。

措大　書生のこと。もとは其の能く大事を擧措するをいつたのであるが、今は大抵、「窮措大」「老措大」などと用ゐて、稱揚の稱には殆ど用ゐないやうである。

祖道の宴　送別の宴會である。「祖は徂である。故に行を餞するを祖道といふ」と『風俗通』にある。

宋襄の仁　詰らぬ憐れみをかけること。春秋戰國の時、宋の襄公茲父といふ人が、楚の成王と泓に戰つた折、公子の目夷が、敵の未だ陣せない前に擊ちたいといふと、公の曰く、君子は人を阨に困しめるものではないと。而して却つて楚の爲めに敗られた。これを世間の者が笑つて、宋襄の仁と云つたのである。事は『左傳』

動いて居る。唯だ一面に眞白な銀光が、窓硝子の外にきら〳〵と光つて、瞳の痛む程車室の中は明るくなつた。

深く、厚く、大いなるシーツのやうに蔽ひ擴がつた雪の上を、一直線にするすると走らせる橇の影も見えた。黑い外套頭巾に總身を包んで、藁沓を蹈みしめ蹈みしめ、朔風に逆ひながら、後向きに平原を横切つて進んで行く人影もあつた。はら〳〵と寒さうに鬚を振ひながら、長い列を作つて歩んで行く馬の蹄の先からは、雪が煙のやうに散亂して白く舞ひ上るのが見えた。凡てが直彦には生れて始めての、莊嚴な清淨な、北國の光景であつた。

「あゝ、己は好い所へ來た。己の體の內に漲つて居る反逆的な、淫蕩な血潮も、此の嚴肅な潔白な天地の間に置かれたら必ず鎭靜するであらう。思へば己は戀人との誓約を忘れて、人もあらうに、忌まはしい癲病患者と、昨夜危く罪を犯さうとする所であつた。……されど戀人よ、安んじ給へ、見渡す限り白皚々たる北國の淨罪界は、御身の心にかなはざる邪念妄想を、我が腦中より一掃しくれたり。御身は遂に我が生涯に於ける唯一人の女性なるべし。此の貴き淨罪界を見出し得たる予は眞に幸福なり。謝す、謝す、我は北國の天地に謝す。」

彼は腹の中でかう叫んだ。さうして、近來にない爽かな、輕快な氣分になつて淺蟲の停車場に下車し、殊更人の蹈み固めない柔かい雪の上をさく〳〵と歩みつつ、東奧館の門を潛つた。

【評】『颱風』の一節。二十四までは全く純潔であつた極めて美貌な直彦といふ日本畫家が、其の年の暮れに宴會の崩れから無理强ひに引立てられて、生れて始めて歡樂の巷へ足を入れた。そしてそれが病みつきとなつて、せつせと通つてゐるうちに、歡樂の女の不思議な魔力と手管とに飽くまでも翻弄された擧句、僅か一と月ばかりの間に全く官能を鈍らされて、不能な狀態になつてしまふ。そこで彼は自分で自分の身を考へる。有爲な前途を持つてゐる若い命を、こんなあつけない放蕩の爲めに生きがひのないものにするのは何としてもあまりに情ない。どうかして此の一旦凋みかゝつた命の根を培ひ、

の僖公二十二年に詳かに書いてある。

其の言を河漢にす　言ふ所の旨意を深遠茫漠たらしめ人をして測知するに難からしむることである。『莊子』に、「吾其の言を驚怖す、なほ河漢の極り無きが如し」

祖述　遠く其の道を宗とし、これを受けつぎて述ぶること。『中庸』に、「仲尼は堯舜を祖述し、文武を憲章す」

鼓を鳴らして之れを攻む　罪をならして攻むること。『論語』に、「吾が徒にあらざるなり、小子鼓を鳴らしてこれを攻めて可なり」

涸渇した體から再び鋭敏な官能の芽の萠え出づるやうにしようと、暫らく戀に遠ざかつて健康を恢復する爲めに、凡そ六ヶ月といふ豫定で北國への旅行の途に上る。茲に引いた所は其の旅行中の一節である。

前の日、黒澤尻から盛岡へ行く汽車の中で、三人の兄弟の癲病患者と乘り合せた直彦は、他の乘客が不愉快さうな流し眼を送つてゐる中で、獨り彼等の不幸に同情して深切を盡してやる。併し其の心持の底を探つて見れば、彼は必ずしも單に世に謂ふ義俠心からばかりでさういふことをやつたのではない。實は別れて來た女との約束から、無理に壓迫してゐる生理上の不可抗力と戰はねばならぬとは思ふものゝ、一方にはまた旅に出ると恢復して來た健康な體の中に焰々と燃え上つてゐる煩惱の炎を抑へることの難いのに苦しんでゐる。其の矢先にたま〳〵出會つたのがこの三人の人達である。兄は既に病毒の爲めに凄じい容貌をしてゐるが、妹の二人はまださうなつてゐるのではない。殊に末の娘の器量は人並すぐれて美しくもあれば水々しい肉附をも持つてゐる。普通ならば彼には近寄ることの危險な相手であるが、茲には越えることの出來ない惡疾といふ垣根が結つてある。彼は安心して彼等の爲めに所謂義氣ある青年となつたのである。

（かういふ異常な病的な心理に興味を以て、一篇の落想を賦與するのが谷崎氏の特色の一つである。）

けれども、翌朝、朝霧の中に消えて行く函館行の汽船の影を青森灣頭に見送つてしまふと、昨夜の狂人じみた自分の義俠を苦笑せずにはゐられなくなつた。彼は昨日盛岡まで行くつもりで汽車に乘りながら、不思議な道連れの爲めに青森まで來てしまつたのである。豫定までも狂はした一時の義氣の結果は今朝の自分を啞然たらしめた。彼は盛岡へ引返すのは大儀であるからといふので、青森から二つ驛手前の淺蟲溫泉へと志した。本文は其處へ續くのである。

パノラマのやうに展けたといふ津輕平野の大雪景が、小さな幾つかの點景

夏の蟲の火に入るが如し　自分の危きを知らずして、進んで死地に陷るに喩ふ。『智度論』に「愚癡多き者は燈蛾の火に赴くが如し」

淚をふるつて馬稷を斬る　法は枉ぐることが出來ない故に法を正して罰を行ふけれども、内には滿腔の慈愛心のあるをいふ。事は『三國誌』の蜀志諸葛亮傳に出てゐる。

南風競はず　南風は南方の國風の詩である。其の聲調の盛んでないのを、南方の國の衰へて振はないのに比したのである。『左傳』の襄

公十八年に、「師曠曰く、吾れしばしば北風を歌ひ、又南風を歌ふ。南風競はず、死聲多し。楚必ず功なからむ」

囊中の錐　内に才能ある人は忽ち外にあらはるゝに喩ふ。『史記』の平原君傳に、「平原君曰く、夫れ賢士の世に處するや、譬へば錐の囊中に處るが若し。其の末立どころにあらはる」

雷同　人の言を聞いて、善惡の差別がなく、これに附和することである。『後漢書』の桓譚傳に、「雷の聲を發するや、衆物同じく應ず。俗人是非の心なく、言を出だして同ずる者、これを雷同といふ」

洛陽の紙價貴し　著書の多く世に行はれることをいふ。『晉書』の文苑傳に、「左思字は太冲、齊國臨淄の人。貌寢に口訥。而して辭藻壯麗。齊都の賦を造る。一年にして乃ち成る。復た三都を賦せんと欲す。思を構ふること十稔。賦成るに及び、時人未だこれを重んぜず。張華見て曰く、班張の流なりと。是に於いてか競ひて相傳寫し、洛陽之れが爲めに紙貴し」

に依つて却つて大きく描き出されてゐる。千里の雪の野に人と馬とが砂糖に群がる蟻のやうに點々として黑く小さく動いてゐると言つたのを始めとして一直線に走らせる撬の影も、後向きに平原を横切つて行く藁沓を穿いた人の影も、馬の蹄の先から煙のやうに散亂して白く舞上る雪の影も、一つとして生きた雪の野の光景をさながらに思ひ浮ばしめないものはない。「唯一面に眞白な銀光が窓硝子の外にきら〳〵と光つて、瞳の痛む程、車室の中は明るくなつた」の一節は、谷崎氏の最も大きな特色である官能描寫の一端が、僅に此の本文の中に見えただけに過ぎないが、これだけでもよく眩しい雪の反射を讀者にも感じさせるものがある。更に獨語に至つては多少の省察はありながら、標準を外部に置いて、繩に自分を抑へてゐる主人公の動搖してゐる心持を暗示して餘りある。

つるし大根

（島崎藤村）

黄ばんだ日が映つた。收穫を急がせるやうな小春の光は、植木屋の屋根、機械場の白壁をかすめて、激しい霜の爲に枯々に成つた桑畑の間を通して、室賀の家の土壁を照した。家毎に大根を洗ひ、それを壁に掛けて乾すべき時節が來た。毎年山家での習慣とは言ひながら、斯うして野菜を貯へたり漬物の用意をしたりする頃に成ると復た長い長い冬籠の近づいた事を思はせる。

隣家のおばさんは裏庭にある大きな柿の樹の下へ蓆を敷いてネンネコ半纏を着た老婆さんと一緒に、大根を乾す用意をして居た。まだ洗はずにある大根は山のやうに積重ねてあつた。斯の勤勉な、勞苦を勞苦とも思はないやうな人達に勵まされて、室賀の御新造も手拭を冠り、ウハツパリに細紐を卷付けて、りんを助けながら働いた。時々隣家のおばさんは粗末な垣根の所へやつて來て、御新造に聲を掛けたり、お齒黑の光る口元に微笑を見せたりした。りんは隣家のおばさんと

無何有之鄉　何もない鄉、寂絶無爲の地。造化の自然を樂しむべきの地に喩ふ。『莊子』に「何ぞ之れを無何有の鄉、廣漠の野に樹ゑざる」

無稽の言　稽は考である。無稽は古への道に考へ合さぬこと。卽ち根據のない言である。『書經』に、「無稽の言は聽くこと勿れ」

無間地獄　八熱地獄の中の第八の地獄で、責罰苦悶を受くること間斷なき地獄といふ意味である。

寧ろ雞口となるも牛後となるなかれ　雞の口は小さいけれども、猶ほ食を進む。牛の尻は大きいけれども、乃ち糞を出す。小なるも潔く上に立つがよい。大なるも卑汚の地には居るべきでない、との意を寫した言葉である。『史記』の蘇秦傳に、「蘇秦、韓の宣惠王に說いて曰く、臣聞く鄙諺に曰く、寧ろ雞口となるも牛後となるなかれと。今西面して臂を交へて秦に臣事せば、何ぞ牛後に異ならんや。夫れ大王の賢を以て强韓の兵を挾んで牛後の名あらんこと、臣竊に大王の爲めに之れを羞づと」

同じやうに荒れ性で、皸の切れた手を冷たい水の中へ突込んで、土のついた大根を洗つた。

俗に『地大根』と稱へるのは、この荒寥とした土地でなければ產しないやうな野菜であるが、室賀でもそれを白い『練馬』に交ぜて買つた。地大根は、堅く、短く、蕪を見るやうで、土地慣れない御新造が繩で縛らうとするには大分時が要つた。

學校のひけた頃旦那は小倉の行燈袴を穿いて歸つて來た。やがて洗ふものは洗ひ、縛るものは縛つて、半分ばかりは乾かされる用意が出來たので、りんは旦那を呼びに行つた。旦那は勝手口の方から梯子を持つて來て、それを土壁に立掛けた。それから、旦那の力ではやうやく持上るやうな、重い大根の繫いである繩を手に提げて、よろ〳〵しながらその梯子を上つた。女共は笑つて、搖れる梯子をおさへた。

【評】『奉公人』の中の一節である。秋も深くなつて、山國では大根を壁にかけて乾すべき時節となつた。そこで、土地の人ではない室賀の一家も近所の人達と同じやうに、大根を洗つて縛つて乾した。事柄は何でもないが、其處に懷かしい一味の情趣の溢れてゐるのが感ぜられる。

「黃ばんだ日が映つた」といふ冒頭の一句、既に小春の頃の晴れた日影を目に見るやうに描き出して餘蘊がない。それからは落ち付いた無駄のない筆で徐ろに叙述の歩を進めて行つて、唯だ必要なことを必要な言葉だけで素撲に寫してゐる。それがいかにも心持よく胸に入つて來る。

無盡藏　物を取つても取つても盡きないことをいふ。『大藏法數』にある言葉である。

烏合の衆　寄り合ひ勢で、統一のないのをいふ。「新起の寇、烏合の衆にして吳蜀の敵にあらざるなり」「突騎を發して烏合の衆をにじるは、枯を摧き腐を折くが如きのみ」

怨骨髓に入る　『史記』の秦紀に、「繆公の此の三人を怨むや、骨髓に入る」とある。怨の極めて痛切なるをいふ。

雲水　行脚僧をいふ。凡そ沙門の世に處するは、風雲流水の去住無心なるが如き故なり」

有爲轉變　佛教の語。有爲無常の萬法は、遷轉異變して須臾も止まないといふこと。

能書は筆を擇ばず　上手の書家は筆の善惡を擇ばないといふこと。『唐書』の歐陽詢傳に、「褚遂良精筆佳墨にあらざれば、未だかつて輒ち書せず。かつて虞世南に問ひて曰く、吾が書は詢にいづれぞ。答へて曰く、吾れ聞く、詢は紙筆を擇ばず、皆な志すが如きを得と。君豈比するを得んや」

叙情文

ヨルダン河

（德富蘆花）

死海よりまた馬車に上り、游泥、漸くにして草、灌木、名も知らぬ木の茂れる林、所擇ばず駈くること約三十分にして、馬車は、とある溝川の岸にとゞまりぬ。『こゝがヨルダンの渡にて候』と馭者は案内す。

二十間に過ぎじと見ゆる濁流、くの字を畫き、泡なして流る。對岸には接骨木めきたる木、黃白き花を冠りて水に俯し、楊類の雜木と長大なる葭と、風にそよぎ、泥深きこなたの岸には葦の根はびこり、檉柳やうの針葉樹など叢生し、上流、林梢開けたる所に、向山の崖見えたり。『生命の水』に聯想せらるゝヨルダンはこか。ヨハネが施し、キリストが受けし洗禮の水はこの濁川の水なりしか。問へば、『傳說の受洗はこゝにて、エルサレム順禮の來り浴するもこゝに候』と馭者は傍らなる二つのあばらやに、ものゝ屑など散りたるを指しぬ。

同行のアブダラ君は、氣ばやく著物ぬぎ棄てゝ、黑條々の身を跳らして河に飛びこみ、彼岸に泅ぎつきて葭など手折りつゝあり。マツケー君はポツケツトより小さき瓶取り出して、土產にヨルダンの水を汲む。余は默然として濁れる水の流れを見る。

水ものいはず。彼岸の葦は頻りに風に動かさる。『汝何ものを求め、何を見むとてヨルダンに來りしや。眼を開け、眼を開け』と余に向つて語る。

あゝ余は實に盲目なり。美を色相に求めて皮下一寸にだに及ぶ能はず。淺薄眞に恥づべきかな。願はくばこの眼の膜を截りて、眩して盲すともよし、願はくば爾が蔽なき光の美を見しめ給へ。

余は河水に手すゝぎて立ち上りぬ。水は音なく流れ、葦は頻りにうなづく。

應接に暇あらず　山水の景勝の多いことをいふ。劉義慶の『世說』に、「王子敬云、山陰道上より行く、山川自ら映發し、人をして應接に暇あらざらしむ」

驕る者は久しからず　『孟子』に、「自ら敖るものは長しからず」とあるより出づ。

思半ばに過ぐ　思考して自ら得る所の多いのをいふ。『易』の繫辭に、「知者、其の彖辭を觀ば、則ち思半ばに過ぎん」

國破れて山河あり　國は社稷を重しとなすに、社稷は殆ど亡びて、たゞ山河のみ

十分の後、呼ばれてまた馬車に上りぬ。一鞭川は隱れぬ。そのさゝやきは耳に殘る。ヨルダンよ、とこしなへに流れよ。

【評】『順禮紀行』の一節。キリスト教徒の生命が恒に泉み出すヨルダンの水が、かゝる濁流ならんとは誰か思はむ。蘆花氏は默然として唯だ濁れる水を見てゐたとあるが、吾等は其處に無限の感慨を喚び起して、そして鮮かにそれを味ふことが出來る。從つて、其の次ぎに來る感慨も極めて自然に胸の底まで滲み込んで來るのを覺える。蘆花氏は後にトルストイ翁と共に水浴などを試みたといふワロンカの流を指して、わがヨルダンなりといつてゐる。生命の水は亡び果てた古蹟に求められずして、生ける偉人の胸から掬し得られたのである。

ありといふので、感慨にたへぬのである。杜甫の『春望』の詩に――國破山河在。城春草木深。感時花濺淚。恨別鳥驚心。烽火連三月。家書抵萬金。白頭搔更短。渾欲不勝簪。

口に蜜ありて腹に劍あり　外は和らかで、內は陰險な小人を稱していふ。『唐書』に「李林甫相たり。凡そ才望功業己の右に出づるもの及び上の爲めに厚遇せられて、勢位己に逼らんとするものは、百計これを去る。或は陽に之れを善くし、甘言を以て陰かに之れを陷

銀杏の葉（水野葉舟）

又秋が來た――

獨りで際限も無く考へ込まねばならぬ時が來たのだ――もう十月も半を過ぎると、空も、地も、林も、野も日も光も何となく靜まり返つてしまつて、だるさうに眠りかゝつた樣になる。私は幾度となしに吐息をついて、昔を思ひ浮べる。

胸の奧の方に、ぢつと目を瞑つてゐる過去が、そつと呼吸をしはじめた樣に……

……何處からとも無く、昔、心に響いた響が、響き返して來る。

日が暖かく照つてゐる。室の中が黃色を帶びたその光でぱつと明るく見える。

私は兩手で顏を覆つて、ぢつと、だん〳〵地の底にでも沈んで行く樣な、もう、心の張合もなくなつて、倦みきつた樣な心持がして、ぢつと壁に倚り懸つて身動きもせずにゐる――ほんとに、だるい、退屈した心持だ――そして心では、その昔の記憶を思ひ浮べて、いはれも無い吐息をつく。

る。世謂ふ、林甫は口に蜜ありて腹に劍ありと」

隗より始む　士の優れたものを招かうとするには、先づ劣者を用ゐ始めるがいゝといふことである。『戰國策』に、「燕の昭王位に卽き、身を卑くし幣を厚くして以て賢者を招く。郭隗先生曰く、臣聞く、古の人に君たるもの、千金を以て千里の馬を求むるものあり。三年得る能はず。涓人君に言て曰く、請ふこれを求めんと。君これを遣はす。三月にして千里の馬を得たるに、馬已に死す。其の骨を五百金

あ……あ、秋になつた。力の無い、冷たい手で、そつと頸筋をなでられた樣な心寂しさだ。

私は、机の上に置いてあつた手馴れてゐる聖書をとつて開けて見た。すると、丁度開いた處に、きれいに黃葉した銀杏の葉が挿まつてゐた。――そしてそれに女の字で、『かなしき夢』と書いてある。

私は飛んでも無いものを見付けた樣な氣がした。『悲しき夢』――さうさ。今迄の己の生涯も、まあ考へて見れば、かなしき夢だ――と諦めた樣に言つては見たが、言ふに言はれ無い樣な、寂しい氣になつて、すぐその女の顏を思ひ浮べる。

こんな一枚の落葉だけれど、これを見てゐると、二人の戀のなりゆきを、始めから終まで思ひ出される。逢ふ度に女の目が夢を見てゐる樣な時から、『もう一日一日とお別れの日が近づいて來ますよ。』と言ふ樣に、沈んだ寂しさうな思ひを見せ出した時まで……私が、何故そんなに別れる日が來る來ると言つて、折角暖

に買ひ、反つて以て君に報ず。君大に怒りて曰く、求むる所のものは生馬なり。安んぞ死馬を事として五百金を捐てんと。涓人對へて曰く、死馬すら且つこれを五百金に買ふ。況んや生馬をや。天下必ず王を以て能く馬を市ふとなし、馬今至らんと。是に於て朞年ならざるに、千里の馬至るもの三つ。今王誠に士を致さんと欲せば、先づ隗より始めよ。隗すら且つ事へらる。況んや隗より賢なるものをや。豈千里を遠しとせんやと。是に於て昭王隗の爲め

かい心でゐるのを寂しくするのだ……と言ふと、私はもう、その事ばかりが思へて……と言つた。

この女と向つてゐると、私の戀には、火の燃える樣な、嵐の樣な心持は無い。嬉しいのでも、悲しいのでも、染み入る樣だ。それで、別れる時にだつて――やつぱり秋だつたが――二人は何時も逢ひびきする場所に行つて、低い聲で話し合つた。淚が染み出る樣に出て來たが、お互に默つてはそつとふいてゐた。

それから五日たつて、女は家と一緒に四國の方へ行つてしまつたが――その道から、手紙にはたゞ簡單に出立の事を書いて、この銀杏の葉を封じて來たのだ。

私はその時も、たゞ心の次第に冷えて行く樣に思つた……

【評】『惡夢』の中に收められてある小品『花』の前半である。讀み終つた所で先づ氣の付くのは、何處までも自由に安らかに事をも心持をも其儘筆に上せてゆくと云つた書き振りである。劈頭先づ秋――秋といふものゝ、何處となく、しんと靜まり返つてゐることを記したあたりも、葉舟氏獨特の官能描

に宮を築きて之れを師とす樂毅は魏より往き、鄒衍は齊より往き、剛辛は趙より往き、士爭ひて燕に湊まる」

挂冠　官を辭すること。『漢書』の逢萌傳に「萌字は子慶、北海都昌の人、長安にゆきて學び、春秋經に通ず。時に王莽其の子宇を殺す。萌友人に謂つて曰く、三綱絶えたり、去らずんば禍將に人に及ばんとすと、即ち冠を解き、東都の城門に挂け、家屬を率ゐ、海に浮んで遼東に客たり」

會稽の恥を雪ぐ　『史記』の貨殖傳に「勾踐十年にして國富み、遂に强吳に報い、會稽の恥を雪ぐ」とある。會稽の恥とは、越王勾踐が吳王夫差に攻められて會稽山に隱れ苦しんだことをいふ。雪ぐは拭ひ、洗ひ、淸むるのである。

畫餅　畫いた餅は食ふことが出來ぬ。物の役に立たぬことをいふ。『魏志』に出てゐる言葉である。

畫龍點睛　事物の肝要な所をいふ。文章詩歌など、一字一句を下して、全篇爲めに生動するやうなのをいふ。『水衡記』に、「張僧繇金陵の安樂寺において龍を壁に

寫がよくしつとりと當て欲まつて、自然と讀む者の心持を作者の境地に惹き入れて行く趣がある。ふと机の上にあつた聖書を明けて見たら、黃葉した銀杏の葉が挿まつてゐたと事もなげに書いて來て、無造作に『悲しき夢』の追憶を呼び起して來る所、そして其の追憶の內に讀者をも何時か誘ひ入れて行く所、たるんだやうな文章であり乍ら、しかも無駄といふものがちつとも無くてよく其の情懷を描き出してゐると思ふ。殊に悲しき秋などゝも云つて、次第に草木の凋落して行く秋の自然は、一年の內でも最も悲しい追憶を呼び覺ますにふさはしい時である。此の文のしんみりとした哀愁を湛えて、よく讀者を同感させるのは、一つは此の自然といふもののうちに、事と心持を投げ込んで、其の渾融した境を忠實に描き出した所にあるのだと思ふ。

一葉亭主人（池邊吉太郎）

去明治三十五年の春なりしかと覺ゆ、其前年北淸に於て相識れる久松省三君の紹介を以て始めて長谷川君と相見たるは。久松君は一年志願兵出身の大尉なり。天津守備隊として彼地に在りて長谷川君とも相交はるに至れりといふ。相携へて余の宅に來訪したること一兩度、又余より兩君に請ひて晩食を共にしたること一度、此折長谷川君は其再度の滿洲行を企て居て爲に余に謀る所あり。余は素より二葉亭四迷の文名を知るといへども、長谷川辰之助の志文章に在らずして而して却て政治經濟に在るを始めて知り、相語りて相得る所なきにあらざりしが、然も事功を以て君に期すること能はず、寧ろ文章を以て君に期し聊か託する所もありたり。

やがて君は其再度の滿洲行を遂げたれども其志を得るに至らず。還りて內藤湖南君の介を以て大阪朝日に入り、更に東京常住の故を以て東京朝日に出入するに及び、相見ること滋くして相識ること深きを加へたるが、君は猶余が君に期する所を爲すを屑とせず、其爲す所は卽ち責を塞ぐに止まれり。斯くして日露戰時を經過し、三十九年秋に至り、弓削田君の苦勸により始めて小說『其面影』

畫き、睛を點ぜず。つねに曰く、これを點ずれば卽ち飛び去らんと。人以て誕と爲す。因つて其の一に點ず。須臾にして雷電壁を破り、一龍雲に乘つて天に上る。睛を點せざるものは皆な在り」

換骨奪胎　古人の詩文の意趣を取り、其の語句だけを換へて自分のものにすることである。黃山谷の說に曰く、「詩意窮りなくして人の才は限あり。限あるの才を以て窮りなきの意を追はゞ淵明、少陵と雖、工なるを得ざるなり。然れば其の意を易へずして其の語を造るこれを換骨法といふ。其の意をまねてこれを形容するこれを奪胎法といふ。

黃泉の客　黃泉は地下のこと。土の色は黃であるからである。卽ち黃泉の客とは死者のことである。

瓜田に履を納れず　嫌疑を避くるに喩ふ。『文選』の古詩に——君子防未然。不處嫌疑間。瓜田不納履。李下不整冠。

華胥の夢　黃帝が夢に華胥の國に遊んだ故事に本づいて、善き夢をいふ。『列子』に、「黃帝天下の治まらざるの著あり。東京朝日紙上に現る。滿都頭を回らして文星の復輝くを瞻る。余の驚喜如何ぞや。然も君は却て怏々たりき。四十年冬小說『平凡』の著あり。坪內逍遙君以て近時第一等の著と爲せり。君はます〳〵怏々たりき。其名の文士籍に列するを見ては則ち顰す。余之を如何ともすること能はざりき。君と相識りて以來此に至るまで、余は實に君の友僚として徒らに君に向つて其の欲せざる所を强ひたり。君亦之を如何ともする能はざりき。

昨年春露國新聞記者ダンチェンコ君來る。君と交りて相得たり。君に勸めて駐露朝日特派員たらしめんとす。而して之を余に言ひ、又之を村山社長に言ふ。此時君の雄心動きて禁ず可からざる有り、君直に起ちて村山社長に謀り、又余に謀る。社長以て善と爲し、余亦善とせざる能はざりき。君始めて飛揚の態あり。アヽ君と相識りて六年、余が君の顏面の霽れ渡れるを見たるは實に此時を以て始めと爲す。君思へらく、日露の國際上、一新聞記者として以て政治經濟の事を善くし以て其の素志を貫くに足る可しと。喜んで眠る能はざりしもの數夜、其成功を其胸中に描きては消し、描きては消し、終に得る所あるに至りて而して安眠の夜を得るに至れりといふ。君樂めり余も亦始めて君と共に樂むことを得たり。豈思はんや、君は既に從前肺患を有し、斯くて一往千萬億里復日本に歸らざるの客とならんとは。斯くと知りたらば如何に君の志に背きても而して君をして余を怒り絕交せしむるも、必ず其露國行に同意せず、以て其生命を引伸ばしたらんを。君の生命は日本の文學の一生命にはあらざりしか。悔ゆるも及ばず。泣くも返らず。君に對する余の友誼は反つて日本の文學の一生命の喪失とはなりたりけり。

然も其到着卽時露都より余に寄せたる長文の書簡は如何に希望と滿足とを滿載したりしぞ。君は途上に於て遞信大臣たるに極りたる後蔗滿鐵に逢ひ、又外務大臣たる可き小村大使の歸朝に遇ひ、更に日本に來任中なりしマレウキツチ大使に邂逅し、相見て相論談し、極東の形勢と日露の變化と皆君の頭腦中に歷々たるものゝ如く、居然たる布衣の一遣露大使を以て自ら期するの色を現したり。其樂みたる如何なりしぞや。余も亦實に君のために樂めりき。本野駐露大使の歸朝に際

を憂ふ。聰明を竭し、智力を盡して焦然として肌色虧耗し、昏然として五情爽惑す。是に於て萬機を放ち、退いて而して大庭の館に閒居し、心を齋し形を服し、三月政事を親らせず。晝寢て而して夢に、華胥氏の國に遊ぶ。其の國師長なく、自然のみ。其の民嗜欲なく自然のみ。生を樂むを知らず、死を惡むを知らず、故に夭殤なし。己を親むを知らず、物を疎んずるを知らず、故に愛憎なし。空に乘ること實を履むが如く、虛に寢ぬること、牀に處るが如し。雲霧其の視を礙へず、雷霆其の聽を亂さず、神行するのみ。黃帝既に寤めて怡然として自得して曰く、今至道の情を以て求むべからざるを知ると。又二十有八年にして天下大に治まる幾んど華胥の國の若し」

靴を隔てゝ痒きを搔く

事を行つて、十分に本意を達することの出來ぬをいふ

『無門關』の序に、「棒を掉ひて月を打ち、靴を隔てゝ痒きを搔く、なにの交渉かあらん」

愚者も千慮に一得あり

愚者の考も稀れには中ること

し、談ずるに君の事を以てしたるに、大使の英國がサア・ウヲレス・マクケンジイの如き露國通の新聞記者を有するを羨むの語を發す。余は實に對へて曰へりき、吾長谷川君もいかでかサア・ウヲレスたらざる可きと。然るに今や吾サア・ウヲレスは逝けり。而して余は君の船中の訃音を抱き、君の母君と細君とに最後の絶望を告ぐるを以て君に對する最後の友誼と爲さゞるを得ざるに至れり。余の涙は紙上に墜つ。杳々たるものは魂魄、長谷川君知る乎知らざる乎。君を紹介したる久松大尉は日露戰役に從ひて旅順に戰死し、君は新聞通信員として職に死す。命なるかな。

【評】一代の文豪長谷川二葉亭主人が、病の爲めに露都より歸航中、明治四十二年五月十日午後五時十五分、インドのベルガン灣（北緯六度三分、東經九十二度三四分）に於いて溘焉長逝されたことは、今にしてだに胸の塞がる思ひがする。其の飛報が同十五日の諸新聞紙上に現はれた時は、われらは愕然として心の戰くを禁じ得なかつたものである。この一文は實に其の日、三山居士の名を以て『東京朝日新聞』に載せられたものである。（三山居士とは同紙主筆池邊吉太郎氏の別號である。）

池邊氏の文章は當時の新聞界に在つて、最も流暢平明、自在に委曲を盡すを以て名が高かつた。この文のごとき、其の前半に於いては、唯だ事を記するに止まつて何の奇とすべきものもないが、中頃より以下に及んでは、乃ち二葉亭主人の心事を說き、其の本領を自ら誤認したる一世の丈夫が、甘んじて悲劇の主人公となり了りたる痛恨を悼んで涙の滂沱たるものがある。文辭莊重、而して無量の感慨を藏す。所謂底光りのする文章とは蓋し此くのごときものであらう。

鐘聲（落合直文）

西の都のある寺に詣でしに、小法師の、ころもの袖をうしろのかたに結びかけて鐘つき居たるを見たり。それよりはいづこの鐘きゝてもそのさまの思ひいださ

とのあるを云ふ。『史記』の淮陰侯傳に、「廣武君曰く、臣聞く智者も千慮に必ず一失あり、愚者も千慮に必ず一得あり。故に曰く、狂夫の言も聖人は擇ぶ」

柳は綠花は紅　天地自然の面目をいふ。蘇東坡の詩句に――柳綠花紅眞面目。

樣に依りて葫蘆を畫く

葫蘆はゆふがほである。たゞ其の樣に依つて葫蘆を畫き、何も自身で發明する所のないのをいふ。即ち人の所爲に倣つて、少しも新意を出だす所のないのを嘲つていふのである。

れて、ひとしほあはれをおぼゆることゝなりぬ。その後、東の都のある寺にて、しるし半纏といふものを着たる下衆男の、脛もあらはなるが撞き居たるを見たり、それよりはまたいづこの鐘きゝても、そのさまの思ひ出されて更にあはれもおぼえずなりぬ。ひとしく無常を告ぐる鐘の聲なり。されど西の都の鐘の響ならではわが涙は出づべくもあらずとなむ。

【評】『萩の家遺稿』の中より拔く。落合直文氏が新派和歌の礎を据ゑたことは、明治の文學史上に最も明らかな功績として、何人も知つてゐる。併し氏が、文章道の亂れに亂れた當年の文壇に在つて、極めて正格な文體に依つてこれが統一を計つたことは或は知らぬ者も多いであらう。氏の事業は、此の文を見ても分る通り、所謂國文の美を土臺として、其處に文章の精華を見ようとしたのであるから、時代の大勢たる口語體の文章に壓倒されて、歌壇のやうに、遂に大に花咲くの日は來なかつたが、しかも其の人の文章を見ると、いかにそれまで書き流されてゐたやうな概念的なものと異なつてゐたか

羊頭を懸けて狗肉を賣る

看板に善いものを示して、惡い物を賣るに喩ふ。『無關門』に出てゐる言葉である。

病膏肓に入る　心は上に、鬲は下に在る。其の鬲上に薄膜のあるのを肓といふ。心下に微脂のあるのを膏といふ。此處は至虛の地であるから針藥が及ばない。從つて病の之れに入つたものは到底治すことが出來ないのである。

復た吳下の阿蒙にあらず

人の學識が大に進んで、復た昔日のやうでないのをいふ。『吳志』に、「孫權、呂が分る。玆に引いた一文のごとき、何でもないものゝやうであるが、我々が前半を讀むうちは、ころもの袖をうしろのかたに結びかけて鐘つく小法師の姿がありと〳〵目に見えるし、更に讀んで後半に至ると、しるし半纏を着て脛もあらはな下衆男の鐘をついてゐるさまがありゝと浮んで來る。すなほで柔かで、しかも微かに弱い響がこもり乍ら、胸にしみるやうな所さへ備へてゐる。老手といふのはかういふ文であらう。

溝渠の水（北原白秋）

私の鄕里柳河は水鄕である。さうして靜かな廢市の一つである。自然の風物は如何にも南國的であるが、既に柳河の街を貫通する數知れぬ溝渠のにほひには日に日に廢れてゆく舊い封建時代の白壁が今なほ懷かしい影を映す。肥後路より、或は久留米路より、或は佐賀より筑後川の流を越えて、わが街に入り來る旅びとはその周圍の大平野に分岐して、遠く近く朧銀の光を放つてゐる幾多の人工的河

蒙及び蔣欽に謂つて曰く、卿今塗に當り事を掌る。宜しく學問して以て自ら開益すべしと。蒙始めて學に就く。魯肅蒙に遇ひて言議し蒙が背をうちて曰く、吾謂へらく、大弟たゞ武略あるのみと。今は學識英博、復た吳下の阿蒙にあらずと。蒙曰く、士別れて三日なれば卽ち當に目を刮して相待つべし」

麻姑搔痒　麻姑は仙女である。其の爪は長くして鳥の爪に似てゐる。若しこれに痒い所を搔かせたなら、嘸ぞ愉快を感ずることが多からうと思ふ。葛洪の『神仙王遠傳』に、「麻姑の手の爪は人の爪の如くならず、形皆な鳥の爪に似たり。蔡經心中に私かに言ふ、若し背大に痒き時、此の爪を得て以て背を爬かば當に佳なるべきなり」

雞肋　大して有用でもないが、さりとて亦た棄てるには惜しいものをいふ。『後漢書』の楊修傳に、「夫れ雞肋はこれを食へば則ち得る所なく、これを棄つるは則ち惜しむべきが如し」

形容枯槁　かたち、容子の痩せ衰へたことである。屈

水を眼にするであらう。さうして歩むにつれて、その水面の隨所に、菱の葉、蓮、眞菰、河骨、或は赤褐黃綠その他樣々の浮藻の强烈な更紗模樣のなかに微かに淡紫のウオタアヒヤシンスの花を見出すであらう。水は淸らかに流れて廢市に入り、廢れはてたNoskai屋（遊女屋）の人もなき厨の下に流れ、洗濯女の白い晒布に注ぎ、水門に堰かれては、三味線の音の緩む晝すぎを小料理屋の黑いダリヤの花に歎き、酒造る水となり、汲水場に立つ湯上りの素肌しなやかな肺病娘の唇を嗽ぎ、氣の弱い鷺の毛に擾され、さうして夜は觀音講のなつかしい提燈の灯をちらつかせながら、樋を隔てゝ海近き沖の端の鹹川に落ちて行く、靜かな幾多の溝渠はかうして昔のまゝの白壁に寂しく光り、たま〳〵芝居見の水路となり、蛇を走らせ、變化多き少年の祕密を育む。水鄕柳河はさながら水に浮いた灰色の柩である。

【評】抒情小曲集『おもひで』の卷頭に添へた『わが生ひたち』の中の一節である。鄕里柳河の水鄕である所以を說いて、其の溝渠の水に依つて廢頽の氣分を描き出してゐる。觀る人に依つてはもとより何でもない水である。其の水が鋭い感覺を持つた詩人の目に映ると、かうした氣分を持つて胸に觸れて來るのである。水ならばいさゝ小川、風ならばそよ吹く風、火ならば木の間を漏れる燈のやうな、さうした柔らかな感じを持つた文である。全體に渉つて底に潛んでゐる哀傷は、詩人の無意識の中に鄕里の廢滅を歎く無言の叫でなければならぬ。

雁がね（樋口一葉）

朝月夜のかげ空に殘りて、見し夢の餘波もまだ現なきやうなるに雨戸あけさして打ながむれば、さと吹く風竹の葉の露を拂ひて、そゞろ寒けく身にしみ渡る折しも、落ちくるやうに雁がねの聞えたる、孤つなるは猶更、連ねし姿もあはれなり。思ふ人を遠き外などにやりて明けくれ便りの待ちわたらるる頃、これを聞きたらば如何なる思ひやすらんと哀れなり。朝霧ゆふ霧のまぎれに聲のみ洩らして

原の漁父の辭に、「顏色憔悴、形容枯槁」

兄たり難く弟たり難し　優劣を分ち難いことである。陳寔の言葉で『世說』に出てゐる。

形影相弔す　自分の形と影とが互にあはれみ、とぶらふことで、孤立して淋しいさまをいふ。李密の『陳情表』に、「煢々獨立、形影相弔す」

閨秀　賢婦のことである。『晉書』に、「王夫人は神情散朗、故に林下の風氣あり。顧家の婦は淸新玉映、おのづから是れ閨房の秀」

過ぎゆくもをかしく、更けたる枕に鐘の音きこえて、月すむ田面に落つらんかげ思ひやるも哀れ深しや。旅寢の床、佗人の住家、いづれに聞きても物おもひ添ふる種なるべし。一とせ下谷のほとりに假初の家居して、商人といふ名も恥かしき唯いさゝかの物とり並べて朝夕のたづきと爲せし頃、軒端の庇あれたれども月さすたよりとなるにはあらで、向ひの家の二階のはづれを僅かにもれ出る影したたはしく、大路に立ちて心ぼそく打あふぐに、秋風たかく吹きて空にはいさゝかの雲もなし。あはれ、斯る夜よ、歌よむ友のたれかれ集ひて、靜かに浮世の外の物がたりなど言ひ交はしつるはと、俄かに其のわたり戀しう涙ぐまるゝに、友に別れし雁唯一つ、空に聲して何處にかゆく、さびしとは世のつね、命つれなくさへ思はれぬ。擣衣の音に交りて聞えたる如何ならん、三つ口など囃して小さき子の大路を走れるは、さも淋しき物のをかしく聞ゆるやと、羨ましくなん。

【評】『一葉全集』の中に、『そゞろごと』と題して四篇の小品を收めてあるのがある。これは其の內の一篇であるが、今日にしてこれを讀むも、なほ才

毛を吹いて疵を求む　毛の中までもたづねて、疵を求めるやうに、人の小過をも發いて許さぬことである。『漢書』に、「有司毛を吹いて疵を求む」とある。併し今は、「藪をつゝいて蛇を出だす」といふと同じく、自ら害を招くことに用ゐてゐる。

月旦　月旦は朔日のことであるが、許劭の故事から人物を品評する義に用ゐるやうになつた。『後漢書』の許劭傳に、「初め劭、從兄靖と俱に高名あり。好みて共に鄕黨の人物を覈論し、每月女の俤は十分にこれを偲ぶことが出來る。併し、われらに多少慊らぬと思はれる點は、文章の巧みなるに比して、觀察の常套に墮してゐることである。雁がねに對する感想に於いて殊に其の然るを見る。けれども、作者自身の直接經驗と思はれる個所には、さすがに光ある文字を見ることが出來る。「軒端の庇あれたれども月さすたよりとなるにはあらで、向ひの家の二階のはづれを僅かにもれ出る影したたはしく」にはまだ多少の踏襲が見えるが、「大路に立ちて心ぼそく打あふぐに、秋風たかく吹きて空にはいさゝかの雲もなし」といつた所には十分の眞實があつて、文章にも千鈞の力がある。結末の「三つ口など囃して小さき子の大路を走れるは」のくだりも面白い。うら淋しく哀れげな所は何處までも秋だといふ感じを深く起させずにはゐない。

蟲の音　（永井荷風）

蟲の音が日に增し滋くなつて、枕に就いて眠らうとすると、雨戸を閉めた庭一面

輒ち其の品題を更む。故に汝南の俗に月旦評あり」

桀の狗、堯に吠ゆ　仕へる所の主人に忠義を致すことである。『史記』の淮陰侯傳に、「跖の狗堯に吠ゆ。堯不仁なるにあらず。狗はもとより其の主にあらざるに吠ゆ」

翹楚　衆に卓出した者のことである。『詩經』に、「翹翹たる錯薪あり、こゝに其の楚を刈る」とある。翹翹は高くぬきんでゝゐること楚は荆の屬である。

文人相輕んず　文藝に從事する人は、誰も彼もみづから高くかまへて、互に相手を輕侮する習ひあるをいふ『典論』に、「文人相輕んず、古より然り」

風聲鶴唳　つまらぬ事に驚いて、無暗に怖れることをいふ。『晉書』の謝玄傳に出てゐる。唳は鶴の鳴聲である。

覆水盆に返らず　『拾遺記』に、「太公初め馬氏を娶る。書を讀みて產を事とせず。馬去を求む。太公齊に封ぜらる。馬再び合せんことを求む。太公水一盆を取りて地に傾け、婦をして水を收めしむ。惟だ其の泥を得た

から緣の下まで恐ろしい樣な其の啼き聲。凡そ何萬匹の昆蟲が如何なる力に支配されて、何を感じて、かくも一時に聲をあはせて私の身のまはりに叫ぶのでせう。私は限りもない空の下、雄大なる平原の面に唯つた一人永遠の夜明けを待ちつゝ野宿して居るやうな氣がして、閉した瞼を開いて見ると、今にも落ちて來さうな低い板の天井と、色も飾もない壁と襖とが、机の上の燈火に照らされて薄暗く狹苦しく私の身體を圍つて居るのです。深味のない、限られた日本の生活と云ふ事が、しみ〴〵感じられます。突然天井裏に、ばらッばらッと、破れた琴を彈くやうな雨の雫の落ちる音、夜の樹木に風の吹く響が聞えます。然しこの響は幽谷の獅子の吠えるやうな底深いものではないので、私は熱帶の平原を流れる大河のほとりに、葦の葉の戰ぎを聞くのかと思つた事がありました。蟲は絶えず鳴いて居ます。夜があけても、晝が來ても鳴き續けるのです。蟲ばかりではない雨も毎日々々降りつゞくやうになりました。

【評】　蟲の音についての感想や叙述は古來其の數を知らぬ程に多いが、この文に書かれたやうな感慨を其れに依つて惹き起したものは見たことがなかつた。一體日本人の癖として、花には浮かれ、月には悲しみ、杜鵑は夜を徹しても聽くを喜ぶもの、鴻雁は必ず友を懷ふものといふ風に、自然の景物に對する感想を始めから極めて置いて、どんなことがあつても其れから脫出することを許すまいとする傾きがあつた。それであるから、物に對する感慨は自然と單調になつてあまたかと思はしめることが多かつた。

この意味から云つたならば、一般に近來の文章は、全く在來の因襲に囚はれず、一意作者の心持を其のまゝ忠實に描き出さうとしてゐる點に於いて、餘程眞實なものになつて來たといふことが出來る。荷風氏の此の文章のごときは、殊に其の特色の著しいものである。

落椿（薄田泣菫）

二月末の白晝、墓の如く靜なり。椿花おちぬ。

り。太公曰く、若し能く離れて更に合せんか、覆水定めて收め難し」とあるより出たので、妻が一旦夫の家を去れば、再びかへることの出來ないのをいふ。また一般に、一旦爲し終つたことは取り返しがつかないといふ意味にも用ゐる。

巫山の夢　楚の襄王が、夢に巫山の神女と會つた故事から、男女の密會することをいふ。『文選』の宋玉の『高唐賦』に、「昔、先王、かつて高唐に游び、怠りて而して晝寢ぬ。夢に一婦人を見る。曰く妾は巫山の女にして高唐の客たり。聞く君高唐に游ぶと。願くは枕席を薦めん。王因りてこれを幸す」

不朽の盛事　文章の功は盛んなもので、永久に朽つることのないのを稱へていつたのである。魏の文帝の言葉に、「文章は經國の大業、不朽の盛事。年壽は時あつて過ぎ、榮樂は其の身に止まる。二つのものは必至の常期にして、未だ文章の窮り無きに若かず」

俯仰天地に愧ぢず　能く身を修め、内に省みて疚しい所がなければ、仰いで上天

隣はいさゝかの物賣る家なり、店は客なければか、おくまりたる一室に梭の音す。をり〳〵鸚鵡の叫けたたましう起る。籠の餌壺の乏しきを訴ふるなるべし。家鶏高く歌ひぬ、午後二時なり。旅人ふたり、表通を過ぎゆく。麥の生立にこのほどのあたゝかさを說くなど、ほど遠からぬあたりの人なるべし。

またしても椿花落ちぬ。

花重ければ枝を折らず、土に墮ちて根を去らず。上なるは花びら艶やかなり、光榮は枝にあり。下なるは蕚に錆を帶びぬ、休息は根にあり。——

椿こぼれぬ、さながら崩るゝに似たり。

あゝ花落つるなり、さすがに心痛まざらむや。

【評】『白玉姫』の中に收められてある『をり〳〵の記』の内の一つである。墓の樣に靜かな眞晝に、椿の花がぽたりと音して落ちる有樣が目に浮ぶやうである。そして木の下には其の幾つかの花が相重なつて、崩れてゐることも

想像される。周圍の物音や、表通りを話し乍ら過ぎて行く旅人など、すべて其の靜かさを破る雜音でない物音を叙してあるのはかの「一鳥啼いて山更らに幽なり」と同一の筆法で、簡單な椿の落ちるといふ光景を複雜にすると同時に、其の印象を一層際立たせる役に立つてゐる。

湯槽の中（夏目漱石）

余は湯槽のふちに仰向の頭を支へて、透き徹る湯のなかの輕き身體を、出來る丈抵抗力なきあたりへ漂はして見た。ふわり、ふわりと魂がくらげの樣に浮いて居る。世の中もこんな氣になれば樂なものだ。分別の錠前を開けて、執着の栓張をはづす。どうともせよと、溫泉の中で、溫泉と同化して仕舞ふ。流れるもの程生きるに苦は入らぬ。流れるものゝなかに、魂迄流して居れば、基督の御弟子となつたより難有い。成程此調子で考へると、土左衛門は風流である。スキンバーンの何とか云ふ詩に、女が水の底で往生して嬉しがつて居る感じを書いてあつた

に對しても、俯して下地に對しても、毫も愧づることのないのをいふ。『孟子』に出てゐる言葉である。

婦人の仁　施すにも足らぬ小惠のこと。『史記』の淮陰侯傳に、「韓信曰く、項王人を見るとき、恭敬慈愛にして言語嘔嘔たり。人疾病あるときは涕泣して食飲を分つ。人の功ありて當に封爵すべき者に至りては印刓弊すれども忍んで予ふる能はず。これ所謂婦人の仁なり」

盡く書を信ぜば書なきに如かず　事を記する辭は、或は重くなり、或は輕くなつて、其の實にたがふものである。だから辭のみに拘泥して其の意義を推究しなければ、却つて其の義を害することがある。書なきに如かざる所以である。『孟子』に出てゐる言葉である。

五里霧中に迷ふ　深い霧の中にあつて方角の分らぬやうに、心の迷ひて向ふ所を知らないこと。『後漢書』に「張楷字は公超、性道術を好み、よく五里の霧をなす」

巧遲は拙速に如かず　巧みにしようと思つてぐづぐづしてゐるものは、拙くとも速に決行するに如かぬと思ふ。

余が平生から苦にして居た、ミレーのオフエリヤも、かう觀察すると大分美しくなる。何であんな不愉快な所を擇んだものかと今迄不審に思つて居たが、あれは矢張り畫になるのだ。水に浮んだまゝ、或は水に沈んだ儘、或は沈んだり浮んだりした儘、只其儘で苦なしに流れる有樣は美的に相違ない。夫で兩岸に色々な草花をあしらつて、水の色と流れて行く人の顏の色と、衣服の色に、落ちついて調和をとつたなら、屹度畫になるに相違ない。然し流れて行く人の表情が、丸で平和では殆んど神話か比喩になつてしまふ。痙攣的な苦悶は固より、全幅の精神をうち壞はすが、全然色氣のない平氣な顏では人情が寫らない。どんな顏をかいたら成功するだらう。ミレーのオフエリヤは成功かも知れないが、彼の精神は余と同じ所に存するか疑はしい。ミレーはミレー、余は余であるから、余は余の興味を以て、一つ風流な土左衞門をかいて見たい。然し思ふ樣な顏はさう容易く心に浮んで來さうもない。

湯のなかに浮いた儘、今度は土左衞門の贊を作つて見る。

雨が降つたら濡れるだろ。
霜が下りたら冷たかろ。
土のしたでは暗からう。
浮かば波の上、
沈まば波の底、
春の水なら苦はなかろ。

と口のうちで小聲に誦しつゝ漫然と浮いて居ると、何所かで彈く三味線の音が聞える。美術家だのにと言はれると恐縮するが、實の所、余が此樂器に於ける智識は頗る怪しいもので、二が上がらうが、三が下がらうが、耳には餘り影響を受けた例しがない。しかし、靜かな春の夜に、雨さへ興を添へる山里の湯槽の中で、

魂迄春の溫泉に浮かしながら、遠くに三味を無責任に聞くのは甚だ嬉しい。

遠いから何を唄つて、何を彈いて居るか無論わからない。そこに何だか趣がある。音色の落ち付いて居る所から察すると、上方の檢校さんの地唄にでも聽かれさう

いふこと。『孫子』に、「兵は拙速を聞く、未だ巧の久しきを覩ざるなり」

後生畏るべし　後生は少年のことである。少年は春秋にも富み力も強い。これから先きに學問を積んで何になるか知れない。其の勢ひは畏るべきである。『論語』の子罕篇に、「後生畏るべし。焉んぞ來者の今に如かざるを知らんや」とある。又、李白の詩に――尼父猶能畏後生。丈夫未可輕年少。後世と書くは謬りである。

五十歩百歩　甚しい差のないこと。『孟子』の梁の惠王に對へる言葉に、「王、戰を好む、請ふ戰を喩へん。塡然としてこれを鼓うち、兵刃既に接せり、甲を棄て兵を曳いて而して走る。或は百歩にして而して後に止まり、或は五十歩にして而して後に止まる。五十歩を以て百歩を笑はゞ則はち如何と。曰く不可なり。直ちに百歩ならざるのみ。是れ亦た走るなり」

古人の糟粕　糟粕は酒の滓滓である。聖人の道の精醇な所は言語に述べてこれを人に傳へることは出來ない。今傳はつてゐるものは、其な太棹かとも思ふ。

【評】『草枕』の一節。主人公の畫家が湯槽の中で空想に耽つてゐる所である。漱石氏の文章は、いつ讀んで見ても面白いが、ともすれば警句に強ひて才を走らせたやうな所が目に着いて來るやうなことがある。此の文などにもいくらかさういふ所がある。併し、世の中を離れきつて、少しも土臭くないやうな境に在つて空想を縱にしてゐる所などは、いかにも羨ましい氣がされるではないか。しかも其の空想には學問もあれば理趣もあるに於てをやである。

書翰文

禁煙（二葉亭主人）

どうも非常に御無沙汰した。實はこツちへ着いて四五日して下宿へ引移つた其の晩からだ。所謂ベーラヤ・ノーチ（白夜）といふやつで、夜十一時ごろ薄暗くなつて、一時二時ごろには、もうかツと明るくなる。それがヒドク神經に觸つた氣味で、引移つた晩からトンと眠られない。眠られないといつたら强情に眠られない。據どころなく、葡萄酒、コニヤク或ひはウオツカを引掛けて、其の勢ひでグツと寢込むが、二時間程して醉が醒めると同時に眼も覺めてそれからはどうしても眠られん。酒を飲んでもどうしても眠られん。さうして三四日たつと一晩グツ

の糟粕であるから下らないといふのである。『莊子』の天道篇に、「桓公書を堂上に讀む。輪扁、輪を堂下に斲る。椎鑿を釋て〻上り、桓公に問ひて曰く、敢て問ふ、公の讀む所は何の言なるか公曰く、聖人の言なり。曰く、聖人在るか。公曰く、已に死せり。曰く、然らば則ち君の讀む所のものは古人の糟粕のみ」

孤城落日　一つの孤立した城が、夕日のまさに沈まんとするあたりにある義。極めて心細きさまをいふ。王維の詩――欲逐將軍取右賢。沙場走馬向居延。遙知漢使蕭關外。愁見孤城落日邊。

燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや　小人にどうして英雄の心が分るものか、といふ意味である。『史記』の陳涉世家に、「陳涉わかき時、嘗て人と傭耕す。耕を輟めて壟上に之き、悵恨することこれを久しうして曰く、苟も富貴ならば相忘るゝことなけんと。傭者笑つて應へて曰く、なんぢ傭耕をなす。何ぞ富貴ならんやと。陳涉太息して曰く、あゝ燕雀安んぞ鴻鵠の志を知スリ寢る。その翌晩から、また眠られんで、三四日してまた熱睡が出來る。まあ早い話がウツ、責だ。それだもんだから始終ボンヤリしてゐて、今聞いたことをスグ忘れる。到底も通信文を書くどころでない。新聞を讀んで電報を打つのがヤツとの事だ。大使館の先生達も心配して歸れといふ。內々醫者に見て貰つたら、矢張歸れといふ。糞ツ一萬露里も踏出して來て、不眠症に罹つたからツて、オメ〳〵と歸れるものかと力んでみても病氣には勝たれない。身體は益々衰弱するばかりだ。ネフスキー通りで卒倒しかけた事四五度に及んだ。もう仕方がない、辭職して歸らうかと思つたが、如何にも殘念だから、一生懸命に養生した。君も知つてる通り僕は煙草が大好きだ。一日も此の君なかる可からずといふ切ツても切れぬ仲だ。八ツの時から親しんで足掛三十六年の間片時傍を放さなかつた煙草だが命にはかへられない。皆に勸められて、思ひ切つてヤメタ。煙草といふヤツはおそろしいものだ。さうしたら流石頑固の不眠症も日增しによくなつてね、今ではあべこべに長眠病に罹つたのぢやないかと疑ふ位だ。氣を許してゐると十二時間位はぶツ通してグツスリ寢る。不思議な位だが之が爲元氣を恢復して、もう大丈夫、通信文も書けるやうになつたから、今年の正月は僕に取つては目出度い正月だ。喜んでくれ玉へ。（後略）

【評】　明治四十二年七月九日から十二日まで四日間、『東京朝日』に澁川玄耳氏の『二葉亭の舊居』（露都に於ける）と題する記事が載つた。而して、これは其の十日の分に引用された故人の書簡である。一月四日附で、同二十五日の『北滿洲』紙上に載つたものだといふ。何の屈託もなくさら〳〵と書き下してあるが、いかにもよく其の狀況を髣髴させてゐる。「まあ早い話がウツ、責だ……」云々とある所、凡そ神經衰弱に罹つたものは、よしんば重いと輕いとの差こそあれ、誰でも皆な經驗のある所であらう。隨分と苦しいものである。而して「糞ツ一萬露里も踏出して來て……」と讀んで來ると、二葉亭をして印度洋上に長逝せしめたのは、恐らくは此の利かぬ氣ではなかつたかといふことを思はずには居られない。足掛三十八年の間、片時も傍を放さなか

らんや」

鐵中の錚錚　鐵の少しく剛利なるもので、凡庸の中で勝れたるに喩ふ。『後漢書』の劉盆子傳に、「光武帝、徐宣に謂つて曰く、卿は所謂鐵中の錚錚、庸中の佼々たるものなり」

天衣無縫　天上の織女の著てゐる衣には縫ひ目がない以て文章詩歌などの圓熟して斧鑿の痕のないのを評するにいふ。

椽大の筆　大手筆といふに同じ。文章の立派なことである。『晉書』の王詢傳に、「王詢孝武の時、左僕射となつたといふ煙草までも禁じて、今年の正月は目出度い正月だと喜んだ甲斐もなく、この時より僅か百二十餘日を隔つた五月十日にはもはや再び歸らぬ人となつてゐた。噫！　思へば果敢ない人の世だ。

萬金も青春を買ふ能はず（竹越三叉）

拜啓。過日は御來訪被下候處、何の風情もなく失敬致候。拜尊書愈〻實業と御決着の由、先づ〳〵御祝賀申上候。乍併實業にも種々あり、政府以外の職を奉ずれば、何でも實業なりと思ふが如きは、一種の迷妄に御座候。實業とは天地自然の勢力と戰ひ、之を征服して、人間の奴隷たらしむるの謂に不外、然るに近來學校を出でゝ銀行に入り、月給を受け帳面を持てば最早實業と思ふ輩不尠、以ての外の次第に候。單に金錢の勘定をするのみが實業ならば大藏省の官吏は皆實業家と云はざるべからず。不倫も亦甚しと可申候。

兎角此の實業には、獨立開拓の事不可相忘候。而して之に就ては、一種專門の職業的修養を要し候へば、實業に御決着の上は、此等の修業一刻も御怠り無き樣願上候。就ては過日も申上げし如く、化學工藝の時代は尙ほ早し、電氣工藝など可然か。

青春は何より貴重なる寶物に候。萬金は得べきも、萬金も青春を買ふ能はず、何卒一意專心、御勉勵奉切望候。

【評】　これは竹越三叉氏が實業に志す少年に與へた書翰で、其の著『三叉書翰』の中に收められてあるものである。氏の書翰は一面によく理趣を說きながら、しかも一面に情味の溢るゝがごときものあるを其の特色とする。

尤も、茲に揭げた一文が特に其の特色を儼かに發揮したものであるといふ譯ではない。否、どちらかと云へば、此の一文のごときは寧ろ情味に乏しいものといふべきであらうが、しかも見給へ、極めて無造作に筆を着けて、氣輕に讀み行かせながら、暗默の間に自家の言はんとする所を遺憾なく領かせるだけの力を持つてゐることを。此の文の價値は實に此處に在る。

夢に人大筆椽の如きを以て之れに與ふ。既に覺めて人に語りて曰く、此れ當に大手筆の事あるべしと。

俄にして帝崩ず。哀册諡議、皆詢が草する所なり。

天網恢恢疎にして漏らさず　天の網は廣大で其の目はあらいけれども、而かも一人の漏るゝものもなく、善には必ず善報、惡には必ず惡報があるといふのである。『老子』にある言葉である。

朝三暮四　人を愚弄することをいふ。『列子』の黃帝篇に、「狙公、狙の食を限らん

として、先づこれを誑いて曰く、なんぢに茅を與へん、朝三にして暮四にせば足らんか。衆狙皆起ちて怒る。俄にして曰く、なんぢに茅を與へん、朝四にして暮三にせば足らんか。衆狙皆な伏して喜ぶ」

中らずと雖も遠からず

誠心から求めれば、目的に正中しないまでも、大きな間違ひはないといふのである。『大學』に、「心誠にこれを求むれば、中らずと雖も遠からず。未だ子を養ふことを學んで而して後に嫁ぐ者はあらざるなり」

勿論、この書翰の書かれた明治三十三四年の頃は知らず、現時に在つてはまさか政治以外に職を奉ずればとて何でも實業であるとまでに思ふものは多くはなからうが、併し實業のみに限らず、あらゆる職業の眞の意義を解せざるが爲めに、空しく小成に安んじてゐる人々は決して少くないとは言へると思ふ。それを思へば、氏の此の教訓は、志ある少年や青年に取つては、今日に於いてもなほ十分に服膺せなければならぬものである。

更に末段、「青春は何よりも貴重なる寶物に候。萬金は得べきも、萬金も青春を買ふ能はず。」の一節の如き、別に新らしい發見ではないが、しかも其の直截にして巧妙なる表現は、よく其の盛れる思想を活かして、一度び誦し去り誦し來ると共に、胸に油然として一味の感慨の起るのを禁じ得ざらしめるものがある。

暗中模索　くらやみで探り もとめること。『國史纂異』に、「唐の許敬宗、性輕忽なり。人を見るも多く之れを忘る。或る人これをそしりしかば、曰く、常人の名の聞えざる者は記憶し難し。若し曹植、劉公幹、沈約、謝靈運に遇はゞ、暗中模索するも、亦識るべし」

藍より出でゝ藍より青し　青色は藍より出でながら藍よりもすぐれて青い。以て弟子の師にすぐるに喩へたのである。「出藍」の熟字は即ち此れから出て來た。

惡事千里に傳はる　人の善

世の中は沙漠に等しい　（高山樗牛）

先達ての君の開書は來月五日の分に全文を掲げることにした。

此地は今猶、梅雨朝同然の天候で、毎日鬱陶しくて大に困つてゐる。憶へば此春の頃から氣候は押なべて大不順で、雨天曇天の多かつたことは僕の記憶中に比較のない年だ。

僕等の如き病人には實に困る。其の爲めに病氣も昨今は宜しくない。安眠を得ぬことが最早二ケ月以上も續く。あゝ一夜、小兒の如く眠れたらばと、半夜子供の規則正しき寢息を窺ひながら思はぬ夜とてはない。

送つて呉れた草花の種は毎日生長して樂しみにしてゐると、土井に傳へて呉れ。人は脆いものでどんな事でもしてまぎれて暮らせるものだ……

いろ〳〵書きたい事が澤山あるが、心緒亂れて絲の如く、迚も今日は書けぬ。東京の友からもトント消息がない。最早此身は人々に忘れられたのではあるまい

は掩ひかくし、人の惡は探りあばくのが世俗の情である。故に善い事はさう傳はらないが、惡事は忽ち世間に廣く傳はるといふのである。『事文類聚』に出てゐる言葉である。

去る者は日に以て疎し
死者にはだん〳〵疎くなるをいふ。『文選』の古詩に、「去る者は日に以て疎し、來る者は日に以て親む」

山雨來らんと欲して風樓に滿つ　山家で雨降らんとする前に、風が二階に一ばいになるやうに、事の發せんとする前に先づ其の徵候の大にあらはれること。唐の許渾の詩――一上高樓萬里愁。蒹葭楊柳似汀洲。溪雲初起日沈閣。山雨欲來風滿樓。鳥下綠葉秦苑夕。蟬鳴黃葉漢宮秋。行人莫問當年事。故國東來渭水流。

滄桑の變　滄海變じて桑田となる――時勢の變遷に喩へたのである。『神仙傳』に「麻姑王方平に謂つて曰く、接待より以來、東海の三度變じて桑田となるを見る。向きに蓬萊に到る。水乃ち往者より淺き事ほゞ半ばなり。豈に復た陵陸とならんや。方平乃ち曰く、東海行くか。

嗚呼吾友よ、君さへ忘れて呉れなければ僕は少しも寂寞を感じない。途で時儀する人が幾萬あつても世の中は沙漠に等しい。自愛せよ、不盡々々……

【評】　明治三十五年七月二十七日、鎌倉に轉地してゐた高山樗牛がロンドンにゐた姉崎嘲風氏の許へ遣つた書翰である。何處と取り出でゝすぐれた文句があるといふのではないが、讀み了つた時に一種の言ふに言はれぬ友情の胸に迫つて來るのを覺える。讀んで「嗚呼吾友よ、君さへ忘れて呉れなければ僕は少しも寂寞を感じない」といふ一節に至つた時に、誰か氏等兩人の間に存した親友の情誼を床しとせぬものがあらう。

汽車の中より（大町桂月）

櫟本の道樂會諸氏に招かれて、一酒樓に飲みけるが汽車の時刻せまりければ、中座致し候ひしに、麥酒半ダースと折詰とを贈られ、櫟本驛まで送り來れる人々と酒を分ちて、二瓶だけは明け申候。なほ四瓶だけは殘り居り候。可なりの荷物も有之候へば、何とかして汽車の中にて、諸氏の好意を飲みつくしたしと、ひそかに苦心仕候。

奈良驛にて乘換へを待つ間に、誰かに分たむと思へど、小生の外には、待ちあはす人も無し。新聞賣りが參り候ひしかば、呼びとめて、一つ新聞を買ひ、麥酒を呑まぬかと勸め候ひしに、全くの下戸なりとて、遁げゆき申候。驛夫を呼びとめて、いろ〳〵話しかけ、麥酒はと勸め候ひしに、執務中は一滴も飲まずといふ。成る程、御尤もと感服して、四瓶だけ汽車の中に持ち込み申候。

向側に坐れる一老人、なれ〳〵しく話しかく。酒のみさうな顏付なれば、一瓶の口を切り、洋盃とり出して先づ一杯を飲み、いかゞとて、献じ申候處、手を横にふつて、麥酒はまつぴら〳〵とて、皮囊の中より日本酒の四合瓶を取り出し三四杯ぐいと快飲致候。側にある人にすゝめたれど、いづれもみな下戸なりと

ゆく復た麾を揚げんのみ」

糟糠の妻　困窮した時から艱難を共にした妻をいふ。糟はかす、糠はぬか、さういふ粗食までして貧苦を同じくした義である。『後漢書』の宋弘傳に、「貧賤の交りは忘るべからず、糟糠の妻は室より下らず」

草莽の臣　仕官せずに野にゐる者をいふ。『孟子』に、「國に在つては市井の臣といひ、野に在つては草莽の臣といふ。皆庶人を謂ふ」

社稷　國といふは國都のことである。

取り越し苦勞をいふ。いふに止むを得ず、一瓶だけは、一人で飲み干し申候。

日本酒を飲みたる老人、小生に向ひて、貴方は教育に關係のある人にあらずやといふ。中らずと雖も、遠からず。まア、そんな者なりと申候へば、誰を知つて居るか、かれを知つて居るかなど問ふ。知つて居る人も有れば、知らぬ人も有之、まことに、さつぱりしたる人にて、名古屋在の百姓なるが、今は名古屋の方に住めりといふ。百姓といふとも、自ら鍬をもちたる人とは見えず、可なりの地主にて、今は一方に商賣を營める人かと想像せらる。長男は、學問の出來もよからざる故、小學校だけにて、やめさせて、今は家にて實務に當らせ居るなりといふ。又語をついで、次男は、學問の出來もよし、本人も進んで大に學ばむことを希望す。やらせるがよきか、惡きか、如何なものにやと問ふ。これは老人に取りても、次男なる人に取りても重大なる問題也。うつかりした事は云へず、子を持つて知る親の恩といふ詞が有之候ふが、小生のやうな愚物は、子を持つても、まだ親の恩はわからず候へども、既に長男も次男も中學校に通ふやうになり居候へば、人の親たる者は、其子の教育に就きて如何ばかりか心配するものなるかは、分り申候。

謹んで答へて申さく、おやらせに成りては、如何に候ふや。

父兄が子弟に對する同情は、子弟が馬鹿なればとて棄ては致さず、馬鹿なら馬鹿なりに安らかに一生を送つてくれよ、どうぞ一家を繁昌させよ、食ひはぐれとなつて、世にまごつくなと祈る。これ人間自然の情に候。高等の教育をうけたからとて金儲けが上手になると申すものにはあらず。その中よりは、大臣も出で大學者も出で申すべけれども、食ひはぐれの落武者も出で申候。學問して、却つて馬鹿になる人も少なからず候。この點は、豫め御用心あれ。

然れども、一國の上より申さば、人材が多く出れば出る程、結構なる事に候。父兄たるものも、國家有用の材をつくらむと心掛け、子弟たるものも國家有用の材とならむと心掛けてこそ、人材は出づるものに候らへ、人物になるよりも金持ちになれ、國家の材となるよりも、小さくなりて、細く長く暮らせと、父兄が

『列子』に、「杞國に人の天の崩れ墜ちて、身の寄する所なきを憂ひ、寢食を廢する者あり」とある。又、「杞人の憂」ともいふ。

既往は咎めず　過去のことはあとから咎めない。ただ將來を謹むべきをいふ。『論語』にある言葉である。

彊弩の末勢魯縞を穿つ能はず　彊弩は強いいしゆみ。魯縞は魯國の布で至つて薄いものである。即ち至つて強いものも、其の勢が衰へるやうになつては、何事をもすることの出來ないといふ喩である。

胸中成竹あり　豫め先づ考案を定めること。蘇東波の『畫竹記』に、「竹を畫く者は先づ成竹を胸中に得」

玉山將に頽れんとす　醉ひて倒れんとするをいふ。玉山は人品の皓潔なるに喩ふ。『晉書』に、「叔夜人となり嶮々として孤松の獨立するがごとし。其の醉へるや玉山の將に頽れんとするが如し」

驥足を展ぶ　驥は千里の馬である。豪傑の士がその才能を伸し得るに喩ふ。『蜀志』に、「龐士元は百里の才にあらざるなり。治中利駕の任に處らしめば、始めて當に其の驥足を展ぶべきのみ」とある。百里の才は縣令である。

笈を負ふ　笈は本箱である。それを負ひて途に上るは即ち遊學の義である。『史記』の蘇秦傳に、「笈を負ひ師に從ひ千里を遠しとせず」

九牛の一毛　極めて多數の中の少部分といふことで、もとは、取るにも足らぬ人物といふ意に用ゐたのである。『漢書』の司馬遷の傳に「たとひ僕法に伏して誅を受くるも、九牛の一毛を亡ふが如し」

引込思案になり、子弟もその氣になり、一にも金、二にも金、己れあるを知つて社會あるを知らず、一家あるを知つて國あるを知らず、家にありては、不孝不悌の人となり、出でゝは墮落生となり、品性の無き紳士となり、恥を知らざる公人となり、社會腐敗し、國家に活氣なくなり候も、つまりは國民の志の小なるより出づる次第に候。

聲自づから高まりて、一車中の視線を集め候ひしが、餘り長談義は無用と、これくらゐの處にて、切り上げ申候。知らず、小生の言、いかゞおぼされ候や。

【評】『桂月書翰』に收められてある一文で、白河鯉洋に寄せたものだとのことである。けれども、この文のごときは受信者が何人であつても、特にそれが爲めに文意の上に變易を生ずるやうな書翰ではない。寧ろ書翰として書かれたる一種の叙事文、紀行文と看做すべきであらう。

贈られたるビールを實は持て餘して、何とぞしてこれを飲み盡して諸氏の好意に酬いんとする所、新聞賣や驛夫を呼びとめて、これにビールはと勸めその飲まずといふを聞いて感服する所、向側に坐れる老人に先づ一杯と献ずる所、仔細に讀み來れば、桂月氏の人格が遺憾なく偲ばれる。殊に其の老人がビールは眞平なりとて皮囊の中より日本酒を取り出してぐい〳〵快飲するに至つては、桂月氏の當ての外れた顏が見えるやうだ。凡そ人間の目論見といふものはかういふ風に儚く倒れて了ふものである。

しかも、それから話がはずんで、子弟教育論に移つて行くあたり、自然は面白く發展して行くものだといふ感が深い。橘南谿の『東西遊記』に書かれてある旅中遭逢談など、蓋し類を同じうして興味のある事實である。

南洋の島懷しく（齋藤野の人）

御別れ申候てより、絶て御無沙汰申上げ、御申譯も無之候。昨秋は松井樣の御手を經て、美事なる御果物頂戴いたし、有りがたく候ひし、先日も病氣の御見舞狀下され、重々忝なき御厚意と存じ、厚く御禮申上候。今日も『心の華』にて孤

牛耳を執る　主盟者のこと。鄭玄曰く、「主盟者牛耳を割きて衆を取る。耳は盛るに珠盤を以てし、主盟者これを執る」

九仞の功を一簣に虧く　八尺を仞といふ。簣は土籠である。九仞の山を築くに最後の一簣の土を虧けば完成することが出來ない。積年の勞も一失の爲めに敗れるものであるといふのである。『書經』に出てゐる言葉である。

騎虎の勢下ることを得ず　虎に騎つて阪路を下る時は其の勢ひ極めて急であるから、中途で虎から下ることは出來ない。一旦事に從はゞ中止してはいけない。中止するときはかへつて害を受けるといふのである。『隋書』に出てゐる言葉である。

驥尾に附く　蒼蠅の千里の馬の尾について、遠きに達するやうに、後進の人が先輩の士に從つて名を成すをいふ。『史記』の伯夷傳にある。

逝く者はかくの如きかな、晝夜を舍てず　孟子の云つた言葉である。水は、晝夜の別もなく、一息の間斷もなく、始終先きへ先きへと

島の御消息を拜見、讀むからに心持よくこれが日本の國の島かとなつかしく、げにげに鳥も通はぬ八丈島の外、レモン花さく御地したはしく憧れ申候。私も病は昨今漸く快く平生の通りに致し候も、病後の疲れもまだまだ殘り居る樣にて、讀書もうはのそらにて暮し居り申候、先日松井樣にも參り候、皆々御變りなし、貴君の事など噂致し居り候、小山樣にも去る一月玉の樣なる女兒お生れになり、目出度限りに候、島地君も不相變神戸に居られ申候、先日(一月)來訪あり、なつかしく候ひし。

御慰めの御文、病床にて肝に銘し拜讀仕候。病中は殊に冥思孤寂の思ひに耽り、信薄く心弱き身の今更光の道に到るも遥けく覺え申候、ただただ此上は精進三昧の道に入りて力むる外なしと決心いたし候。

小笠原島とや、實は私も嘗てよりこの南洋の島なつかしく、一度はこの島にたどらむものと、三年前より屢々計畫いたし候も、夏の休日とかく意の如くならず、今に曾志を果し兼ね候事、此上もなき恨事に候。今度は相識の貴君もいま事なれば、貴君御在島の間に、是非々々御尋ね申候はんと存候。この夏こそは何とか工夫して御目にかゝりたきものに候。尚其節は不案内の事なれば、旅行上何かの御注意承り度願上候。

當地は春と云ひながら、昨今雨にてなかなか寒く、梅の花もよそにしてコタツにすがり居り申候。先づ時節柄御大事御自愛の程願上候早々。

【評】　これは明治四十一年三月一日、小笠原島に在る遠藤千浪氏に寄せた書翰である。遠藤氏はこれを『手紙雜誌』の第八卷第十號に載せて、終りにかう附記した。

これは今年夏の終の頃みまかられし野の人齋藤信策君より、昨夏來遊を約して、寄せられたる手紙に候。かくて君遂に來まさずして悲しき永久の記念と相成候事ぞ憾みなる。

ことしこそその地へこそとまたせおきてかへらぬ旅に逝きし君かも

おなじ途おなじみ墓へ兄上をいづこまでもと君おひゆきし

流れ進んで行く。學問の道もやはり其のやうにつとめ勵まなければならないといつたのである。

面に唾す　人の面に唾するは甚だしく人を辱しめることである。『史記』の孟嘗君傳に、「其の面に唾して而して大にこれを辱めん」

觀る者堵の如し　堵は牆である。觀る者が衆くて圍繞してゐるを云ふ。『晉書』に「京師の人士其の姿容を聞いて、觀る者堵の如し」

水清ければ大魚なし　水が至つて清ければ、隱れ場がないから大魚はすまない

南洋の島懷しく

小笠原島にて　遠藤千浪識す

齋藤野の人が高山樗牛博士の弟で、明治四十二年の夏の末に兄と同じ肺病で殪れたことは世人のよく知つてゐることであらうと思ふ。この書翰は、いかにもよく情を盡してゐるうちに、巧みに生活のさまを描き出して何時々々までも忘れられない感銘を殘す所がある。

それと同じことで、人も至つて明察であると、人ににくみ畏れられて友達がないやうになる。『文選』の東方朔の『答客難文』に、「水至つて清ければ則ち魚なく、人至つて察なれば則ち徒なし」

耳を掩ひて鈴を盜む　惡事をして人に聞かれるを恐れ、自分で耳を掩うた所が駄目だといふのである。『淮南子』に出てゐる事である。

自暴自棄　自ら其の身をそこなひ、自ら其の身を棄つるをいふ。『孟子』に、「自ら慕ふ者は與に言ふことあ

日記文

甘き哀感

（國木田獨歩）

日曜日。

記憶して忘るゝ能はざる日なり。

本日午前七時過ぎ、信孃來る。前日孃と共に約するに一日の郊外閑遊を以てす。之れ寧ろ孃より申出でたるなり。余之を諾したり。而して、之れ互に或る目的を有したる也。孃は此日を以て其心中の戀愛を明言し、余が決心を聞かんことを欲したる也。余も亦た此日を以て余が孃に注ぐ戀情を直言し孃の明答を得て、苦悶を輕うせんと欲したる也。互に默契したる此の閑遊は遂に今日實行を見るに至り

るべからず。自ら棄つる者は與に爲すことあるべからず」

鹿を逐ふ者は山を見ず　利慾に迷ふ者は道理を忘れるに喩ふ。『淮南子』に、「獸を逐ふ者は目に太山を見ず嗜欲外に在れば、則ち明蔽はる」

人口に膾炙す　膾炙の口に旨いやうに、人々の口に稱讃されることをいふ。膾はなます、炙はあぶり肉。

四面楚歌　項羽の故事から重圍の中に陷つた義に用ゆ。『史記』の項羽本紀に、「項王の軍垓下に壁す。兵少く食盡きぬ。漢の軍及び諸侯の兵これを圍むこと數重、夜、漢の軍四面楚歌するを聞きて項王乃ち大に驚いて曰く、漢皆已に楚を得たるか、是れ何ぞ楚人の多きやと」

駟も舌に及ばず　一たび言つたことは、これを取り消さんとして、駟馬の疾き車で追つかけても取り返しがつかぬといふこと。駟は四頭だての馬である。

顰にならふ　自分の醜をかへりみずに、人の美を模倣すること。『莊子』の天運篇に、西施の眉をしかめたのぬ。されど勿論之れ祕々密々の事、嬢と共に車を飛ばして三崎町なる飯田町停車場に至る。着する時、恰も汽車發せんとする時なり。

直ちに國分寺までの切符を求めて乗車す。國分寺に下車して、直ちに車を雇ひ、小金井に至る。小金井の橋畔にて下車して、流に沿ひて下る。

堤上寂寞、人影なし。たゞ農家の婦、童子等を見るのみ。これも極めてまれなり。

吾等二人、愈々行きて愈々人影まれなるところに至り、互に腕を組んで歩む。吾遂に昨夜よりの苦悶及び吾が信嬢に對する一切の情を打明けて語りぬ。

昨夜よりの苦悶とは、昨夜われ『國民之友』校正のため、社樓に在りて竹越氏と雜談の際、談たま〳〵佐々木豐壽夫人の事に及び、而して竹越氏の曰く、豐壽さん今日吾宅を訪ひぬ。其の時の話の模樣によれば、信子嬢を汐田某に嫁せしむる積りなるが如しと。此の言は極めて簡單なりしもわが心を刺せしこと、如何許りぞや。

信嬢自身も承知の事ならん。果して然らば信嬢は吾が愛を弄したる也。と苦悶、措く能はず、一言を裁して信嬢に送らんと一度書きて捨て、再び書し了りて、机上に置き、寢に就きたり。

今朝は信嬢に其の豐壽夫人の北行を上野に送り、上野より直ちに二人、飯田町の停車場に會する事を約し居たれども、余前夜の事を思ひ且つ天曇りたれば、上野に行かざりし。信嬢上野より來り、閑遊を果す可きを促す。

すなはち、兎も角も、人なき自由の林に入りて吾が苦悶のありたけを打明けんと欲し、同意して吾宿所を出發したる也。

信嬢は吾が腕をかたく擁して歩めり。吾れは一語一語、徐ろに語り、遂に戀愛するに至りし吾が心情を語る時、感迫りて涙をのむ。嬢もまた涙をのむ。

嬢の曰く、汐田某に嫁する云々の事は全く僞報なり、さる事はみぢんもなし、と。

を醜婦がまねしたことが書いてある。

牝鷄晨を告ぐ　妻が夫の權を奪ふをいふ。『書經』に出てゐる言葉である。

百尺竿頭一歩を進む　百尺の竿頭に達するは既に至り盡したのである。又一歩を進むるは、更に工夫を增して上に向ふ義である。

模範　器をつくる型である。木のが模、竹のが範である。それから轉じて人の手本となる義になつた。『楊子法言』に、「學を務むるは師を求むるを務むるに如かず。師は人の模範也」とある。

嬢は吾が愛よりも更らに切なる愛を吾に注ぎ居たる也。

吾等堅固なる約束を立てたり。吾等が愛は永久にかはらじと。

余はブライアントの水鳥に寄する歌を語りて人生の永久の平和を語り、永生を語り、愛の無限ならざる可からざる事を語りぬ。

遂に櫻橋に至る。

橋畔に茶屋あり。老婆老翁二人すむ。之に休息して後境停車場の道に向ひぬ。

橋を渡り數十歩。家あり。右に折るゝ路あり。此道は林を貫いて通ずる也。

直ちに吾等此の路に入る。

林を貫いて相擁して歩む。戀の夢路！　余が心に哀感みちぬ。嬢に向て曰く、

吾等も何時か彼の老夫婦の如かるべし。若き戀の夢もしばしならんのみ。

更らにみちに入りぬ。計らず淋しき墓地に達す。古墳十數基。幽草のうちに沒するを見る。

吾曰く。吾等亦た然るべし、と。

門外雀羅を設くべし　人の訪ひ來る者がないから、群雀が群り來て遊んでゐるだから網を張つて捕へてもいゝ位だといふので、蕭條として、極めて凄じきを形容したのである。『漢書』の鄭當時傳の贊に出てゐる。

沐猴にして冠す　猴が衣冠を着けて勿體らしくしてゐても、其の心は人らしくないのをいふ。『史記』の項羽本記にある言葉である。

齊東野人の語　妄誕の說である。『孟子』に、「これ君子の言にあらず、齊東野人の語なり」とある。齊國の

更に、林間に入り、新聞紙を布いて坐し、腕をくみて、語る、若き戀の夢！

嬢は乙女の戀の香に醉ひて殆んど小兒の如くになりぬ。吾に其の優しき顏を重げにもたせかけ、吾、何を語るも只だ然り〳〵と答ふるのみ。日光、綠葉にくだけ、凉風林樹の間より吹き來る。回顧。寂又寂。

吾曰く、林は人間の祖先の家なりき。今は人、都會をつくりぬ。

吾等は今自然兒として此のうちに自由なるべしと。

默又默。嬢は其の顏を吾が肩にのせ、吾が顏は嬢の額に磨す。嬢の右腕は力なげに吾が左腕をいだく。默又默。嬢の靈、吾に入り、吾が靈、嬢に入るの感あり。

吾頭を擧げて葉のすき間より蒼天を望みぬ。言ふ可からざる哀感起る。

吾曰く、吾が心何となく悲し。されど悲しきは思ふに兩心相いだく、其の極に起る自然の情なるべし。

此の悲哀の感は、吾が愛戀の情をして更らに深く更らに眞面目ならしむと。嬢はたゞうなづくのみ。

東鄙に住む野人の妄説で、信ずるに足らぬをいふ。

先入主となる　一番先きに耳に入つた言を以て宗とすること。『漢書』の息夫躬の傳に、「古戒を觀覽し、反覆參考、先入の語を以て主となすなし」

前車の覆へるは後車の戒　『説苑』の善説篇に、「周書に曰く、前車の覆へるは後車の戒めとは、蓋し其の危きを言ふと」前人の失敗した跡を見て、後人が戒めとするに喩へたのである。

尺蠖の屈するは伸びんことを求むるなり　人の艱難に耐ふるは、他日立身出世の基たるに喩ふ。『易』の繫辭に、「尺蠖の屈するは以て伸びんことを求むるなり。龍蛇の蟄するは、以て身を存ぜんとするなり」

翠微　山の八合目のあたりをいふ。『爾雅』に「未だ上るに及ばず、翠微と曰ふ」

林を去るに望み、木葉數枚をちぎり、記念となして携へ歸りぬ。

境停車場にて乘車す。中等室、吾等二人のみ。

不思議に數停車場迄は一人の吾等の室に來るものなし。吾等は座を並べて坐し、窓外の白雲、林樹、遠望を賞しつゝ、寧ろ汽車遲かれと願ひぬ。

余が歸宅したるは五時半なり。

【評】　これは『欺かざるの記』の後篇の一節であつて、獨歩が佐々木信子と始めて熱烈の愛を語つた明治二十八年八月十一日の日記である。事と景とを叙する間に、堪へ難き戀の情を歌つてある所に、相戀の青年男女が夢みるごとく相擁して林の中を歩み行く姿が髣髴として浮んで來る心地がする。或は老翁老媼を見て老後を想ひ、或は壘々たる墓石の冷たく並んでゐるのを見て人生の儚きことを想つてさへ、なほ二人の若き戀の夢は、毫末も覺めようとはしなかつたのである。噫！　二人が人間の祖先の家といふ林の中に相對坐して、木の間を漏れる日光すら眩しく思うて避けるやうにし乍ら微笑み合つた時、誠に人生の幸福は此處に盡きるとまでに思つたであらう。然るに十一月十一日に萬難を排して辛うじて結婚した兩人は、翌年四月十二日には、信子の失踪に依つて早くも己に永久に相別れることとなつてしまつたのである。

凡そ人生の事、逆じめ知るべからずとはいふものゝ、獨歩のこの戀愛史位世に悲痛を極めた終局を結んだものも少いであらう。

十五日間（尾崎紅葉）

九月一日

（二百十日）有微雨

二日

曇。俳藪の二の三閲句。先月十二日頃後藤氏の幽棲を猪苗代湖畔に訪はんの企ありしが、病を以て果さず、又七月末に成田山新勝寺に石川僧正と會見の約なり

文章添削實例

人の書いた文章を添削する——といふやうなことが、一體出來るものか出來ないものか。よしまた出來るとしたところで、すべきことかすべからざることか。私にはそれからがそも〳〵問題である。

改めて言ふまでもないことだが、文章はそれを書いた人の鏡のやうなものである。その人の品性なり見識なり生活なりが、その有りのまゝに、

（富井氏介）しに果さず、然るに富井氏より書狀にて約を促し來り、頗る當惑せり。

三日　此日初めより紅樓夢を披讀す。

四日　紀州八塚氏妻女祖母の三年忌に付、來る。竹冷氏病床に來り、俳句受賞の打合せあり。

五日　古梅園古墨一笏を贈らる。

七日　夜始めて外出散歩を試む。

八日　千代田連月集二六五句を閲す。霞峯氏の爲めに題句を草す。

九日

映らさまに其處に映し出されるのである。もしその人がきちんとした人ならば文章もまたきちんとしてゐるに違ひない。その人がだらしのない人ならば文章もまただらしがないに違ひない。聰明な人が愚にもつかぬ文章を書きやうもなければ、また賢くもない人が大して立派なすぐれた文章を書きやうもない。正確に物を觀た人でなければ正確な物言ひは出來ないやうに、心かもあはれを感じた人でなければ本當にあはれのこもつた文章は書けやう筈がない。

から考へて來ると、人の書

始めて斜汀と入湯す。大懸賞三十賞句の原稿を送附す。

十日　明進軒贈無花果來。伊庭想太郎無期徒刑の宣告號外。

十一日（二百二十日）微雲なりしが、夜に入りて星出づ。兩三日前米國大統領マツキンレイ氏刺客（波蘭土人無政府黨員ノルマン）の爲めに銃擊せられしが、致命せざるを得たり。清國謝罪使那桐來朝。

本年の殘暑格別にて今に至るまでさして涼を感ぜしめず。

十二日　彌生耳窩内に患部有り、往きて木澤氏の看脈を請ふ。

十三日　夜木澤敏氏來診。彌生の耳疾を療せしむ。

十四日

いた文章に對して彼是嘴を容れるのは餘計なお世話のやうである。ある人がまづい、疵の多い文章を書いたとしたところで、それがその人の嘘僞りのない表現であつて見ればそれをどう非難のしやうもないではないか。鼻の低い人をつかまへて、君の鼻は低くていけない、もつと高くしたらよからう、といふやうな忠告や註文やをする權利や義務やをわれ〳〵は持つてゐない。もしまた持つてゐて註文や忠告やをしたところで仕方のないことである。低い鼻は無闇に高くなりはしない。文章とてもそれと同じことである。もしそれがその人の本當の表現である以上は、吾々はたゞ默つて、口を噤んでそれを見てゐる外はない。それがその人を尊敬する所以である。

所が實際においては、さういふ忠告や註文やをしてもよいやうな場合が世間には幾らもある。その一つは、文章が眞にその人の表現になつてゐない場合である。例へば次ぎのやうな文章を見て諸君は何と思ふか。——

つたなき我運命と、はかなき我生涯は、月暗き寒夜孤雁の悲鳴を耳にして殊更

十五日間

午前腰湯を遣ひ、午後明進軒に赴く。夕暮木澤氏來診。

十五日

日曜快晴。八時三女三千代の座下に來りて叫ぶに覺めて、枕を擡ぐ。

盥嗽後水藥を服す。燒パンバタにて食事中秋濤氏來り、演藝株式會社贊助員の件につき招待ありとの話、門外不出に付謝絶す。

十時斜汀來り、二女を木澤病院に同行す。耳窩內に患所有る爲也。槐亭の和歌浦自畫贊の賦一卷を返送せり。

此日始めて栗を買ふ。昨今兩日築土神社祭禮にて、囃子の音聞ゆ、又秋興たり。

秋天雲なく寒靜として氣澄清——清風有りて蟬頻りに鳴くこと惱し。這箇の秋喧。これ可喜。

十一時、新勝寺豐田催秋季五題一九五句を選し、直に返送せり。新聞二三流讀。

石井氏十九日發表第二回大懸賞俳句募集の件にて、打合に來る。座間丸岡氏來る、扇地紙に六枚揮毫し一時出で〻明進軒に會食す。花車や、軒先に造花の枝を曝せるに日色麗々映發せり。歸途三千代の爲めに麻褥を求む。

三時歸宅、越中氷見、霞峯氏より、序文謝儀金五圓小爲替にて來る。

夏彥九分の熱出で物驚すとて、南町宍倉氏へ請診の使を出す。

午後風凪ぎて日漸々とし、やゝ暑きを覺ゆ。第二回大懸賞俳句募集規定の草案に着手す。斜汀生一條成美より武藏名香原稿を取來る。

二女祭禮に赴く。

五時宍倉歸宅の由電話にて知り、菊子幼兒を帶して、英一を供とし請診。直に歸る。

薄暮、文案中、麥人來訪、竹冷不興の旨を訴ふ。

晩食イタリヤ製ソウセヱジ鯔煮付、鰹煮付等にて、二碗喫飯、食後婢とよ水瀉の爲に、試に現の證據を煎じて飲ましむ。

夜黑うして氣靜かに、星斗欄干たり。

八時上樓着座。

に哀愁の情深きを添へ、悲痛の感は湧勃として胸腔に溢れて、哀れ一縷の追懐を辿りぬるあはれさよ。

二十有餘年の青年は、山寺のあしたゆふべの鐘の音におくりむかへられて、あたら有爲の春秋を夢のごとく暮しぬるこそかへすがへすも恨めしかりけれ。

名には敗れぬ、戀には躓きぬ、今はた何處にかこの衰殘の身を横たふべき。光榮の冠を胸に描き、希望の星を仰ぎけん昔の夢の如何に樂しかりしよ。肉は躍りつ、血は漲りつ、一劍天下に横行せんとする意氣の如何に雄々しかりしよ。されどこは夢なりき、幻なりき。

これはある青年の手に成つたもので、『寒夜の涙』と題した文章の冒頭の一節である。見たところ、あはれげな、そして意味の深いらしい、外見美しい文字が澤山出てゐるので、初心の人などは或は大した名文のやうに思ふかも知れぬが、實は極めて詰らぬ文章である。なぜかといふに、かういふ文章は、世間に有り觸れた惡い作文の參考書を一二册も座右において、その中の

夏彥九分の熱、服藥後七分に到る、されど物驚すること甚し。十時大島生より

はがきにて懸賞俳句失名の事を問來る。又甲州禾生村都倉五郎氏より扇面短冊二枚寄書にて、自句を書せしを送りしを誤ならんとて、小包にて返送し來るに添狀ありて、稼雲會の事を言來る。いづれも返信せり。

十時半、戸を閉づれば、尙ほ熱きを覺ゆるを免がれず。十二時半寢。

【評】『十千萬堂日錄』の一節。明治三十四年九月一日より十五日迄の分を玆に拔いたのである。日記には其の樣式が色々あるが、これもまた其の一體である。心內の事柄は全くこれを語らず、單に日々の出來事を其の要領だけ記したのである。果して思想上の苦悶が故人にあつたかどうかは此の日記ではもとより知る由もないが、いかに故人が多方面の人達と交際して、而して何れからも尊敬されてゐたかは知ることが出來る。

前に出した國木田獨步の『欺かざるの記』も同じく日記であるが、この『十千萬堂日錄』とは其の內容に於いて殆ど兩極端を示してゐる。彼には若き人の內心の苦悶を見ることが出來るが、其の日其の日の生活はこれを見ることが出來ない。これに反して、此には其の日其の日の生活の狀態をさながらに見ることが出來る。一は思想史であり、一は生活史である。

看護（與謝野晶子）

二日。

昨夜も夜中に四五度起きて吸入をさせたり濕布繃帶を替へたりしたが、麟の容體は宜しくない。床を二階へ移してその傍でスバルの森先生の小說を讀んで私は泣いて居た。半子さんと云ふお子は滿六ケ月ださうである。麟は明日で滿七ケ月になるのだ。光が半どんで晝前に歸つて來た。御飯を食べて居る時豆腐屋が下女を一人伴れて來て呉れた。銀杏返しに結つた紺絣のよく似合ふ少女である。廿一であるさうだ。二階が寒くなつたので四時頃にまた下へ麟を降した。夕方代診さんが來てくれた。右が惡かつたのが左の後へも少しうつつたさうである。先刻か

文句を少し氣をつけて繼ぎ合せれば、誰にでもたやすくこしらへられるものだからである。書き並べられた文字は、文字がもとから持つてゐる意味だけを表はしてゐるに止まつて、作者その人の本當の心持や本當の姿やは少しも表はしてゐない。部分々々に疵があるとか、缺點があるとかいふよりは、もつと根本的に文章そのものが死んでゐる。形ばかりは立派に出來てゐても生命がこもつてゐない。もし美しい文字をたゞならべるのが文章を作るといふことであるならば、これもまた文章を作つたといふことに相違ないが、文章はその人の表現であるといふ意味から云へば、こんな個性のない、誰の場合にでも當てはめ得られるやうなものは、實は文章とは言へないのである。いくら顏も姿も美しくとも、それが泥人形では仕方がないと同じことだ。

だからもし初學者のうちにどうかいふ過ちから、右に擧げたやうな文章を作り習つてゐる人があるとすれば、その人はあまりまだ深入りしないうちに、その道を誤つてゐる非を悟つて、新らしい道へ出直さなければいけない。實は

ら七瀨と八峯の聲がかれてきたやうに思つたが、寢ると直ぐ咳が出だして熱も高くなつて來た。森先生のお宅の歌會へ行つた夫は十一時過ぎ平野樣と一緒に歸つて來た。下女をもう寢させたので、私は臺所へ行つてココアを造へて二階へ持つて行つて、その序に平野樣のお床を取つて來た。それから七瀨と八峯にも吸入を懸けた。

三日。

麟はます〳〵宜くない。今日は日曜で講義の日である。二人の女の子は朝になつて熱が少し醒めた。小さい三つの寢床の中に坐つて居る私の心は暗い暗いものであつた。今日は源氏の代りに別に上古史の話をしてくれたさうで、夫は八時半から十二時まで一人で話しつゞけたので苦しさうなのが氣の毒でならなかつた。待ち兼ねた岡崎先生が三時頃に來て下すつた。顏を見るなり、

『やあ惡い。』

と仰有つた。私は涙が零れた。今度は左が非常に惡いさうである。兩方ではとても辛抱が出來まい。可愛さうなことであるがとお云ひになつた。私の一番小さい金絲雀は死を宣告されたのである。今夜か明日の夜明が危いと云つてお歸りになつた。幸に下女が二人になつて居たので、先生の云ひ付けになつた手當や設備は直ぐ出來た。夜になつてから晝間見た都新聞の歌を清書してくるやうに夫に云ひつけられて、私は寢てゐる麟を夫に賴んで二階へ上つた。暫くしてふきが二階へ上つて來て、私の傍でわつと泣いた。私は默つて下へ降りた。夫は先刻麟室に移させた七瀨の寢床で吸入を懸けて居た。

『麟は死んだのですか。』

『さうか。』

二人は一緒に麟の傍へ寄つたが、小さい人はまだ息をして居た。

『寢て居るのだ。』と夫は云つた。

『お起し遊ばせよう。』

と云つてふきは泣き入つた。夫が抱くと麟は細い聲で泣き出した。夫はそれから

今日のやうに、誰しも自分といふものを重んじ、自分といふものを主張してゐる時代にあたつて、右のやうな死んだ文章を書くことに苦しい努力を拂つてゐる人があるといへば、嘘のやうに聞えるが、しかし實際はまだ中々さういふ人が少くないらしい。踏み出す道を一歩誤れば、終には千萬里の差となるものである。苟くも文章を書いて、それがその人の表現となつてゐないならば、それを書いたものは正に最も大いなる恥辱を自分に對して感じなければならぬ。

手紙を書いて江南様を呼びに上げた。江南様はその車夫と行き違ひに家へお出でになつたが、何も御存じない。櫻田倶樂部へ活動寫眞を見に光を伴れて行かうと思うてお出でになつたのださうだ。私の家はこの始末であるから驚いて妹さんを倶樂部へ送つてお出でになつた。私は勞れたものと見えて麟の傍で何時の間にかうと〳〵眠つて居た。

【評】　與謝野晶子夫人の日記の一節である。文章としては、唯だすら〳〵と安らかに書かれてあるといふ外には別に特色のあるものでもないが、吾々がこの文を讀むと、其處に詩人としての夫人よりは寧ろ人間としての夫人、母親、主婦としての夫人といふものをより多く思ひ浮べることが出來る。

與謝野夫人はよく古への清少納言と比較される人であるが、清少納言にも、また、此の日記に見えてゐる『人間』と全く同じではないが、やはり『人間』が脈打つてゐたことは其の著『枕の草子』を見ても明らかである。吾々は先づ『人間』でありたい。藝術を作らねばならぬ義務約束、さういふものを吾

けれども、かういふ場合になし得る忠告なり註文なりは添削といふやうな部分的の性質のものではなくて、もつと根本的なもの、もつと全般的なものである。即ちこの字がいけないとか、この句が不穩當だとかいふやうな注意ではなくて、こんな文章を書き習ふことは全く止めたがよからう、といふ警告である。從つてさういふ境にいつまでも彷徨してゐるのは、今の私の務めではない。私はもつと直接に、實際的に、添削の實例に這入つて行つて、諸君の文章をして眞に自己の表現たらし

吾は背負はされてゐはしないが、先づ『人間』では是非あらねばならぬ。詩、歌、小説、などを作る爲めに、世の營みを餘所にしようとするが如きは、惡魔の爲めに藝術を作らうとする徒らな努力であると言つてもよい。

めるやうに、諸君が文章に對する考へをまじめなものにすることを力めなければならぬ。

先きに擧げた文章を見た目で、諸君は次ぎの文章を讀んで見たまへ。――

庭に一本のもゝの木がある。まあ二尺ぐらゐ。一つぎりもゝがなつてゐる。まつかだ。うまさうだ。お父さんのだいじのもゝの木だ。今はない。七年の昔だ。お父さんはもゝの木にかきねをした。たぶんだれも見ておらんだらう。二あしばかりの所をやつとではつていつて、なつてをるまゝ一口ごり。見つけられて大めだま。

これは尋常四年の生徒の書いたものだが、いかにもよく書いてあるではないか。過去と現在とをごつちやにしてゐるやうな所はあるが、一語一句生き〳〵としてゐて、その時のさまが目に見える。『寒夜の涙』のやうに、文字ばかり綺麗だつたり、むづかしかつたりしても、潑溂とした生氣のない、死んだ文章とは比較にもならぬ。これこそ本當の文章である。始めから終ひまで讀んで行くうちに、自然

論說文

空拳か實拳か　（德富蘇峯）

人々相扶くるは、是れ人道也。されど人道は他より施すべきものにして、我より請求すべきものにあらず。人道の哀願は乞食となり、人道の强要は、脅迫となる。凡そ世の中に憐む可きは、他を怨望する者より甚だしきはなし。而して怨望の情は、何によりて生ずる乎。只だ他に向つて求むる所あり、而して求むる所、意の如くならざるより生ずるのみ。概言すれば人道は與ふる爲めの人道にして、受くる爲めの人道にあらず。斯く觀念すれば如何なる運命に遭逢するも、一生氣易く暮らすことを得可し。

然らば則ち吾人が期待する所、焉くにある、曰く只だ己にあり。吾は吾が納稅者也。吾の註文に應ずるは只だ吾あるのみ。若し怨む可くんば、吾を怨みよ。若し咎む可くんば、吾を咎めよ。されど怨みたりとて、咎めたりとて、何等の得る所なきを知らば、寧ろ吾は吾を恃み、吾を便りとし、吾を勵まして、吾事を成さしめざる可からざる也。

世人動もすれば、徒手空拳と云ふ。然も空拳の意義に就いては、聊か穿鑿を要するものなからず、空拳とは、無一物の意味なる乎。乃ち無一物を以て、人事百般に應酬せんと欲す。是れ豈に無謀の極にあらずや。但だ吾人の所見は、之に異なり。空拳とは、拳以外何物もなしとの意味にして、拳實體は、現存す。故に空拳と云ふも、拳其物より見れば、實拳と云はざる可らず。世人徒らに空拳の空字に重きを措きて、拳其物の人間の一生に重大なる關涉あるを閑却するは何ぞや。

空拳は實拳也。卽ち何物もなきも、拳其物はある也。而して此實拳なるものは果して恃みとするに足らざる乎。吾人は張儀が其妻に向つて、吾舌尙ほ在りやと

と一人の少年の姿が――幼いながらに聯想と思索とを追つてゐる一人の少年の姿が、われ〳〵の胸に映じて來る。本當に文章を書かうといふのなら、この純な、無邪氣な心持から出發して行かなければならぬ。

しかしこの文章は完全か、疵はないか、といはれゝば、私はイエスと答へる譯には行かない。作者が子供だけに、ピリオドとピリオドとの間に於ける思想の聯絡を書き現はさずにおいてあるから、文字の表からのみまともに解釋する段になると、多少の破綻がある。「庭に一本のもゝの木がある」と、かう作者は現在で書き起してゐる。これを書かうとした時の作者の胸にはあり〳〵と桃の木が見えてゐたに違ひない。でそれを現在に書いても不思議でなかつたであらうけれど、實は七年も前のことであるから、何か特別の形式をとらうとする場合の外は、先づ過去で書いて行くべきである。即ち次ぎのやうになる――

庭に一本の桃の木があつた。丈は二尺ぐらゐ。たゞ一つ桃がなつてゐた。まつかでうまさうだつた。

問ひし如く、如何なる場合にも、吾拳在りやと自問自答せざるを得ず。拳は自覺の表現也。努力の表現也。奮闘の表現也。一拳の向ふ所、天下に敵なし。敵なきにあらず、我が奮闘は、遂ひに周圍の障碍を排除するに餘あれば也。

凡そ外來の幇助は、一生より打算し來れば、難有もあり、難有もなし。富貴に生れ、名門に生れ、生れながらにして、其の父祖及他の餘光を帶びて、世に立つ者は、出身の第一次に於て、既に勝者の列にあり。されど戰はずして勝つ者は、戰うて勝つ者に若かず。他力の出身は、自力の出身に若かず。吾人は折角天稟に於て、幾多の奮闘力を享けつゝ、遂ひに之を用ふるの機會を有せざる紈袴子弟の爲めに、轉た同情に禁へざるものなしとせず。而して世或は之を羨望して、自から不幸を呻つ者あるは何ぞや。

人生の愉快は、自から運命を開拓するより大なるはなし。一拳を揮へば、玆に一拳の效あり。百拳を揮へば、玆に百拳の效あり。是拳や空にあらず、實也。即ち吾が精力は、此に在り。吾が熱血は、此に在り。而して吾が生命も亦た此に在らずんばあらず。吾人は何の遑ありてか自から叩頭して、他人の幇助を哀願せん乎。又た何の欲する所ありてか、自から腕を捲くりて他人の援助を强要せん乎。我が運命は、鍾めて此の一拳にあり。吾人若し拳を揮ふこと、鍛冶屋が鐵槌を揮ふが如くせば、思ふ所、何事か成らざらん。此の如くして成らずんば、死すとも悔ゆるを要せざる也。

斯く云へばとて、吾人は一身を外間より遮斷せよと勸說するにあらず。自から求めざるの外援は、悅んで驩迎す可し。而して自から助くる者は、人必らず之を助け、天必らず之を助く。是れ人道の妙諦にして、期せずして自から來る也。好運の來るは、新婦の來るが如し。準備ある者に向つて然り、準備なき者に向つて然らず。古人の所謂る人事を盡して、天命を俟つものそれ之に庶幾し。

世に無中有を生ずるの理なし。人或は空拳奮闘者の成功を目して、一端の僥倖となすものあり。蓋し思はざるの至り也。精力は無形なれども、其の無形の爲めに、實在を疑ふ可らず。吾人は精力の實在たるを知ると共に、空拳の實拳たるを

所で私はこゝで作者の心持を少し想像して見なければ次の文句に移つて行けない。作者は直ぐに、平氣で其の木を父親がだいじにしてゐたことを書いて行つた。で心持の自然の順序として、あゝあのお父さんがだいじにしてゐた木も今はもうない。考へてみれば、もう七年の昔のことである、と無造作にすゝつて行つてしまつたのであらうが、しかし、直接には桃が旨さうだつたといふことゝ、父親の大事の桃の木だつたといふこととの間には何の關係もないのである。が、そこへ、「欲しかつた」といふ一語を入れて見ると、明かに思想の聯絡がついて行く。欲しかつたけれども、お父さんが大事にしてゐる木で、垣根までこしらへてあるから、取る譯にはいかない。でも欲しい。どうしても欲しい。そこで人のゐない隙をねらつて、多分誰も見てはゐまいと、二足ばかりの所をやつとのことで垣根の中へ這つて這入つて、いきなり木になつてゐるまゝの桃へ一口ごりと齒を當てると、其の瞬間に見つかつて大めだまを食つた。あゝそれももう七年の昔だ。今は其の木もない。これ

知らざる可らず。資本何ぞ必らずしも金錢のみならんや、將た何ぞ必らずしも區區たる有形物のみならんや、人間最後の資本は、其の拳にあり。而して最上の資本も亦た其の拳にあり。既に之を有す、復た奚んぞ他を羨まんや。如何なる人間にても、一人には、必らず一人前の資本は、先天的に具備し居る也。

【評】　蘇峰先生の訓ふる所はいつも常識の上に立つてゐるので、一見或は平凡なるがごとくに思はれるが、直ちにこれを處世上に移して効用少からざる所に其の所說の價値多きを思はざるを得ない。或は常識に根ざせる教訓を漫りに擯斥して重きを置かざらんとする青年なども今の世には有るとのことであるが、若し其れが果たして事實とすれば、恐らく彼等はかの足元を見ずに天ばかり仰いで歩いて忽ち溝壑に墮する夢想者流に外ならぬであらう。夫れ常識は世に處する上のキイノートである。これを土臺としてこそ、其の人の才分も十分に發揮することを得れ、これを擯斥して如何にして世に處さうとはするか。吾等はこれを思ふが故に、先づ健全なる常識教に傾聽せんことを

世の青年諸君に望みたいのである。

蘇峯先生の文は意の有る所を盡して則ち止むといふ概がある。しかも讀みもて行く間に、自然と讀者をして、自ら顧みて吾れと吾が心に首肯かしめる。凡そ教訓の効果は、我より注入するのみでは到底大なることは出來ない。唯だ彼をして自ら覺り自ら警めるに至らしめてこそ始めて其の本義を十分に盡したものといはれる。蘇峰先生の文のごときは誠にこの義に庶幾いものである。若し夫れ文の妙に至つては今更ら改めて言ふを須ゐない。

創作（上田敏）

創作は實に自然の要求に迫られて出るものである。利得の爲、はた名聞の爲とは、全く唯僅に表面の動機で、鳥が歌ふやうに歌ふこそ詩人の眞相だ。詩は特殊の人にとつて殆ど生理上の產物であり、偶々其元氣の餘澤を脆弱の常人に蒙らすのである。歐羅巴現代の大詩人 EMILE VERHAEREN. が日常の生活を聞

をすつかり書き直して見るとかうなる——

庭に一本の桃の木があつた。丈は二尺ぐらゐ。たゞ一つ桃がなつてゐた。まつかでうまさうだつた。僕はそれが欲しかつた。がお父さんの大事の木で、垣根がしてあつた。でも僕は欲しかつた。僕は人のゐない隙をねらつて二足ばかりの所をやつと這つて這入つて、なつてゐるまゝいきなり一口ごり。見つけられて大目玉を食つた。

——七年の昔だ。其の木は今はない。

くに、夏秋の頃は都會に遠い、鐵道を離れた田園の一小村落に閑居して、大作の孵化に餘念なく、或時は簡素なる書齋に孤座して、高遠なる思想の夢に耽り、また或時は田野を跋渉して、大自然と對話し、これを其足踏の節奏に似た自由詩形の律語に現はすといふが、冬は必らず大都會の群集に身を投じて、現代文明の波瀾に揉まれることを忘れない。會心の友と語つて文化の最高潮と接觸するも此時である。しかし、花粉が春風の息に散つて、陽光田野に漲る時候になると、風物の變化に動かされ易い此詩人は、自然と眼が涙ぐんで來て、筋肉がむづ痒く、心なにとなく苛らだつのを感じてじつとしては居られない。海濱の地に轉じて、大洋の聲に心中の懊惱を紛らすさうだ。機能の上に現れる此煩悶、春を知らせる此漠然たる惱心地、生氣の鬱勃たる發生と壓迫とは、實によく詩人の心情を暴露したもので『言へばえに、言はねば苦し』とは、ひとり戀愛の情ばかりでは無い。世界と我との間に、常人の場合より更に密接の一致ある詩人の心狀を指したものだ。詩人は終に發表し、製作し了つて、始めて重荷を卸した心持になるのだらう。

しかし、これでは全く平坦の書き方で、原作の、「まつかだ、うまさうだ。お父さんのだいじのもゝの木だ。今はない。七年の昔だ」と水の流れるやうに、少年らしい思想のまゝに表現された趣きは餘程減殺されてゐる。どうもこれは仕方のないことで、いくら疵があつても自分の感情なり思想なりを、自分の言葉で書いた文章には、どこかに生きた所があるが、他人の筆が加はると、いくら疵がなくなつたり、正格なものになつたりしても、それにこもつてゐる生命は、どうしても傷つけら

詩人の言語は、其時々の用を足す符號ではなく、心の狀態其ものを明かにする象徵であるから、尋常の用向又は利害の爲に述べる言葉よりも、更に痛切に、親密に、ある時はぎよつとする程突込んで來るものだ。あの溫和な人から、よくもこんな思想が出ると思ふくらゐ、眞面目な、凜とした發表を聞く事もあつて、その時は殆ど別人の如く見える。古人はこれを天來の妙想と稱して、神憑託宣と同じ類に入れ、今人或はこれを以て潛在精神の昂上と說明するが、何れにしても普通の理性より更に大なるものゝ加はるに違ない。此時尋常日用の語は不思議な新しい威力を帶び來つて、感情の起伏につれて、自から節奏を具へる。人もしこれに耳を傾ければ、言語が現はす論理上の意味以外に、それと連關してとてもそれだけでは說明しきれない微妙の快感を覺え、一時なりとも生命の擴大せられるのを感じる。詩の德は實に生命を豐富にし充實するに在る。

【評】　與謝野晶子夫人の歌集『春泥集』の序文として、上田敏氏は長い一編の抒情詩論を書いた。これは其の中の一節で、氏の所謂創作の眞意義を闡明

れる形にならずにはゐないのである。

尤もまたかういふ例もある。以前、東京の大きな辻々に警視廳で立てた制札があつて、それには次ぎのやうに書いてあつた。

注　意

一、歩行者は歩道を通行せらるべし

一、歩道の設けなき所は其の左側を通行せらるべし

警　視　廳

これには、一讀した所でも分るであらうが、先きの少年の文章にあつたやうな趣きといふものがない。一方は一人の心持から出發して行つたのだが、こちらは一つのお役所といふ集合團體の心持から出發してゐるので、一人の人に統一されてゐるやうな個性がないからである。のみならずかういふ類のものは、趣きといふやうなものに重きをおくよりは、寧ろ正確に其の意味を一般民衆に分らせるべきものであるから、文法上の誤謬などがあつて意味を曖昧にするやうなことがあつてはならない筈だ。所がこれにはそれがあるのである。少しでも文章を書いた覺えのあるものなら、誰だつて氣がつくやうな

されたものである。議論の當否、詳しく言へば氏の此の定義が、創作の境地全體に當てはまるべきものであるか否かは姑く別問題として、エルハアレンの日常生活を叙された所に詩人の感情生活の響を耳に聽くやうなふしがあつて、如何にも面白く讀まれる。日本のやうな社會狀態では、これと同じやうな生活は或は到底出來ないかも知れないが、若し天分に富んだ上に、物質上の條件も備つた詩人があつて、これと同じ生活をなし得るとしたら、如何ばかり其の人は幸福であらう。

上田敏氏の文章は必ずしも暢達とはいふことが出來ないが、讀者を十分に頷かせるだけの力には富んで居る。

二宮尊德の教訓（山路愛山）

我等の二宮氏に感服する所は其獨立自尊の教訓なり。二宮氏は勿論後の世に福澤諭吉と云ふ學者ありて獨立自尊の說法をしたることを豫知すべき筈もなければ獨立自尊と云ふ文句は口にせざりしかども其言行は無遠慮に獨立自尊の主義を現はしたるものなり。今其次第を申さんに、二宮氏が櫻町の仕法に取掛る時の事は最も善き一例なり。此時二宮氏は大久保侯より米錢を引出したるにも非ず、金持より金を借りたるにもあらず、皇國開闢の昔は外國より資本を借りて開きしに非ず、皇國は皇國の德澤にて開きたるに相違なし。されば櫻町四千石の地を海中の孤島と見做し、吾神代の古に豐葦原へ天降りしと決心し、皇國は皇國の德澤にて開く道こそ天照大神の足跡なりと思ひ定めて一途に開闢元始の大道に據りて勉强すべしとて、何物も加勢を賴まず、唯だ櫻町の德澤を以て櫻町を開きたりと云ふ。是れ則ち獨立自尊の教に非ずや。前文に記したる無利息金は太陽の如し。太陽は唯だ芽を出す力あるものゝみを育つるものなりと云ふ教訓も同樣の事にて西洋人が天は自ら助くるものを助くと云ひしと同じ意味なり。愚見に依れば報德講の生命は實に此に在りと思へり。如何なる茅屋の民にても自分の身の汕にて自分を養ふべし。決して他人の厄介になるべからずと覺悟し、其覺悟だに付きたらば

分りきつた誤謬であるから、多分諸君も一讀過した際にすでに氣が附かれたことであらうと思ふ。それは第二項の「其の」といふ文字の使ひ方である。「其の」といふ言葉は代名詞であつて、かういふ場合には直ぐ前に述べた名詞の代りに用ゐられるにきまつてゐる。だから、この第二項を正確に書き直せばかうなるわけだ。——

一、歩道の設けなき所は歩道の左側を通行せらるべし

併しこれが警視廳の意志でないことは明かだ。警視廳ではたゞ歩道のない所は、道路の左側をお歩きなさい、といひたかつた——いや、さういつたつもりでゐるに違ひないが、「其の」といふ一つの代名詞の使ひ方を誤つた爲めに、意味を不明にしたに過ぎない。しかし歩く者が歩道を通るべきこと、歩道の設けられてない所は道路の左側を通るべきことは、都會においてはすでに一種の不文律になつてゐるから、誰もあの條項を正面から解釋して、そして警視廳の意味を强ひて曲解して、彼是言ふやうなものもあるまいが、どうせ深切からあゝいふ注意をして呉れるものなら

是則ち國の生命の芽に活氣あるものなり。則ち國の元氣に培ひ得たるものなり。德は本なり。財は末なり。此元氣さへ出れば如何たる人間も相應の役には立つものなり。近頃社會問題など云ふこと追々六づかしくなり、政府にても無政府主義社會主義などの發生蔓延を恐れ、色々世話を燒き、世の志士仁人に於ても、如何にもして貧富の隔絶より生ずる惡しき人氣を和らげんと骨折る樣子なれども、畢竟人間に獨立自尊の元氣さへ付けば此問題は竹を破りたる如く埒の明くべきものなり。たとへば高き年貢を出して他人の田地を耕し、大勢の家族に惱まされ、所謂喰ふや喰はずの苦境に陷りたる水呑百姓にても、「人間は死にても他人の世話になるべきものに非ず。天祿は我身に在り、我力に在り」と覺悟し其氣になりたらば敢て金持を羨むにも及ぶまじ。或は今の世は大金持が大きなる道具を据ゑ置き、大仕掛にて世界の富を自分の仲間のみ集め貧乏人は自然の勢僅かの給金にて追廻はさるゝ天下なり。かゝる天下は世の中の仕組を立換へるより外、人間を救ふの道はあるべからずとの議論もあらんかなれども、たとへば世の中の仕組を立替へるにしても人々皆「自身を助くるものは唯だ自身のみなり。夫れが天地開闢以來の大道なり」と云ふことを心得るは第一必要の事なり。我等などは今の世間の仕組を立替へずとも此覺悟だに人間に宿りたらば世上の苦情は大抵鎭まるべく、又此覺悟だにあらば世の中の仕組も自然に善き方角に改まり行くべしと信ずるものなり。たとへば如何ほどの水呑百姓にても、夜業の一時間を加へて何か相應の仕事を營み一錢二錢を儲くることは成るべし。或はそれが出來ずとも酒と煙草をやめ、其外無益の費用をはぶきたらば是亦一錢二錢を殘すことを得べし。貧乏と云ふは程度問題なれば、他人が絹張の蝙蝠傘をさす所を木綿のにし、他人が木綿の傘をさす所を傘なしにて歩くことにすれば、少々の餘裕は必ず出來る筈なり。其餘裕を大事にして儲へ置けば非常の場合に人に頭を下げずとも濟むことなり。或は又それにても難儀の場合なきを期し難ければ水呑百姓同志寄合其一錢二錢を土臺にして賴母子講を結び病氣天災の用意とすべし。一錢二錢にても百軒寄れば一圓、二圓なり。月に積れば三十圓乃至六十圓なり。まさかの時の保險料に

もつと分り易くて正確な文章を書いて欲しいと思ふ。試みに私がもしこの文案をするとなれば次ぎのやうに二項共書き改める。――

一、歩く人は歩道をお通りなさい

一、歩道のない所は道路の左側をお通りなさい

少くとも、かう書いた方が、前の制札に書いてある文言よりは、一般民衆の耳にも入り易いし、且つまた正確に意味を徹底させることも出來ようかと思ふ。

私はまたかつて次ぎのやうに書かれてあるはがきを受取つたことがある。曰く、

拜呈。陳者推參中は種々御屋介に相成誠に難有御禮申上候。小生御地出發の當日無事にて、終列車にて着仕候間、乍他事御休神被下度候。先づは御禮傍々一寸申上候。余は後便を似て萬々申述ぶべく候也。

これが甚だ型にはまつた文章でおまけに誤字も澤山あることは、諸君の御覽の通りである。が私は、それらの文句についてお話したり、添削を試みたりする前に、このはがきが一體どういふ場合に私の手に受取られたかを少しくお

は充分なり。敢て他人に依らず、自分の身の油にて自分を養ふことゝ定め、斯樣にして金持の厄介にならねば金持と云ふは唯だ金のある人のこと、貧乏人と云ふは唯だ金のなき人のことにて獨立自尊の人間たる値には差等なければ貧乏人なりとて心廣く體ゆたかなるべし。

【評】　かつて雜誌『獨立評論』に掲載された『報德新論』の一節である。『報德新論』は、二宮金次郎が世に賞讃されるに至つたのは、一には時節、二には後立の人物の善かつたこと、三には自分が仕事に相應したことの三箇條の理由に依るといつて、一々證を引いてこれを詳說して後、更に進んで二宮氏の人物に及び、教訓に及んでゐる。而して玆に引いた一節は、卽ち彼の教訓に就いて說いた條下である。特に新しい說とも思はれないのは、それが解說を主としてゐるからであらう。併し、愛山氏がいかに文章を通俗に和らげんとして腐心したかは、一度これを讀むものゝ必ず氣の附く所であらう。文章體でも此の位になれば、口語體よりもなほ平俗に近いやうに感ぜられる。讀者は愛山氏の目の前に坐つて、其の說話を聽いてゐるやうな氣持がしずにはゐられないであらう。

詩人と宗教家

（岩野泡鳴）

神といふ觀念があると、どうしても自然に對する熱度が薄くなる。實際生活で云へば、毎日の仕事は他日或神報を得る手段に過ぎない。だから、一つの過ちがあると、それを懺悔する形式までが起つて來た。神も知らない、道德も知らない實業家ほど、現代に於て自己の仕事に一生懸命なものはあるまい。丁度西行や芭蕉が自己の詩にあこがれて、草鞋掛けで諸方を行脚した勢だ。耶蘇教徒が實業界に飛び込んで、失敗することが多いのは、教訓的詩人が詩を牛馬視する樣に、事業その物を手段視するづうゞしさからである。詩で云へば、同じ虹を見ても、ヘンリヴンダイクの「遙かに聽くは音樂にして、色みな歌ふなり」と云ふ樣な云ひかたもあるのに、ヲルヅヲルスの樣な詩人はこと更らに不朽不死を感ずるなど

話したいと思ふ。書翰文は、文章の中でも殊に大事なもので、そしてまた何人も常に書かねばならぬものであるからいろ〳〵な意味において參考となるべきことをも序にお話しておきたいからである。

一體、書翰といふものは、會つて話をする代りに用ゐるものであるから、言ふまでもなく自分自身で書かねばならぬ。勿論全くの無筆で書くことが出來ぬとか、或は公文書のやうなものは例外であるが普通一般には、よしんば文章を綴ることが拙くとも、文字を書くことが下手であらうとも、必ず自分で書くべき筈であることは、丁度話をするのに人の口を借りる譯には行かぬと同じやうなものである。ところが、世間にはたゞ用事さへ足りればそれでいゝといふ風な考へから、人に代筆させて平氣で寄越す人が少くない。前のはがきはさういふ一例である。

しかも其の差出人は私の親戚の者である。親戚も親戚、極めて近い親戚で、私にとつては目上に當る人である。その人が字の拙いことや、文章の旨くないことは、親類中誰知らぬものもない位であるか

歌つた。それは、たゞ屁理窟ではないまでも、鈍感で材料が得られないところから、そんな方へ頭を持つて行つたに過ぎない。また、耶蘇が「野の百合は如何にして長つかを思へ、努めず紡がざる也」と云つたまでは詩的だが「神は……斯くよそはせ給へり」と付け加へたのは蛇足である。佛蘭西中世紀の遺物にして、散文韻文交互體の戀愛物語『アウカサンとニコント』は、之を英譯したアンドリユウラングも云つてる通り、「純情と諧謔との魔力ある混成詩」だが、非常に固定したコンヱンションがあるので、丁度ホメーロスの叙事詩に ἔπος（斯く語りければ）といふ語が何度も出て來て、何となく叙事の道筋に威嚴を持つかの樣に、アウカサンが馬を驅りて羊牧ふものらのそばに行き、「よき兒等よ、神、汝等と共にあらん」(Fair boys, God be with you) など云ふと、一種の詩味があるかの樣に歌つて居る。これは宗教が詩を殘害する適例である。然し、僕は神を否定しても必ずしも唯物論を唱へる譯ではない。若し神と神の力とがあるものなら、それは自分以外ではないといふのだ。ニーチエから出て來た思想は、宗教的慣習を破り偏見を破り、僭越を破つて、非常に人間なる物を偉大にした。併し、その偉大はゼルレインの行き方と同樣刹那々々に獲得されるのである。わが國古代の神々が神から生れて神となり、また自分が神を生んだと同前眞正な自然主義の表象はいつも、生き〳〵して、永久に形式を拵へない表象でなければならない。

假定のない表象は、即ちその物身みづから生々苦悶する表象である。自分が自分を喰ひ殺す刹那の感想である。肉も、靈も、情緒も、思想も、渾然として目前に活現し、自然の外に天を許さない危機である。この自然の機をゆるめれば、メーテルリンクの所謂沈默を經て死と運命とが出て來ようし、また、中澤臨川氏が新古文林で『ツルゲーネフの哲學觀の根本概念』と云つた冷かなる威力と永久と自足がある自然も出て來よう。然し、そんな消極的思想をすべて吸收した後では、人生は　癲病人が腫物を搔いて、その痛がゆいところに非常な痛恨と快樂とがある樣なものだ。深刻な現世主義は、眞正な表象主義の立脚地である。いつも生き

ら、勿論私もよく知つてゐる。そして私がそれを知つてゐるといふことは、その人もまたよく知つてゐて、たま〳〵逢つた時などには、いつもそのことを言ひ出して平素の無沙汰の言譯にしてゐるくらゐである。その人が、ある年の春のことであつた。花見がてら用事を足しに東京に出て來てちやうど二十日間ばかりも私の家に滯在してゐた。それも一人ではなく、別に東京見物を目的にして來た子供を二人と親類の婆さんを一人連れてゐたのである。東京で借家住居をしてゐる私達のやうな者の身に取つては、同勢四人もの客のあることは、先づ第一に寢道具から借りて來なければならぬのだから、一方ならぬ世話であつたことは、諸君にも想像がつくだらう。しかし、これは親戚の間柄で、殊に目上の人に對する目下の者の義務であるから、それについて私は何事も言はうとするのではない。たゞ其の人が東京を立つ時、ある停車場まで送つて行つて別れてから、五六日して私の手に配達されたのが、即ち前に掲げたはがきであることを諸君に承知して貰ひさへすればいゝのであ

生きしたわが國の古代人もこの立場に立つて居たし、マラルメやヱルレインの詩も此狀態を現はさうとした。僕の『半獸主義』は、即ち、それである。或は之が宗教にならないとは斷言しないが、世人は、桑木博士が『哲學雜誌』で云つた哲學と哲學思想とに違ひがある如く、宗教と宗教心との違ひがあるのに、之を混同して居る。天地不可解を叫んで煩悶するのも宗教心である！　その煩悶を熱刻して更に深い煩悶を現ずるのも宗教心である。これわが國の古代にもあつた。またデカダン藝術にもあつた。たゞ宗教家の所謂宗教とならなかつたのは、寧ろ幸ひであつたのだ。かういふ藝術をトルストイなどは背德不健全と云つて攻擊したがそれでは、その精神や身體が不健全な宗教家が、神を證し、基督を說くのは、このデカダン派の藝術とどれ程の高下があらう？　數歩を讓つて云つても、宗教家は宗教を以て宗教心を說き、藝術家は藝術を以て宗教心を現はす。併し、藝術は宗教よりも自由で、而も偏見の附いて來ないのは事實である。今一つ附言して置きたいのは、藝術家はたゞその作物を以て之を現はすだけだが、宗教家は行爲を以て實行するといふ論者もあるか知れない。併し、前者の創作は後者の行爲に劣らない實行である。而も、痩つこけた山僧や、瀕死の居士が、一小庵室でふざけた眞似をしたとてそれが何で詩人の一詩に及ばうぞ？

【評】『新自然主義』の中に收められてある『日本古代思想より近代の表象主義を論ず』の一節で、神といふ觀念があると自然に對する熱度が薄くなるといふことを實例に就いて論じたものである。或はすでに固定した信仰を持つてゐる人々には、其の意味が十分に會得されまいかとも思ふけれど、心を虛しくして聽いたならば、得る所が少くなからうと思ふ。

文章としては、多少蕪雜な點がないでもないが、よく思ふ所を思ふ儘に述べてゐるものとして、氣易く讀まれる。型にはまつた堅い文章でなければ、深遠な思想はこれを表現することが出來ないものゝやうに思つた時代の過ぎたことを、此の文章などは殊に有力に語つてゐるものである。

る。

思つても見給へ。これが同勢四人で二十日間も癡たり起きたり、我が儘を言ひ合つて暮らしたほど親しい間柄の人の手紙と、どうして思はれよう！　何處に一點の親しみがあるか？　何處に眞情流露といふやうななつかしさがあるか？　たゞ是れ、古來有り觸れた「到着報知」の文例を誤字澤山に書き寫した一枚のはがきたるに過ぎないではないか？　親類の婆さんや子供達はどうしたであらう！　山の中へ歸る人達だからといふので、土産には珍らしいものを

女子の三種類（堺利彦）

今日の社會に於ては、貴婦人と家持女房と賣淫婦と是れが女子の三大模型である。そして其の孰れが果して最惡、最劣、最醜の者であるかは、容易に之を判ずることが出來ぬ。

貴婦人なる者は、此の商賣制度の今の社會に於いて、最も顯著なる特産物である。富裕なる上流社會に於ては、私有財産の思想と彼の天使白痴說と結びついて、女子は愈々甚だしく財物視せられ、人形視せられ、其華奢の風は益々長じて其の有用の點は益々減少し、遂に完全なる貴婦人と爲り了るのである。

凡そ女子は、其子を愛育するに勞苦を厭はざる如く、一般に其の一身を捧げて人を扶け、人に盡し、人を世話するの本能が最も强烈である。然るに、斯くの如き本能本性を有する女子の幾萬、幾十萬が、貴婦人と稱せられて、多數の雇人に冊かれ、其の美しき愛の手と心とを空しくして、徒らに上流男子の玩弄となるか

と、わざと生きたまゝ箱に入れてやつた魚類はどうしたのであらう？　それについても一言位の挨拶はあつて然るべきではないか。

そればかりではない。私は宛名になつてゐる私の名と、差出人たる其の人の名とを見た時は、思はず苦笑せざるを得なかつた。其の人の名の『幸藏』は『孝造』と書かれ、私の名の『晁』は『晃』と書かれてあるではないか。人は知らぬが、私は自分の名を書き誤られた時位不愉快に思ふことはない。書き誤る方から言へば、單なる不注意から出たと思へば、實に馬鹿々々しさの限である。今の世の『紳士』と云ふ奴が既に愚劣を極めて居るが、此の謂はゆる『貴婦人』なる者に至つては、更に一段の醜惡を極めて居る。見よ其の氣にも染まぬ男子に生涯を身賣して、忽ち笑ひては忽ち泣き、狹量、短見にして虛榮に恥る有樣、眞に憫殺すべきである。

昔し封建の世に於ては、殿樣の御座所が正殿に在つて、それが大名の家庭の中心となつて居たが、今日の社會では、奥樣若しくは令夫人が客室に鎭座まし〳〵て、それが紳士の家庭の中心を成して居る。昔の封建時代と今の商業時代との對比は、頗る善く此の家庭の變遷に依つて見る事が出來る。昔には粗野な所があつたが、其の代り寛大にして率直であつた。今は華美の風を極めて居るが、其の代り纖巧にして虛僞である。彼の客室の窓掛を見よ、刺繡を見よ、善く其の軟弱の姿態を示して居るではないか。然し此の客室が家庭の中心たる時代も亦た漸く過ぎ去つて、次には『茶の間』若くは『常の間』が之に代つて家庭の中心となるのであらう。

事で、何でもないことであらうけれど、私はいつもひどく侮辱されたやうな氣がする。しかも、このはがきに至つてはそれ所ではない。たゞに先方の名を書き誤つてゐるばかりか、自分の名さへ、二字ながら全く別な字になつてゐるのである。言語道斷ではないか。是れみな自分で書かずに人に代筆などさせたからである。

よしんば文面は前に掲げたものと同じであつても、誤字もまたそれだけあつたとしても、それが自筆であれば、それを受取つたものゝ心持が違ふ。單なる一枚のはがきながら、其の背景が異つて來るからである。なつかしいさまざまの聯想が其の拙い字や下手な文句にも喚起されて來るから、筆者の書きたりなかつた所は受信者に於いて補ひもする。丁度相對坐してゐる時に無言の情味を相互に感じ合ふやうなものである。

それにまた、到着の報知を二三日も經つてから出すといふことも面白くない。旅立ちした人が無事に先方へ着いたかどうかといふ事は、其の通知のあるまでは人の心配の種となつてゐるのだから、出來

中以下の家庭には、初めから『客室』といふ者がない。勞働階級に在つては、女子は日常必要な人物であるので、之を偶像として別室に飾り立てゝ置く譯に行かぬ。そこで細君は長火鉢に坐りこんで、膳や、椀や、茶や、菓子や、皆な其左右に控へて置いて、それで以て男に仕へることになつて居る。此の小家庭の有樣は、男子は多く戸外に働き、女子は多く室内に働くといふ、寧ろ自然の分業を其の共稼の間に示した點もある。

然しながら女子は又こゝで一つの陷穽に陷るのである。彼の貴婦人などに比べて見れば、勿論一層眞面目な身の上ではあるが、然し此の『家持女房』なる者は、實に純然たる奴隷の境遇である。男子は固より何の思ひやりもなく平氣に之を見すごし、女子自身も亦た久しき習慣の事として之を當前として居るが、若し深く其の實際を察して善く考へて見たならば、其の境遇の悲慘は迚もお話にならないのである。朝から晩まで立つたり居たり、三度の食事の拵へから、拭き掃除洗濯、着物の繕ひ、夜具の上げおろし、子供のシ、バ、の世話もせねばならず、其間に

亭主の機嫌も取らねばならず、家の中にばかり引込んで、新らしき空氣を呼吸する事もなく、珍らしき景色を見る事もなく、心も弱り氣も疲れて、只だモウ生きた機械となり了るのである。

右の二つ、人形の如き貴婦人と奴隷の如き家持女房を外にしては、女子の取るべき道は只だ賣淫生涯の一つである。今日までの世の中に於ては、勞働者は皆な其の勞力を賣るの外、生活の方法が無いと同じ樣に、女子は皆な其の『性』を賣るの外、生活の方法が無いのである。只だ之を生涯一男子に切賣にして正しき妻と呼ばれ、貴婦人或は家持女房として家庭の中に閉ぢこめられるか、但しは夜毎夜毎に之を初賣して賣淫婦と呼ばるゝかの別がある丈である。女子にして若し眞に深く之を思はゞ、心中誰か憤りを發せずに居らるべき。嗚呼々々、過去數千年間の女子の運命は實に斯くの如き者であつた。

【評】『婦人問題』の中に收められてある『兩性新論』の一節である。論者の立場が社會主義に在るだけに、やゝ矯激に走せた點もあつて、論旨に就いて

るだけ早く知らせるやうにせなければならぬ。實際右の一枚のはがきだけで事の實否を正す段になると、或は途中で用でも足してゐた爲め手間取つたものかとも思はれるし、また或ひは無事到着とは書いてあるが、實は何か事が起つて、自分で筆を持つことの叶はぬやうなことになつてゐるのではないかとも想像される。

たま〳〵幸なことに、私のこの場合には、私の生家へ屆けて異れるやうにと頼んでやつた生魚を受取つたといふ知らせが、直ぐ其の翌日、生家の兄から來てゐたものだから私は歸國した連中の無事であつたことをも推測して、別段案じてもゐなかつたが、もしその知らせがなかつたならばそれこそどんなに心配をしたかもしれない。

さて、右の文中、目立つて耳際りの文句について、少しくお話するとしよう。先づ第一に、「推參中」といふ文字はこの所では穩當でない。この言葉は「推參致すべく」などと、これから訪問しやうとする場合などに多く用ゐられる。本來の意味は、招かれもせぬのに推して參るといふのは、或は幾多の非難を加ふべき餘地があるかも知れぬ。殊に女子に深い同情を寄せてゐながら、却つて其の反感を買ひはせずやとさへ思はれる節もある。併しまた心を虛しうしてこれを見れば、傾聽に値ひする所も決して少くない。

そはともあれ、いかにも樂に筆を着けて安々と其の論歩を進めて行く間に、自然と讀者の胸の底に忍び込むやうな力を藏してゐるのは、まさに此の文に學ぶべき一つの特色である。

東洋の花園（竹越三叉）

偖予は旅行以前より深く瓜哇、スマタラ、ボルネオ等の和蘭人の植民地に向つて興味を有して居つた。何となれば和蘭は其國の弱少なるに拘らず、殆ど世界に於ける最も大なる植民地を、今日尙依然として把持して居るといふことが一の問題である。第二に和蘭人が此植民地を維持して、之を統治して行く方法の巧妙なることが、亦第二の着目點である。而して予は瓜哇、スマタラに上陸して其の實地を見聞して、更に深く此興味を增したのである。我が國人は既に馬鈴薯なるものを、薩摩芋若くは青芋と同じく、外國品と思はぬやうになつたが、この馬鈴薯の生產地、卽ちジヤガタラは瓜哇の首府であつて、其土地の濕潤なるが爲に、今のバタビヤに首府を遷した譯である。此ジヤガタラなる者は、我が國人の食膳に上る薯の名、及びジヤガタラ文の遺り物によつて我が國人に記憶せらるゝ所であるが、予が一たび此バタビヤに入るや否や、第一に感ずる所は其天然の豐饒にして、凡そ萬物備はらざる所なく、所謂『東洋の花園』と稱せらるゝ、其名の實に空しからざるものであると云ふ一點である。羨むべきは和蘭人である。彼は千五百人の水夫、鋼鐵をも用ゐざる木造の軍艦數艘を以て、此國を三百何年前に占領して、而して今尙此花園より無數の黃金を持去ることである。試に地圖に就いて見よ、スマタラは如何に大なる島であるか、スマタラ一島を以てするも、尙我が本州よりも大なるものである。日本の臺灣を加へざる面積は十四萬七千六百方哩である。然るにスマタラは十六萬千百六方哩である。而して此外に瓜哇本島あり、

であるから餘程賤しい言葉である。「推參なり下郎」などと無禮を咎める言葉にもなつてゐる位だ。尤も、さういふ意味の言葉であるだけに、こちらから卑下して使ふ分には差支へないやうにも思はれるがそれも時と場合とに依りけりで、漫りに使つていゝといふ譯には行かない。それなら此處にはどういふ言葉が一番當てはまるかといふに、やはり一般に使はれてゐる「逗留中」とか、「滯在中」とか、もしくは「此の間中」とか「先達て中」とかいふやうな有り觸れた言葉である。それに前にもお話しておいた通り、このはがきを出した人の方が受取人たる私には目上に當つてゐるのであるから、何もさう無闇に卑下したりなどするには當らないのである。否、當らないどころか、一體目下の者に向つて、餘りに自分を卑下した物言ひをするといふことは却つて相手を侮蔑するやうなもので、卑下が卑下とならず尊敬が尊敬とならないものである。

「御屋介」は「御厄介」の誤り。「傍々」は「旁」の誤り。「余は後便を似て」は「餘は後便を以て」の誤り。――此の

マズーラあり、ボルネオあり、リヨウリンカあり、モラツカあり、スンダあり、ニューギニアあり、此等の諸島は恰もエメラルドの寶玉の如き美麗なる海に散布して、和蘭人の偉大を語りつゝあるのである。試に地圖に就て見よ、スマタラと爪哇との相聯絡する中間に一の海峽がある。是れ卽ち和蘭人が始めて爪哇を取る時に通過した所の海峽であつて、所謂スンダ海峽である。若し日本の如き有力なる艦隊を持つ所の國氏が此海峽を制したならば、而して英吉利が新嘉坡の海峽を制したならば、歐羅巴の如何たる艦隊と雖も、最早東洋へ下ることが出來ぬ所の樞要なる海峽である。然るに此海峽は今や尪弱なる和蘭人の手によつて取られ、而して露西亞の艦隊が東洋に下るときは、此スンダ灣を通つて來らんとするといふ勢であつた。如此の江山すら人に任すといふことがあるか、實に惜しむべき形勝の地と謂はねばならぬ。予は是に於てか今日の和蘭人と比して、古代の和蘭人のいかにも規模雄大にして、勇氣の横溢したることを嘆美するを禁じ能はぬのである。

【評】　三叉竹越與三郎氏は、かつて南洋に遊んで、ジヤワ、スマタラ、ボルネオ等の和蘭植民地を仔細に觀察して來て、そして周匝なる圖南の計を立てた。玆に掲げたのは、其の當時、氏が其の經綸を天下に語らんとして、數日に渉つて『讀賣新聞』紙上に掲載した『南へ！』の中の一節である。日本人はこれまで全力を傾倒して支那に向つてゐたが、今は一轉して、マレイ人の國に著目せねばならぬ時節となつたといふに筆を起して、古來島帝國が大陸に足を掛けた時は、則ち其の國の弱點の初まりである。我が國民は、我が將來は島にある、海にある、太平洋にあるといふことを深く記憶せんことを冀ふといつて、次ぎに說き進んだのが、卽ち玆に掲げた條下である。

其の文平易にして流暢、よく其のいはんと欲する所を盡して遺憾がない。しかも、其の裡に藏せられた一味の覇氣は、眼光紙背に徹するものでなくとも、よくこれを會得し得るほどに、行間を脈搏つて流れてゐる。眞に經世家の文といふべきである。誠に我が國人が紛糾事繁き支那大陸に手を拔いて、南

四文字が書き誤りであることは、改めていふまでもなく諸君にもお分りであらうと思ふ。

それから、「小生御地出發の當日無事にて終列車にて着仕候」といふのもまた面白くない文面だ。出發の當日着くべきことや、終列車に乘つたことなどは、此方を出發する時にわざ〳〵停車場まで送つて行つて、切符を買ふ世話までしてやつた受信者には、初めから分り切つてゐることである。それに四人の一行の到着を「小生」と單數で書いてあるのも不注意なれば、三四日へ！　南へ！　を叫ばん時は、そもそも何時の日であらう。

笊の伊藤公（黑頭巾）

◉公伊藤は碁淫たり、碁狂たるを失はず。公は、つねに、碁打によつて包圍せらる。

◉公を包圍するの幇間は、屢々碁打となりて現はる。

◉公は殆んど極端に碁を好むと雖も、之を伯大隈などに比すれば、固より數段の下にあり。公は笊の笊なる者也。

◉伯大隈は、初段に二目位の實力あるべし。公山縣は公伊藤より弱く、侯井上は更に弱し。

◉碁は、人格を表現す。伯大隈の碁は、智略に富み、低く張りて、緣を這ふ方にして、勝つと雖、位高からず。

◉公伊藤の碁は、笊だけに、頗る早し。或は公は一時間平均四面を打つといふも

も經つてから、「出發の當日」などと漫然とした言葉を使つてあるのも感心しない。「無事にて終列車にて着仕候」と「にて」を二つ重ねてあるのもまづい書き方である。

殊に、耳に異樣な感じを與へた文字は「也」といふ留書である。一體留書といふものは、必要があつて書くといふよりは、寧ろ一種の禮儀として書き添へるべきものであるから、それが却つて先方に不快の感を與へたりするやうでは何の役にも立たない。そんな位なら、むしろない方がいい位のものである。勿論「也」のあれども、そは酷評也。唯だ公や格別の早碁たるを失はず。

◉公の碁は、全面に渉りて、兎も角も崇大なる作戰計畫あり、其の蹉跌するに當つては、中押負たるを失はざれども、其の作戰の適中するに及んでは、大陸の平原に六軍を行るが如く堂々たり。而して公は喜色滿面に溢る。

◉公が猶ほ小田原の滄浪閣にありしときの事也。嗣子博邦、小宮三保松等と碁を打つに、公、來りて助言して已まず。

◉青年者、大に乃爺の干渉を厭ひ、去つて玄關脇の書生部屋に入りて盤に對す。謂ふ、迚も公の來る氣遣ある無しと。

◉豈計らんや、公は青年の行方を物色して、書生部屋にも入り來り、手を鳴らして煙草を取寄せ、悠然として坐り込む。

◉公の助言は、必ずしも、一方に偏すに非ず。白を呼び黑を動かし、全面に干渉し、遂に公一人にして、白、黑の遣ひ分けを爲すに至らずんば已まず。

【評】黑頭巾、本名を横山達三といひ、號を健堂といふ。人物評論家の雄で

といふ文字もまた留書の一種として古來使はれてゐるものであるから、それが一概に必らずしも惡いといふのではない。たゞこの文字を使用すべからざる所に使用してあるから不快な感じを與へることになつたといふのである。「也」といふ留書は主として官廳とか會社とか、總じて公文書には使つてゐるが、個人間では餘程卑賤のものに對しての外は滅多に使ふことのない文字である。もし此處に「早々」とか「不一」とかいふやうな文字が使つてあれば、即ち「餘は後便を以て萬々申述ぶべくある。

玆に引用したのは、『包圍されたる伊藤公』の中の一節である。氏の文章の特色は、頭に思ひ浮ぶがまゝに筆を落して一節又一節、其の間に何等の連絡のあるとないとを顧みず、何處までも筆を驅使して平押しに押して行く所に在る。が、玆に引いた所のごときは、該文章中の極めて短い一章だけに、比較的筋道が立つて岐路に彷徨するほどに至つてゐないが、それでも、冒頭と結末とでは全然何の關係もないものになつてゐる。しかも、伊藤公その人の面目を躍如たらしめてゐるのである。

眞面目な生活　（相馬御風）

眞面目な生活を主張したり、緊張した生活を要求したり、眞劍な生活を力說したりする事を、まるで此の人間の世から面白いとか樂しいとか云ふことを凡て追ひのけてしまはうとして居る事のやうに解して居る者が少なからずあるやうである。かう云ふ人達は「眞面目な生活」とか眞劍な生活とか云ふと、何のことはない何時も鹿爪らしい顏をして、一つ事ばかり考へ込んで居る世間の所謂ワカラズヤの生活がそれだと思つて居るのである。何と云ふ馬鹿々々しい謬見であらう。かう云ふ人達はつまり形の上から人生を考へる事しか出來ない、最も哀れむべき人達で、かくの如き人達の爲めに吾々の生活がどれ位無意味なつまらないものにされて居るか解らぬのである。

一體形の上からばかり人生を考へると云ふことは、單に今云つたやうな人達の考へて居るやうな事ばかりでなくさま〳〵な點でさま〳〵な誤つた見解を構成しつゝあるのである。

世の中には眞面目に見える事を不眞面目にやつて居る人がある。不眞面目に見えることを眞面目にやつてゐる人がある。眞面目不眞面目は決して形の上からばかり別れるものではない。酒を飲んだり、女を買つたりすることが不眞面目なことで、何もしないで書物ばかり讀んで居ることが眞面目なことだなどと云ふやう

候早々」とか、「餘は後便を以て萬々申述ぶべく候不一」とかいふ風に書いてあれば、「詳しいことは何れまたあとで申上げます、では左樣なら」といふ位の意味になるが、「餘は後便を以て萬々申述ぶべく候也」では、「詳しいことは何れまたあとで言つてやるぞよ」といふやうな、極めて横柄な意味になつてしまふ。もともと禮儀は一種の習慣であるから、無闇にかういふ慣例を無視するやうなことをしてはいけない。

では一體かういふ場合――即ち無事の到着を知らせよう

とする場合には、どういふ風に書いたらよいか？　私がもし書くとすれば次ぎのやうに書く。尤もこれは、着いた時に直ぐ書くものとしての文案である。

拝啓。只今一同無事に着きました。逗留中はいろ〳〵御厄介になりました。何れ詳しいことは後から申上げます。取敢ずお知らせまで早々。

なぜ無事に着いたことを先きに書いて、厄介になつたことを後にまはしたかといふに元來この手紙の第一の趣意は無事の到着を知らせることにあるからである。「いろいろ御厄介になりました」とのみ言つて、「難有御禮」の意味のことを書かないのは、これだけで十分にお禮の意味をも含ませてあるからである。それに一つは相手が目下に當つてゐるのだから、さうまで丁寧に書かなくともよいからである。一體お禮即ち感謝といふやうなことは、言葉の上にあるものではなくて、こちらの心持の上にあることである。心持さへさうなつてゐれば、書いた文字の上にその意味のことがはつきりと現はれてゐないでも、先方にはちやんと

な區別は僕等の眼から見れば最も馬鹿々々しい考へ方である。

吾々が主張する眞面目な生活は、そんな人達の解するやうな外からきめてかゝつた眞面目な生活ではない。形はどうでもよい。たゞ自我の中心生命の要求に眞面目であればよいのだ。つまり自我の中心要求によつて眞面目に生きて行く事なのだ。「あゝ云ふことをしろ」「かう云ふ事をしてはいけない」と始めから外的にきめてかゝるのではなくて、何をするにも自我の中心力を失はないで生きて行くことなのだ。

【評】　この文は一つの感想として書かれてある。けれども仔細に見て來ると御風氏の頭の中には、明かに辯難の相手があつて、其の人に對して更に自說を主張し力說しやうとしてゐるものであることが分る。さういふ方面から見れば、この文は一種の辯駁文である。ただ直接の辯駁文と異なる所は、相手を誰と明瞭に指し示してゐないだけのことである。

御風氏の所說は極めて明瞭である。そしてこれは自我の權威を眞に認めてゐる人ならば、恐らく何人といへども否むことの出來ないものである。世間の所謂普通の人達は、やゝもすれば標準を外部に置いて、それで物の價値を極めようとする。例へば眞面目不眞面目といふやうなことでも、第一に世間の思はくを眼中に置いて、人から譏られまい、非難されまいと考へる所から、自己內心の要求の聲には耳を閉いで、即ち自我を殺して、僅にはかない滿足を買つてそして得々としてゐるやうな人達も少くない。眞に自己の生活を愛重するものから言へば、これが大きな謬見であることは言ふまでもない。

酒色に沈湎する耽溺生活なども、一般的に見れば無意味な不まじめなものであるが、併しこの生活を外にしては、眞に生きる道がないと思惟せられる人の場合に在つては、確に極めてまじめな眞劍な生活である。無自覺的に一時の快を貪つて其の日の生活を糊塗しようとするのではないからである。

けれども茲にまだ一つの問題がある。それは一人の人の生活が、此の人の世の生活に於いて、大きく言へば宇宙生命の生活に於いて、いかなる要求を

通じるものである。これに反して、いくら言葉ばかり鄭重にしても、内心で少しも感謝の意を表してゐなければ、口先ばかりの空世辭となつて、却つて人にいやな感じを與へるものである。勿論空世辭にもだまされる人があると同じやうに、文字の慇懃なのを心からの慇懃と思ひ誤る人もあるであらうが、少し文章を見る目の肥えたものには、かういふことは直ぐにそれと氣が付かれてしまふ。

それから、「何れ詳しいことは後から申上げます」と私は書き添へておいたが、これは抱く時に於いて眞の生活と言ひ得るかといふことである。自我の權威を眞に認めるといふ事は、即ち眞の自覺とはどういふことであるかといふことである。而してこの問題は、御風氏の「自我の中心生命の要求」なるものが、更に一層具體的に闡明された場合に在つて、始めて釋然と解決されるであらうと思ふ。併しこの文に於いては、氏はまだ其處まで入つてゐない。

尤も、これは前にも言つた通り、此の文の主意が、まじめな生活に對する一種の辯駁であるが故に、其の言說に於いて相手の者に反省の機會を與へさへすればそれで目的は達せられてゐるのである。御風氏が其の問題を他日に殘したのは當然の措置である。

御風氏の文章には、反覆して物を說いて行く行屆いた深切のある代りに、ともすれば餘りに平板に失し過ぎるやうな嫌ひがある。併し何事に對しても情を盡した一應の批判を試みて、世人に適從する所を知らしめようとする氏の誠意は、誠に尊敬すべきであると思ふ。

この到着の報知は、ほんうに「取敢ず」の際であるから、何かと道中のことや、又は家に歸つてからの事柄などは後から知らせるといふ意味であつて、たゞ無意味に書き加へたのではない。世間には、何を書いた後にでも「何れ詳しいことは後から」とか、「何れ後便に」とかと、癖のやうに、この數語を書き添へる人があるが、あれは其の人の頭の散漫なことを示してゐるやうなもので、何の役にも立たない。私がここに書いたのは、さういふ漠然とした場合と違つてまだいろ〳〵と詳しいことを

實世間の眞相

（齋藤綠雨）

○人は鳥ならざるも、能く飛ぶものなり。獸ならざるも、能く走るものなり。されども一層適切なる解釋に從はゞ、人は魚ならざるも、能く泳ぐものなり。

○利口さうなると、正直さうなるとは、人間游泳の極意也。一般社會は此さうなるを以て、信用の基礎となすものゝ如し。利口なるなかれ、正直なるなかれ、凡てに語尾の明確ならんは、溺沒をまねくにちかゝるべし。

○眞人間無きにあらず、眞人間の世を渡るもの無きのみ。紅塵青史、利を競ひ名を爭ふ、眞人間の堪ふる所ならんや。勳位あり、爵祿あり、算盤あり、石門鐵墻の嚴めしきあり、强て眞人間を作るの要あるを見ず。

○忽ち曰ふ、眞摯なれと。こは己に責むべき事也。他に責むべき事に非ず。よしわれはわがマジメを藏するも、むやみに人樣に御覽に入れんとは思はず。

○故にわれの酒客と談ずるを欲せざるは、酒を欲せざるのみならず。實に其人、

知らせなければならぬやうに思はれるからである。本當ならば直ぐに委託された土產物の處分などもしてしまつて、其の結果までも知らせてやるべきであるが、何しろ二十日間も留守にしてゐたのだから家の方にも何かと用事が溜つてゐようし、それこれと取紛れてゐては、いつになつて詳しい手紙の書けることか分らぬので、先づ取敢ずほんの到着の知らせをすることにしたからである。

若しまたこのはがきを出した實際の場合のやうに、二三日經つてから書くものとすれば、私は次ぎのやうに書かうと思ふ。——

拜啓。お知らせが大變遲くなりました。家へ歸つてみましたら、家の用やら、村の用やらが、どつさりたまつてゐたものですから、氣にかゝりながらつい取紛れてしまつたのです。あの晩遲く、一同無事に歸りました。そして土產物もあの翌日の早朝に御生家の方へお屆けしました。逗留中は何かと御厄介になりまして有りがたうございました。後れながらお知らせかたゞ御禮まで早々。

其談を欲せざるなり。わが知れる限りを以てすれば、酒客は早速本心を申上ぐる者なればなり。手中一個の盃に代へんには、餘りに惜しきわが命なればなり。

○飲んだ話をする奴は、飲まぬ奴也。飲みたい奴也。當世の事、酒を經ざれば友にあらず。

○流行はわれに來らず、われは流行に恃まず。恃まざる流行のわれに來るものは、感冒のみ。

○若よく人言を容るゝ者あらば、其病時なるを察すべし。加持も祈禱も容るゝ時なるを察すべし。

【評】『みだれ箱』に收められてある『長者短者』の中の一節である。奇才齋藤綠雨、陋巷に窮死してより既に幾星霜。世間の傳ふる所に依れば、まだ墓石すら建てられてないと云ふことである。薄倖の文人は永久に薄倖の文人で終るであらうか？

併し、彼が書き殘した燃犀な觀察は、何時になつても滅びぬ生命を持つてゐる。見給へ、玆に引用した一節のごときは、斷片的ではあるが、實によく實世間の眞相を看破つた人の言であることを思はせるではないか。されば、一見奇矯なる諷刺と見える言葉も、仔細にこれを味はへば、其處から無限の教訓の湧いて來るのを覺える。

日本の道學先生　（內田魯庵）

▲日本の教育者輩は未だ在來の非科學的道德觀の俘れとなつてるから、兎角『性慾』問題に觸れるのを恐れて、恰も那須野の殺生石扱ひをしてをるが、元來人間の本能として饑渴に次いで止むなきものを强ひて見ざる聞かさる言はざる擬して蓋をしてをるから却て危險を增すのである。そのくせ小學校の子供に女の貞操を教へ、賢妻良母を女學校の唯一無二の方針として常盤や袈裟の咄を道德の教訓として話して聞かせながら、其の人倫の底に橫はつてる性慾に就ては毒物視してをる。賢妻とならんが爲に良夫を擇んだのを女の墮落として呪つてをる。しかし性

この場合には、着いて直ぐの知らせと違つて、遲くなつた譯を先づ言はねばならぬと思ふから、右の通りに順序を轉倒したのである。見給へ、直ぐに知らせを書いてしまへば簡單で濟んだものを、二三日後らしたばかりに、餘計な言譯をしたり、下げでもいゝ頭を下げたりしなければならなくなつたことを。人間は誰しもどうせ爲なければならぬことは、どうしても爲なければならぬのだから、其の時に當つて等閑に附しておくことのいけないといふことは、かういふことに依つても知ることが出來る。

所で私はなほ一言茲に附記しておきたいことがある。それは、先きに掲げた到着報知の文例は候文であるのに、私がそれを書き直すに方つて、全く候文を捨てゝ口語文を取つたといふことについてである。諸君の内には、或はこれに對して不審を抱かれる人もあらうかと思ふが、私はそれについては別に一己の考へをもつてゐるのである。そのことを序に少しく書き添へておきたい。

勿論私と雖も、書翰文の内に候文といふ一つの形式のあ

慾を亡ぼしたなら女の貞操も賢妻も存立しないのを教育者も知らん事はあるまいが、性慾を呪つてるくせに貞操や賢妻を奬勵してをる。尤も斯う云つたら習慣で作り出された道德の形式に泥んだ說を持出して辯明するだらうが、斯ういふ道德論教育論をするんぢやない。唯性慾を毒物視し惡魔視し、只管之に觸れざらん事を欲する爲に生ずる矛盾を如何にして調和するやといふが疑問であるのを、此疑問を疑問とせず、少しも解釋を試みようとしないで、獨斷を以て壓しつけられるやうに思つてる。尤も中には此疑問に彷徨してゐるものも無いではない。斯ういふ人は賴もしいのだ。

× × ×

▲日本でも宗教家とか道學先生とか教育家とかは、（實は相應に墮落してるくせに）表面では木の端か竹の屑のやうな顏をして自ら得々として居る。尤も一體に何事にも科學的研究の念が足りないからであらうが、性慾の事などは噎にも出さずに一向不問に附して置くを道德的のやうに思つてる。假に若し道德家があつたとする。其の道德家の書齋に裸體畫でもあつたとすると、其の裸體畫がルネイサンスの畫聖の筆であつても直ぐ其人の道德が疑られる。道德家たらんとせば机の上に小說を置く事は出來ぬ。苦り切つて論語の話ばかりしてゐなければならぬ。所が、英國ではアングロサクソンの健全一點張りの嚴ましい國がらとて、クラフトエビングの著書を專門家以外には賣らぬが、特に僧侶に限つて購讀するを許してをる。人間を濟度する役目の僧侶は人間必然の本能たる性慾に關して一とわたりの知識を心得て置くべき必要があるからだ。假に若し日本で造化機論を醫者の外は教育家と道學先生と坊主に限つて賣るとしたら何うだ、そりやア大變だ、教育家や宗教家を墮落させてはならぬと云つて騷ぐかも知れない。

× × ×

▲尤も歐羅巴の暗黑面は日本よりは甚だしい。光線の强い時は明るい部分は益々明るいが、黑い影は愈々黑い。歐羅巴の文明は遙に日本に過ぎてる代りに、歐羅巴の暗黑面も日本よりは一層汚ない。此汚ない部分を見て日本の風俗の美なるを

ることを認める。けれども、これから新たに世の中へ出て行かうとする人間は、さういふ形式を取つて、自分の意志なり感情なりの發表を强ひて億劫な、面倒なものにする必要はないと思ふ。其の理由は簡單である。吾々は、苟くも文章を書くからには、生きた文章を書きたいからである、死んだ文章を書きたくないからである。諸君もこれには同感であらうと思ふ。もし同感でない人があるとすれば、其の人は屹度先きに擧げた『寒夜の涙』の作者のやうに、文章は自己の表現である、といふことを本當に考へたことのない人でなければならぬが、私はさういふ人が諸君の中にあると信じたくない。すでに同感であるとすれば、なぜ生きた文章を書きたいかといふ穿鑿は玆ですする必要はない。けれども、どうすれば生きた文章が書けるかといふことについては、少しく研究して見なければならぬであらう。

そこで、先づ問ふべきは、生きた文章とは一體どういふ文章のことであるかといふことである。玆には專ら書翰文について考へて見ると、やはり普通にいふ眞情流露といふ謳歌する者もあるが、之は日本の美處と歐羅巴の醜方面とを比較した咄で、日本の美なるは子供の美なるやうなものだ。之を發達せしむるに方ては或は多少の醜分子を伴ふ恐れがないとも限らぬが大きくなつて惡智惠が附いては大變だと云つて、何時までも子供にして置いたらドウダ、例へば昔の黃表紙にあつた、婚禮の晩にお聟さんとデン〳〵太鼓で遊ぶやうなお嫁さんが出來たらドウダ、此お嫁さんが淑德ある模範的婦人であらう乎、勿論、斯ういふ模範的婦人が出來るものなら拵へるも妙だらうが、今の性慾を全然無視して木の股から生れて來たやうな顏をしてゐる道學先生や教育者は、カウいふ性慾を一向御存じない青年男女を養成するツモリで墮落書生を製造してゐる。

【評】　かつて『東京朝日』の文藝欄に載せられた "Vita Sexualis" の中の數節である。もと此の一文は、鷗外博士の "Vita Sexualis" は日本に於いて性慾解釋を大膽に發表せる先蹤として文藝上、學術上、最も意味深いものであるといふことを極言せられたものである。けれども、中には抄出するを憚るやうな文字も尠からず見えてゐたから、遺憾には思つたが、此處には魯庵氏が得意の揶揄と飜弄とを縱にして、日本の道學先生や教育家や宗教家やの覺醒を促がしてゐる數節を拔くに止めた。

私は數年前或る雜誌に書いたことがあるが、宗教家や教育家や道學先生などいふ人々は、譬へば人生に於ける醫者のやうなものである。だからこれらの人々は、人生の從軍記者たる詩人や小說家などの報告を誠實に聞いた上で、仔細に診察し、これに適藥を盛ることを心掛けなければならぬ。彼等には從軍記者の報告を變改したり抹殺したりする權利はなくて、却て後者の報告に依つて、自分等の行動を決すべき義務があるのである。然るに現代の日本に於いては、彼等は其の分を守つて職責を盡すことをなさずして、漫然無責任な行動をなして、いよ〳〵人生の戰況を惡からしめてゐる。兎に角、かういふ人々の迷夢が覺めずに其の本分を過つてゐる間は、其の國の眞の文明は到底期待されるものでない。

文がそれに當る。相手の人に告げようとする用事なり感想なりが、さながらに書き現はされてゐる文がそれに當る。一口に言へば、生きた感情なり思想なりが、生きた言葉で書かれてある文章がそれに當るのである。かの古來簡潔な書翰文の典型として傳唱されてゐる本多作左衞門が陣中より妻女の許に送つてよこしたといふ、

火の用心、おさん泣かすな、馬肥やせ。

のごときは卽ちそれに近い。この文に於いては、形式を重んずる人達がやゝもすれば穿

靜思と活動（三宅雪嶺）

煩悶の靜思に於ける、猶ほ狂奔の活動に於けるが如し。孰れも人生に缺くべからざる所に出で、而して其の餘弊を承けたるなり。靜思は甚だ善し、活動も甚だ善し、而も煩悶と狂奔とは大に心せざるべからず。

煩悶する者は室內に閉居して物思ひに日を過ごし、活動する者より觀れば、如何にも意氣地なく考へらるべし。狂奔する者は日夕屋外に營々し、靜思する者より觀れば、如何にも無意義に考へらるべし。而も煩悶も靜思として稱すべく、狂奔も活動として稱すべし。物は一概に判定すべからず、害よりせば、卽ち害あり。利よりせば、卽ち利あり。

室內に閉居して物思ひに耽れば、兎かく病的に化し易し。小人閑居して不善を爲すとやら、小人の閑居するは頗る危險にして、小人ならずとも、決して安全ならず、されど閉居すること必ずしも不可ならず。人は靜思して自覺し、己の過

鑿したがるやうな古い歷史の下に發達したといふ書翰に就ての各種の典例は全く無視せられ、特殊の文法もまた破られてゐるが、而も書翰としての任務は十分に果たされてゐるのみならず、兵馬倥偬の間に在りながら、特にこの三ケ條を擧げてはるかに音信を留守宅に通じたといふ所にも無限の妙味がある。而してこれが生きた文章といはれる所以は、一讀過すれば分る通り、型にはまつた言葉を捨てゝ、率直に日常の通用語を使つた所にあるのである。

さて、生きた文章は生きたを悟り、又た人生に妙趣あるを覺ゆ。而も單に靜思するのみにては足らず、靜思に偏すれば、往々徒らに惑ひて歸着する所を知らざらんとす、此等の人々は强て外に出でゝ活動せしめざるべからず。

屋外に奔走する者は百方身の利を計り、他を排擠して自らの地位を高め、他を陷れて其の財を攫まんとし弱肉强食を實行して得々たるが、人の生存する所以は社會の成立する所以は、實に人の活動して已まざる所に存し、奮鬪は眞に缺くべからずと爲す、若し奮鬪なければ進步發達なく、社會は停滯し、人口は減少せん。而も唯だ此の如くんば、人生は餘りに殺風景なり、人口のみ增殖したりとて何の益ありとすべき、斯く狂奔する者は靜思して自ら省み、生を考へ、死を考へ、生活に趣味あらしむべし。

靜思する者と活動する者とは、互に長所を交換すべし。世に煩悶する者、若くは煩悶せんとする者あらば成るべく外に出でゝ活動せしむるやう取計ふべし。慰藉と稱し或る議論を試むるは、却て煩悶を長ぜしむるの恐れあり、屋外に事に從

言葉で書かれたものでなければならぬとして、然らば今日の生きた言葉は何かといへばいふまでもなく、今日吾々が口にしてゐる日常の通信用語である。文章に書かれた上で言へば、即ち所謂口語なるものである。然るに從來書翰文は候文であつたからといふ理由を以て、この生きた言葉で書かれた生きた文章を捨てゝ死んだ言葉を臚列してゐる死んだ文章を書かうとするのは愚な事である。勿論今日に於いても、書翰文にはまだ大ぶ候文が使はれてゐることは事實である。けれども、それは要するに口語文を書き慣れぬ舊時代の人々が、即ち生きた新文體に對して眼を開くことの出來ない舊時代の人々が、今までの習慣に囚はれて、徒らに其の形式を踏襲してゐるに過ぎない。日が暮れ、月が經ち、年が移るにつれて、次第に候文は廢れて行つて、口語文の世の中になるにきまつてゐる。わたしが候文を全く捨てゝ、口語文を取つた所以は實に此處に在る。

けれども、世間には頑固な親達があつて、手紙を口語で書くのを以ての外のことゝして若い息子や娘に苦い顔をしひて煩悶するの暇なからしむるに若くはあらず。或は私利を計りて東奔西走する者あらば、成るべく誘ひて靜思せしむべし。幾許か靜座して書を讀めば、奪て飽かざるに忍びざるに至らん。元と身と心とは相ひ離るべからざるもの、而して動もすれば一方に偏し、偏するが故に弊を生ず、宜しく能ふ限り調和を得せしむるに務むべし。

靜思は煩悶とならざるやうにせよ、活動は狂奔とならざるやうにせよ、靜思を靜思たらしめ、活動を活動たらしむるは、靜思活動を適當に交代せしむるに在り。

【評】　自己以外に對手を置いての活動は即ち狂奔になり易い。自己以外に對手を置いての靜思は即ち煩悶になり易い。眞の意味から言へば活動と靜思とは積極的であるが、煩悶と狂奔とは消極的である。消極的である限り、何事も生活に對して無用である。積極的である限り、何事も生活に對して有用である。要するに靜思が煩悶となり、活動が或は狂奔となるは、自己を正しく知ると知らざるに職由すと言つてよい、雪嶺博士暗に此の間の消息を說いて深く吾人をして省察せしむ。味つて味ひ盡せぬ所に眞意を寓してあるのが博士の文章の特質である。

て臨むやうな場合があるかもしれぬ。文章界の大勢はもとより時勢に後れた頑固な老人達に依つて暫らくなりとも堰き止められよう筈はないし、自己をさながらに表現するに當つて、人に氣兼をするやうな必要ももとより無いが、併し書翰文の文體の相異は、親子の間で無理に反抗するやうな態度を取つて、互に不快の感を抱かねばならぬほどのことゝも思はれない。だからもしさういふ場合に出會つた人は、暫らく百歩を讓つて、なるべく自由な、囚はれない範圍に於て、候文體を活用するやうにするがよい。さういふ人達の參考の爲めに、私は先きに掲げた到着報知の文例を一つだけ、次ぎに候文體に書き改めておくことゝする。

拜啓。只今一同無事到着仕候。逗留中は種々御厄介に相成難有存候。何れ後便を以て萬々可申述候へども、不取敢御禮旁御報知まで如此に御座候。早々。

この間私は、ある必要から若い人の書いた文章を澤山見た。其の中に『寂しい男』といふ題で、次ぎのやうな書出しで書いて行つた抒情文があつた。——

翻譯文

諫（坪内逍遥）

妃　みづからがどのやうな事をしたればか、現在の母にむかうて其樣にはしたなう聲高に？

ハム　どのやうなとは、これ母上。廉恥の面に泥を塗り、淑德をも僞善と呼ばせ、清淨の戀の額から薔薇の章を剝取つて水腫物を代となし、堅き夫婦の契約をも博徒の誓言と一つにさする御所行ぢやわ！　神に誓うた約束から其精神を拔去つて、有難い宗教をも譫語とする御所行ぢやわ！　天もこれを見て面を赤うし、此堅い大塊も、愀然として色を失ひ、世界が今にも滅びげに憂へ悲しむ御所行ぢやわ！

妃　とはまあ、どのやうな所行ぞいの？　序開から凄じい其見脈。

ハム　これ御覽ぜ、此繪姿と此肖像、血を分けた兄弟ながら、此君の氣高さ、立派さ。太陽神の縮髮、デョーヴ神の高額、軍神のやうな此眼には三軍戰き服すべく、又此の立姿は使神マアキュリーが雲に冲る高峯に降立たしたる御風情。姿容の美を集めてあつぱれ人間の鑑ぞとあらゆる神々が極印をば附けさせられたと見ゆる、是れこそ前の御夫。さて此方を御覽ぜよ、これが今の御夫ぢや。黴の着いた麥の穗同然、健かな兄穗を枯らす人非人。母上、こなたは目は無いか？　此樣な美しい山の牧場に飼はれた身でようも此樣な泥沼で餌をあさらうとなされたな？　こなたはこれでも目があるか？　よもこれを思案の外の戀の習ひぢやよとはお言るまい。分別盛りの御年齡、狂ふ血は鎭まつて、事々に辨別のあるべきに、何として此像から此像へ御心が移つたぞ？　情慾のあるからは、一定感覺はおじやらうに、其感覺が痲痺れたか？　なんぼ狂うた感覺でも、

彼は平生から寂しい男であつた。

感情の強い男で、總てのサムシングを圓滿に解せなかつたらすぐ自狂するといふ弱い理性の奴隷者であつた。

風呂から歸ると今晩も今日の學校の宿題に成て居た幾何の問題を考えて見た。

何枚も紙に作圖を書いて色々考へて見たが、結局面白い解決も得ないので、本を投げて置いて代數を引出した。

が此も應はしい自己の滿足を得るだけの解決を見出さないので、紙を墨で眞黑に塗つて本とともに本立に投げ込んだ。

「苦るしいなア」

と呟いて、兩手を火鉢の上に翳して頭をグッタリ垂れると、色々社會の活劇に付いて考えて見た。

私は此處まで讀んで來た時に、もし此の文章を添削しろといはれたら一體どういふ風にすべきであらうと考へた。全體の意味を取つて、默つて其處に書き直すといふやうな方法を取るべきであらうか？ それともまた片端から一々適切でない言葉について、其の

斯程雲泥と違ふ物を選誤へうほど狂はぬものを、如何なる惡魔が魅入りをつて母上を捉迷藏にしてのけたぞ？　感がなくも目があらば、目がなくとも感があらば、手も目もなくも耳あらば、何もなくも鼻あらば、いやさ、狂うた感の只一つだにあるならば、これほどまでには惚けまいものを。……おゝ羞恥心よ！　世の中に汝の血統は絶えたか？　邪淫に老女の心も狂ふ、血の氣湧立つ若い男女が、おのが情炎で謹慎も蠟と溶け、身を誤るは道理至極ぢや、恥ぢしむるには及ばぬわい。思慮分別も邪淫を勸め、霜の中にも火が燃ゆるわ。

妃　おゝハムレット、もう何もいうてたもんな！　そなたの語で初みて見た此魂のむさくるしさ。何ぼうしても落ちぬ程に黑々と染込うだ心の穢れ！

ハム　いや、膏ぎつた汗臭い臥床に寢浸り、豕同然の彼奴と睦言……。

妃　おゝ、もう何も言うてたもんな。そなたの言葉は劍のやうに此耳を刺すわ。

ハム　極重惡人、人非人、前の御夫に比ぶれば百分一にも足らぬ奴、王の中の下司役者、國を盜む巾着切、人目を掠め王冠をおのが懷中へくすねこんだ……

妃　あゝ、もう何も！

ハム　襤褸仕立の乞食王……

Queen. What have I done, that thou darest wag thy tongue
In noise so rude against me?

Ham. Such an act,
That blurs the grace and blush of modesty,
Calls virtue hypocrite, takes off the rose
From the fair forehead of an innocent love,
And sets a blister there; makes marriage vows
As false as dicers' oaths; O, such a deed
As from the body of contraction plucks
The very soul, and sweet religion makes

A rhapsody of words: heaven's face doth glow;
Yea, this solidity and compound mass,
With heated visage, as against the doom,
Is thought-sick at the act.

Queen. Ay me, what act,
That roars so loud and thunders in the index?

Ham. Look here, upon this picture, and on this,
The counterfeit presentment of two brothers.
See what a grace was seated on this brow:
Hyperion's curls; the front of Jove himself;
An eye like Mars, to threaten and command;
A station, like the herald Mercury,
New-lighted on a heaven-kissing hill;

適切でない理由を明らかにしながら、添削して行くべきであらうか？　それともまだ到底手がつけられないと言つて、捨てゝしまふべきであらうか？

併し何れにするにしても、今少し讀んで見て、作者に書くべきことがあつて書いた文章かどうか、又書くべきことがあつたとすれば、それは何であつたかといふことだけは當然の順序として先づ第一に知つておかねばならぬ。これは苟くも人の文章を添削しようとする者の義務だからである。そして、若し何にもこれ

A combination and a form indeed,
Where every god did seem to set his seal
To give the world assurance of a man:
This was your husband. Look you now, what follows:
Here is your husband; like a mildewed ear,
Blasting his wholssome brother. Have you eyes?
Could you on this fair mountain leave to feed,
And batten on this moor? Ha! have you eyes?
You cannot call it love, for at your age
The hey-day in the blood is tame, it's humble,
And wait upon the judgment: and what judgment
Would step from this to this? Sense sure you have,
Else could you not have motion: but sure that sense

と云つて書くほどのことが無くて作つた文章なら、思ひ切つて捨てゝもよいが、もし相當に書くことがあつて、筆を執つたものでありながら、表現の方法を誤つた爲めにかういふ不明晰な文章が出來たとしたら、出來るだけの添削をしたり、注意をしたりするやうにしようと思つた。そこで後をつゞけて讀んで行つた。

其處にはからかいてあつた。

「幾何は社會の有形の謎だらうか」とも想ふて見た。「そして其の謎を解いた者が、所謂社會の强者だらう」

と又考え込んだが、此以上の解決はつかなかつた。

が、後では總ての者が、謎の樣になつたので、此度は緣のない鏡を出して、自己の容貌を寫して見た。

洋燈の光りが顏の半面を暗く陰にして、半面は鈍いランプの光線を浦ふて爛れた樣にニキビが出て赭黑く見えてゐた。

「怎麼武男ぢやアなかつたに。——」

と思つて、此度は青い笠の上に左の鏡を持つた手を逆べて凝とながめて見た。

「ウフ、……成程好い容貌

Is apoplexed: for madness would not err,
Nor sense to ecstasy was ne'er so thralled,
But it reserved some quantity of choice,
To serve in such a difference. What devil was't,
That thus hath cozened you at hoodman-blind?
Eyes without feeling, feeling without sight,
Ears without hands or eyes, smelling sans all,
Or but a sickly part of one true sense
Could not so mope.
O shame! Where is thy blush? Rebellious hell,
If thou canst mutine in a matron's bones,
To flaming youth let virtue be as wax,
And melt in her own fire: proclaim no shame,

だ。ム、鼻の風と言ひ、眉の秀でた所と言ひ、ハハハハ……成程」

獨で已惚れて居たが、また妙に氣掛がするので、既まら一度笠の下に鏡を逆べて見た。

「ア、矢張此處で視ると色も惡い。——妙な男だなア」

と投げる樣に鏡を机に伏せて見た。

時計のチクタクが妙に癪に觸つたので、其を止め積ると、又鏡を取つて、「もう一度——」と思つて視たが余り面白い容でもないので此度は强ひて笑顏を作つて

When the compulsive ardour gives the charge,
Since frost itself as actively doth burn,
And reason panders will.
Queen. O Hamlet, apeak no more:
Thou turn'st my very eyes into my soul;
And there I see such black and grained spots,
As will not leave their tinct.
Ham. Nay, but to live
In the rank sweat of an enseamed bed,
Stewed in corruption; honeying and making love
Over the nasty sty;—
Queen. O, speak to me no more;
These words like daggers enter in mine ears.

見た。

「薩張――駄目になつてしまつた」

と元の樣に鏡を伏せると庭下駄を引掛けてからんからんと庭に走り出した。

此處まで讀んで來ると、私は、やはり誤字や蕪雜な表現やはあり乍らも、さすがに面白い處を捉へて、割合に自由に心の赴くまゝにそれを描き出さうとしてゐる努力を認めずにはゐられなかつた。私は少からぬ興味をそれにつないで後をつゞけて讀んで行つた。――

冷たい風がゾクゾク泌んだ。

木乃伊の追憶に捉はれた樣な冬の冷たい月が明るい光線を投げて、疵の隅には紅い寒梅が美しう咲いて居た。

「あゝ梅がある。人の知らぬ前に咲いて。――什麼匂ひだろう」

恁う思ふて鼻孔を摺り付けて見た。

馥郁とした香がスウーと鼻に這入ると過敏な神經がグッと大腦に傳へた。

神經が「好い匂ひだ」と言つた。が妙に呪はれた樣に思ふたから、此度は小さ

No more, sweet Hamlet!

Ham. A murderer and a villain:

A slave that is not twentieth part the tithe
Of your precedent lord: a vice of kings:
A cutpurse of the empire and the rule,
That from a shelf the precious diadem stole,
And put it in his pocket!

No more!

Queen. A king of shreds and patches:――

【評】『ハムレット』の第三幕第四場の一節。ハムレットが叔父王クローディアスの隱慝を演劇の試みでしかと確かめて後、嚴しく意見をしようと待ち設けてゐる王妃に向つてあべこべに切諫する條下である。思ひ餘つたハムレットの衷心から迸り出る悲憤の言葉は、王妃の胸を縱橫自在に刳り刳つて其處に寸毫も假借する所がない。事實に據つて理を說き情に訴へ、疊みかけて叔父王を罵り、王妃の反省を促す所、讀んでゐても胸が躍る。

『ハムレット』は誰しも知るごとく、第二の造化王と呼ばれたイギリスのシエークスピヤの最大傑作の一つで、同時にまた世界文學の粹である。而して、逍遙博士が本邦隨一のシエークスピヤ通であることは何人も知つてゐよう。其の博士に依つて就中最も精通してゐるといはるゝ『ハムレット』が譯されたのである。原文の味は勿論、色も香も遺憾なく移されてゐるのを見るがよい。われらは唯だ原文と相對照し、かの譯し難き韻文を、如何に自由に如何に明快に和らげてあるかを見て、其處から尠からぬ敎へを得たいと思ふばかりである。

臥　床（二葉亭主人）

夜祈禱を濟ましてから、粉屋のチホンはやつとこなと上衣を脫いで下衣一枚に

い枝を力一パイ揺がして見た。

するとハート形の花辨がヒラヒラと何枚も散つた。

凝と花辨の一枚を見てゐると、音もなう石の上に落ちた。

「人生はこんな者だな。畢竟人生の慰安は死だ。花辨は心地好う死んだぢやないか？」

と思ふと嫣然微笑んだ。

ふとまた思ふた。

「人生の總ての活舞台の裏面の慰安は死だ」

恁うも考えた。

又考へると別し分がなくなり、脊中ぢゆうをぽりぽり掻きつゝ寢臺の側へ來た。で、口の中でなむまみだぶ〳〵といふのが頓て大きな欠びになつたところへ、透さず十字を切掛けて、颯と形附更紗の帷を引くと、其處に古女房の大柄なやつが鹽梅よく夜着に包まつて臥てゐる。眠くさつて死人のやうになつた肥胖のその寢姿をチホンは熟々眺めて、宛で吹囊の向面だアこれ、と呟くやうに言つて、彼方向いて、卓の上の燈をフツと吹消し、藁小屋さ往ぎて眠べえちふに、どんねえしても往ぎをらねえ。忌々しい老婆だ。さア、些とんべえ其方へ寄れと又口小言いつて、拳を固めて、グイと女房の脾腹を一突き突いて、さて夜着をも掛けず、其儘側へごろりと横になり、又一度手荒く肘を喰はす。女房は含糊と身動きして、臥返り打つて、又しても高鼾をかき出すので、チホンは忌々しさも忌々しく、吻と太息吐いたが、偶と帷の隙から月光に聖像の御前の明燈が光り負けて、其影が天井を這ふのを見つけて、それに熟と視入る。庭からは習々と生溫かい夜風が開放しの窓に吹入つて、さや〳〵と木の葉のさやぐ音、土の香もすれば、今朝がた剝いだ赤馬の生皮の物道の

なつて、無意識に梅の花辨を散らし度くなつた。

花辨は矢張り音なう散つた。

「人間界の總ては「死」のサークルを以て捉はれて居るんだ。——」

結局人生を恁う思ふて見た。

而して凝と其の一枚を見入つて、人生の圓滿な解決を得たと思つて喜んだ。

かう讀み終つて見れば、作者の心持は成程と頷かれる。作者にはやはりちやんと書くべき事があつて書いたのであつた。決して漫然とたゞ筆を壁に張着けてある、その臭もする。水車を水の滴る音は徐かに銀鈴を鳴す如く傳へ來て、土手向の森に啼く青鷺の聲は、唸るのかと思はれて物凄く、之が次第に消行いた後は、此聲に脅かされた如くに木の葉が一段とさわ立ち、何處やらにブーンと心細い蚊の聲が聞える。

チホンが天井に這ふ影から眼を離して、室の向ふの隅に移せば、其處には御燈の火先が風に瞬いて、煤けた救世主の御顏の或は明るく或は暗く、宛然深い〳〵物思ひに沈んでゐらるゝやうに拜まれるので、彼は深く太息を吐いてへつたやたらに十字を切つた。

何處やらで鷄が啼く。

『ぼう、もう十二時か』と、驚く間もなく又鷄の聲、引續いて其處でも此處でも歌ひ出して、軈て壁一重隔てた所で、赤鷄が聲一杯に景氣よく時を作ると、鳥小舍の黑鷄が之に鳴合せる。之を機に小舍中の鷄が皆騷ぎ出して大きな聲でかけかまひもなく鳴立てる。

執つて文章といふものを作らうとしたのではなかつた。きらしてその書からとしたことも決して詰らぬことではなかつた。併しそれがこの作の上に十分に出てゐるか、表現されてゐるか、といへば、私は言下に「否」といふに躊躇しない。どうしてであらうか？私は諸君と共に其の課を少しく研究して見たいと思ふ。

先づ冒頭の「彼は平生から寂しい男であつた」といふ一句は、幾何學でいふと、此の文章の定義のやうなものである。すでに定義であるとすれば、以下の叙述はすべてこれ

『チョッ、忌々しい畜生めらだ！　やかましくつて、くそ、眠られやしねえ。』と臥返りを打つた。

Having finished his prayers, Tikhon Pavlovich slowly undressed, and giving his back a scratch, went up to the bed, around which the cotton curtains with their flowering pattern were closely drawn.

"God have us in His holy keeping," he murmured, his words being followed by a wide gape, whereupon he made the sign of the Cross over his mouth, and then putting back the curtain, began contemplating the cumbrous figure of his wife, as she lay under the thin folds of the sheet.

A heavy frown was the result of his thoughtful and detailed scruting of this mass of flesh, reposing in the inertness of sleep.

"Coarse creature!" he muttered, as he turned to the table and put out the lamp. Then beginning afresh to rail at his wife, he continued:

が解説でなくてはならぬ。所がこの文章の記述は、必ずしも劈頭に掲げた定義の解説になつてゐない。全體に作者のいらいらする氣分といふやうなものは多少出てゐるが「寂しい男」といふやうな特色は少しもそれを見出すことが出來ない。作者の考へでは、人生の終局が死であると思ふやうな性格であるから、即ち寂しい男であるといふつもりかも知れぬが、併し人生の終局はどんな快活な人が考へても或は又、誰一人考へるものがなくつても、やはり終に死である。だから、死であると思

Didn't I tell yon, fat stupid, to go and sleep in the hayloft? But no!—not she. Here make room a bit, you great log?" accompanying his words with a blow from his fist in her side, by way of warning.

Then he got into bed, and lying down without drawing the sheet over him, he gave his wife another rough push with his elbow.

She grunted, floundered about a bit, turned her back on him, and started snoring again.

Tikhon Pavlovich gave a weary, discontented sigh, and began staring through the chink of the curtain at the flickering shadows cast over the ceiling by the moon, and dy the lamp which was always kept burning in one corner under the picture of the Saviour. The warm night breeze came stealing in through the open window, and with it the whispering of the leaves, the scent of the earth, and the odour of the freshly-played skin

of the bay horse, which was spread out over the wall of the barn.

The falling of the water-drops from the mill-wheel made a soft, low sound, while from the wood on the farther side of the dike came the cry of the screech-owl borne plaintively and ominously through the air ; as it died away, the rustling of the foliage became louder, as if the trees were relieved from some sense of fear, and from near or far arose the shrill note of the mosquito.

Having lain thus for some time, watching the shadows as they came and went across the ceiling, Tikhon Pavlovich turned his eyes towards the principal corner of the room, where the soft flame of the lamp, blown by the breeze, rose and fell before the picture of the Saviour, now sending a trembling light across it, now leaving it in shadow, and as Tikhon Pavlovich matched the face, he seemed to see an expression on it as of

つたといふことを以て、寂しい男を說明し得たとすることは出來ない。尤も人生の終局は死であるといふ觀念を抱いてゐるが爲めに、その日その日の生活を寂しく暮してゐるといふのならば、それは寂しい男といつてもよいであらうが、この文章の主人公は、たゞ「人生の終局は死である」といふ平凡な解決を得たにとどまつてゐて、それに依つて日常の生活を支配されてゐる課ではない。卽ち冒頭の「彼は平生から寂しい男であつた」といふ一句と以下の叙述とは何の關係もないことになる。

one thinking of something great and sorrowful. He sighed, and mede the sign of the cross.

And now a cock began to crow.

"Can it be already midnight?" Tikhon Pavlovich asked himself.

A second cock was heard, then a third, followed by another, and another. Finally, close at hand, behind the house, the red cock began vociferating with all his might, the black cock answered from the poultry yard, and in another minute the whole fowl-house was on the alert, calling out the hours in the shrillest and most exasperating manner.

"The brutes!" exclaimed Tikhon Pavlovich, tossing about in anger; "There is no more sleep for me.....I wish they'd crow themselves to death!"

【評】『ふさぎの蟲』の冒頭である。二葉亭主人が、飜譯の巧かつたことは今更

それに第一文章を書くといふ上から言つて、「彼は平生から寂しい男であつた」といふやうな抽象的な說明をするのは有効な方法ではない。本當に寂しい男であるかどうかは其の人の不斷の生活の表現に依つて自然と讀者の胸に感ぜられて來なければならぬ。「彼は利口な男である」といふよりも、寧ろ具體的に其の男の利口である所以、利口である事實をそこに描き出した方が一層有効に彼の利口であることを讀者の胸に會得させ得るものである。この文章でいへつてある。

ば、「風呂から歸ると……」といふ所から以下の方に、「彼」の寂しい生活が遺憾なく展開されてゐれば、冒頭に「寂しい男であつた」と斷られてゐないでも、讀者は「彼」の寂しい男であることを自然と感じたであらう。所が、この文章には、抽象的にこそ寂しい男であると說明してゐるが、其の實際の生活には、少しも寂しい男らしい所が現はれてゐない。かういふ書き方では作者はたとへ千萬言を費しても到底其の目的を達する事は出來ないであらう。

その次ぎの「感情の强い男いふまでもないのであるが、かう英譯など〻比べて見るとそれが一層よく分る。勿論主人の飜譯は直ちにロシヤの原文からやつたのであるから、これを英譯と比較した所で、微妙な點を會得することは出來ないが、英譯で數語を用ゐて漸く其の意味を傳へてゐる所を主人が一句か一語で其れを現はしてゐるのなどを見ると、その巧みさに寧ろ驚嘆せずにはゐられない。

譯文には譯臭がなければいけないなど〻いふ說もあるが、昔から味噌の味噌臭きは上味噌にあらずといはれてゐる。飜譯といふものが他を化して我がものとすることである以上は、やはり譯臭などはない方が好譯であらぬばならぬ。二葉亭主人の飜譯にはこの譯臭といふものがない。而かも其の表現せられてゐる事が我が國のことでないといふことは直ちに首肯かれるやうによく出てゐる。玆に常人の企て及ばぬ秘鑰があるのである。

『ふさぎの蟲』はロシヤ現代の小說家ゴーリキイの原作で、英譯はラツボポートの "Heartache." から抄出したのである。

で、總てのサムシングを圓滿に解せなかつたらすぐ自狂するといふ弱い理性の奴隸者であつた」といふ所も、「彼は平生から寂しい男であつた」と同じく、全く抽象的な說明である。若し意味が滯りなく表現されてゐたとしても、私はかういふ說明の書き加へられることを欲しないのであるが總じて徹底を缺いた文句の少くない此の文章の中でも、殊にこの數行は不明晰を極めてゐるが故に、私は冒頭の二行と共に、この數行をも全然抹殺してしまひたいと思ふ。有つても無くてもよいものなら

叙景文

武甲山（大町桂月）

强石に一泊して、あくる日、一番馬車にのり、大宮よりは一里手前なる影森村にて、馬車を下る。こゝは武甲山の西端也。溪に沿うて山に入ること四五町にして、觀音堂にいたる。秩父二十八番の札所也。一山骨立して堂を壓す。その巖に鐘乳洞あり。橋立の穴とて、天下に有名也。堂前の家に就いて、導を乞へば、軒につるせる板をたゝく。數十間隔れる一屋より老女出で來る。その女に導かれて、もと來し路を一二町下り、窟に入りて、燭を點じ、導者も手にし、われも手にす。少しゆきて左に轉じ、行きつまりて引かへして右に進む。上下すること一ならず。

ば、寧ろ無い方がよい。況して無い方が印象を混雜せしめず、効果を大にするとすれば勿論無いに越したことはない此處の敷行は、實にその「無いに起したことは無い」場合に當つてゐる。

併しこの敷行に就いては、今少しく諸君にお話しておきたいと思ふ。それは、文章を書かうとする若い人達が、やゝもすれば陷りさうな穽を幾つもこの敷行は持つてゐるからである。

其の第一は「感情の强い男で」といふやうな、抽象的な說明句を用ゐることである。

窟內、形似多し。導者一一指して朗讀的に說明す。風來りて、燭消ゆると同時に、窟外に出づ。窟に入りて出づるまで、十分かゝりたり。窟の長さは百間ばかりかと思はる。出口が入口と反對の方向にあるは、洞窟として異數とするに足る。形似多く、從つて說明がうるさきまでに多きにても、巖石の千態萬狀を呈するを知るべく、而かも窟內玲瓏として、自から快感を覺えしむ。江の島の穴の如きは、その類多けれども單調にして、陰鬱なるに厭く。穴も鍾乳洞にして、始めて、一種の美あるを覺ゆ。かねて、造化の天斧の靈妙なるに駭かざるを得ざる也。

武甲の最高峯へとて上る。ぽつ〳〵松あるのみにて、見渡す限り、草の山也、はじめより草の山にあらざりしことは、廢れし炭燒釜の多きにても知らる。あはれ、滿山の木、一片の烟と消えたる也。清水流るゝ處に裾して、握飯を食ひ、水を飲みて茶に充てたり。又行くに、路二ツにわかる。右が本道とは思ひしかど、最高峯左に目の先にあればとて、左の路を取りしに、果して、廢れし炭燒釜に行きつまりぬ。路なき山を上る。このあたりは、雜木あり。伐られし木重なりて、

併し、これは前に述べた「寂しい男であつた」と同じ行き方であるから、また改めて彼是は言はなくとも、諸君は既に其の缺點をよく會得されたと思ふ。たゞ其の異る所は「感情の强い男」の方が「寂しい男」よりも一層曖昧で明確を缺いてゐることである。卽ち「寂しい男」といへば、ある程度まで、其の面影を思ひ浮べることも出來るが「感情の强い男」といつただけでは、全く雲を摑むやうな感じしか與へられない。理窟の方から考へてさへ、どういふ性質の男か分らない。情に脆い男も感

枝みな下に向ふ。これや自然の逆茂木、辛うじて踏み越え踏み越え、力つきて誤つて握る摑の木、敗戟を擁して人の手を刺すも苦しや。一鳥近くちい〳〵と啼く。われ上るにつれて、鳥も上る。天帝の使者、われを導くかと疑はる。『何處へ行くんだ』と、頭の上にて、銅鑼聲ひびくに、頭を上げて見れば、樵夫らしき男也。『武甲山へ』と答ふれば、『馬鹿を見たなあ、此方へ來い〳〵』と言ひすてゝ行く。うれしや、こゝに樵徑を得たり。やがて、その樵徑もつきて、おや〳〵と困りしが、意を決して、又も逆茂木を越えゆけば、峰背に出でたり。路もあり。これ影森よりの路也。三四町行けば、一路北より來れるに合す。三十八丁目としるせる石立てり。これ大宮よりの路なるべく、こゝに來れば、しめたものとうれし。町目の石に導かれて、終に五十二町目にて、御嶽大神の祠に達す。されど、こゝは、常盤木つらなりて、眺望なし、右に數十間ゆきて、最高峰にいたる。小祠あり、三角點もあり。峰頭尖りて四面目を遮るものも無し。近く秩父の群峰を見る。山の皺、縱橫に錯綜して、山嶽の壯觀を極む。遠く目を放てば、關東の平原、蒼茫

情に強い男であれば、情に強い男も感情の強い男だからである。いゝ意味にも用ゐられゝば悪い意味にも用ゐられるからである。

併しひそかに思ふに、作者が此處に使つたのは、さういふ本來の意味の「感情の強い男」ではなくて、たゞ神經質の男位の意味であらう。物事が自分の思ふやうにならぬと無闇にいら〳〵した氣持になつて、自分で自分を抑制することの出來ないやうな男のことであらう。後の叙述を見れば、どうもさうらしく思はれる。もしさうであつたならば同じ抽象的の言葉ながら、まだ「神經質の男」と書いた方が、「感情の強い男」といふよりも、幾らか作者の所期を明確に表現することが出來る。

第二は、「總てのサムシングを圓滿に解せなかつたら」といふこのサムシングといふ言葉である。外國語を少し學びはじめた位の人達がよくかういふ風に外國語を文章の中に使つたり、また會話の中に使つたりするが、はたから見ると、隨分きざな、いやなものである。尤もこのサムシングといふ言葉などは、本當の意味に使はれる場合に於ては、

として天と連れり。筑波や、那須や、高原や、日光や、庚申や、赤城や、榛名や、浅間や、大山や、關東の名山は、幾んどみな眸中に收まる。富士さへ、頭を出せり。妙法、三峰は、諸高峰の腰に低く見ゆ。荒川の末は、烟靄の中に沒し、多摩川は、ひろき砂磧を帶びて横はる。脚下には近く大宮の白壁を見る、石を投ずれば、屆きさう也。大宮の盆地も、横より見れば、丘陵起伏して、眺望さまで開けざれども、こゝより見れば、丘陵は平地と一ツになりて、六七里四方、平かにして、別に一區をなす。荒川その中央を貫き、その支流、西に高平川あり、東に生川あり。白壁諸處に散在す。大宮についで、大なる白壁の一塊は、小鹿野なるべし。嗚呼雄大なる眺望哉。この山、海拔四千三百尺、武、甲、信の三國に跨れる甲武信嶽の八千尺以上ある、武甲二國に跨れる雲取山の六千尺以上あるに比して、其高さを競ふ能はざれども、秩父諸峰中、特立せるは、この山のみ也。之を大宮あたりより仰けば、山骨削立して、峰勢俊秀、勇士の俤にも似たり。秩父嶽の名この山の獨占に歸したるも宜なる哉。

【評】『關東之山水』の中の『武藏の山水』の一節である。無造作に筆を着けて意の往くまゝに文字を成して來るといつた風の文章であるが、しかも其の内、おのづからにして事も、景も、人も、筆端に活躍してゐる。

桂月氏が草鞋を穿いて、蓆を着て、杖を突いて、飄然として家を出で、東京の市中を其の婆で平然として横斷して、よく旅立たれたのは有名な話であつた。腮の下の疎髯を撫しながら、古びた銀緣眼鏡を傾けて、停留場に電車を待合せてゐる氏の姿を見たりすると、どうしても浮世の外に超然としてゐる人を思はせられた。文章は人格の反映であるとは、氏の常に口にせられた所であつたが、實際氏の文章は、此の說を裏書して餘りあるものである。飽く迄垢拔けがしてゐて些の俗臭をも留めてなゐい。ちやうど氏の仙骨飄々として物に煩はされぬ姿を其の儘茲に見るやうな氣持がする。ほんたうになつかしい。